數百人のものは隊を作りて森林の中を往來せしめらるるに、凡て額に烙印せられ居れり。何人も彼等に食物を供給すべからざることを命令せられ、之を犯す者は死刑に處せらるべかりき。

水責

海濱に近き或場所に於ては多くの圍を作り、其中に全家族を閉込めたるが、潮低き時は乾き、滿潮となれば半以上潮水に浸さる。是等は飲食を許され、十二三日は大抵生存せり。

親子責

又兩親には目蔽を施し、其兒を傍に置きて晝夜苦しましむれば、小兒は父母に憐を乞ひ、基督教を捨てよ呵責にえ堪へずと叫ぶ。此悲鳴は兩親に深き感銘を與へ、唯哀傷の爲のみにて死せし者もありたり。

其他の慘刑

多くの者は爪を拔かれ、又手足に鑽もて孔を穿たれたるもあり、或は水を多量に飲ませて仰臥せしめ、上より强く踏みて口耳鼻孔より水を吐出さしめられしもあり。

其他殉教者を腰掛に座せしめ、腕を胸の上に十字に組ませ、身體を後の柱に緊縛し、後手足の爪の間に鋭き釘を刺したり。此呵責を五六日以上も反覆して行ふ。又或婦人を蛇の入り居る盥に容れおくに、蛇は陰部に這入りて腹内を食せしこともあり。

兩脚を宙に吊りての呵責

最も殘酷なるは横棒に罪人の脚を吊り、其頭を井中に降すことにして、井の上には横棒を置き、其端に滑車を附して之に繩を通し、之を被責者の足に結びて井中に下し、足のみ見ゆるまで沈む。其頭部は數個の傷を被り、血を滴らしむれど、而も心臟を無能にさせぬ程にすれば、五六日生存せり。

フランシス・カロン (Francis Caron) の著に、一教徒の此拷責に三日間堪へしが、終に羅馬教を捨てし者の語りしことを記し、此刑到底火刑其他の苛責の及ぶ所にあらず、臟腑は咽に下りて口より出でんとするが如くに思はれ、血は眼、口、鼻、耳より迸り出づと。

* * * * * * *

背教者多數

此迫害は宗教上操守を變へざる者をして慘憺たる最期を遂げしめ、よりて薄志者を背教者に轉ぜしめ、十六年を經て四十萬人中基督教徒たるを宣言する者一人も無きに至れり。

* * * * * * *

當將軍樣の葡人に對する禁令　葡人を謫す

當將軍樣 (Toxogunsama) は十分に基督教を撲滅したるを以て、一六三九年媽港 (Macaco) の葡國商人に特別の公文を發して、媽港より船の日本に來るべからざることを嚴命し、若し禁を犯して來るものあらば、船を毀ち、船員を死に處すべし。其故は葡人は竊に僧を派して羅馬教を宣布し、二箇年前の如く臣民をして暴動を起してエムペロルに反抗せしむるが如きことあればなりと。此暴動とは有馬の近傍にて山と堅城ある谷との間に七萬の基督教徒の武器を執りて起ちしが、叛徒の大部分は戰死せしことを指せり。

媽港日本に使節を送る

媽港の住民は日本との利益ある商業の禁止せらるるは大事件なりとて、使節を日本に送り、エムペロルに對して彼等は

僧を送らざること、並に有馬の叛亂に關知せざることを告ぐるを適當と信じたり。使節ルイス・バエズ・パセコ (Luis Paez Pacheco) 等は準備として一年を費し、一六四〇年仲夏彼等は六十九人の士官と共に出帆せり。港に着するや、彼等は奉行ババスロ・ザエモン (Babasuro Zayemon) に捕へられ、大砲は船より下され、海員は番兵に監視せられぬ。

エムベロル媽港の使節一行を斬に處す

ザエモンは直に之をエムベロルに傳へしに、エムベロルは高官二人及媽港より長崎に來りたる葡人と同數の處刑者を派遣せり。此高官カンガ・チウミニンブ (Cangga Chuminimbu) 及ノヴァガ・マンシンビョーエ (Novaga Manximbioye) は葡國の使節を召喚し、誰かエムベロルの命に背きて日本に上陸するの不屈を行はしめたるかを問ひしに、使節は答へて曰く、エムベロルの命令は貿易を禁ずるのみなるが、彼等の船は今商品を載せず、但貿易禁止につきてエムベロルと商議せんが爲に使節として來りたりと云へるに、日本の二貴族は之に答へず、當將軍樣が葡人に下したる宣告文を讀上げたり。

宣告文内容

其主意は下の如し。日本に基督教の弘布せられしより(明にエムベロルの命令に反して)、帝國内の惡事亂行を增長せり。之が爲に必要上彼等に重罰を加へて、葡人との交通を絶つの止む無きに至れり。而もエムベロルの此命令あるにも拘らず、彼等は強て日本に來り、多くの僧は今日に至るまで潛伏せるが、其目的は人民をして公正且適法なる治者に反對せしめ、帝國を血の浴室に變じて外國暴主の治下に置かんとす。葡國の使節は日本に僧を派遣せず、又之を日本に在留せしめしこと無しと辯解すれども、媽港の書簡中には之に關して言及する所無し。故に使節の言には疑ふべき所あり。此理由によりエムベロルは彼の權威を犯す者を罰し、彼等を凡て死に處す。唯下級の海員は之を生還せしめて、媽港に在る葡人に此冒險に關する報告をなさしめ、後來敢て日本の港灣に碇泊せんとする者の同樣の運命に落つべきことを豫期せしむべしと。

六十一人斷頭せらる

此公文を讀み、日本語より葡語に飜譯したる後、所罰者は長崎に近き一丘の上に送られたり。其數六十一人、葡萄牙人、西班牙人、支那人、ベンゴール人其他を混ず。やがて六十一人の刑吏は之を斬首せり。屍體は四壁の間に葬られ、其罪狀は壁面に刻せられぬ。生還を許されたる者十二人ありて、媽港に此報告を傳へ、西王フィリップにせよ、將又基督教の神にせよ、日本に上陸せば其頸を日本刀の下に差延ぶべき旨を通ぜしめたり。

繩を以てする呵責

既記の慘酷なる拷問呵責の外に尙新奇なる方法發明せられたり。時には火の四隅に近く四本の繩を締結して基督教徒の胴を縛し、繩を以て彼等の身體を擡げ、高處まで曳上げたる後、一時に繩を手離して被責者を地上に墜落せしむ。彼等は一時之が爲に生命を失ふや、處刑者は直に其方に驅付けて、口中に强壯劑を注入して再び蘇生せしめ、其呼吸を返すや、更に呵責を始む。

竹筒を以てする呵責　葦、炬火等を以てする呵責

又或時は竹筒に硫黃其他の燃燒すべき藥品を詰め、彼等の口を塞ぎて筒の端を鼻孔に插入し、他端に火を點ず。之が爲に被刑者は顏面の皮膚を剝脫するのみならず、頭部を深く火傷す。又處刑者は鋭き葦を以て彼等の肉を切りて創傷を骨に達せしめ、點火せる炬火を以て之を燒くに、皮膚は縮れてふら〳〵と垂る。他のものは裸體とせられて手足を縛せられ、日本の竹を以て打たる。

母子に對する慘虐

幼き小兒の母は他に越えて苦めり。處刑者小兒の顏を母の顏に劇しく打ち付くるに、小兒の號泣すればするほど母は苦惱を感ず。他の者には綠色の蒲鞭を熱して之を彼等の裸體に加へ、以て頭より足まで皮膚を黑く燒く。又燃ゆる炭を手に置くことあり。若し之を投棄すれば、日本の判事は基督教を否定せる徵たるを宣告す。小兒は熱せる鑷子を以て肉を骨より離され、又耳鼻を剪取られぬ。

島原に於ける布教幇助者の處刑　呵責によりて背教を宣する者

背教を悔いたる者の處刑

島原に於て豐後殿は基督教徒五十人を捕へたり。彼等は凌辱せられたる姿にて市內を引廻されたる後、海岸に近き平原に送られしが、其中トマス・キビオイウス、バウル・ナガタ、其妻クララ、レオナルヅス・サクザエモン、ヨアネス・ゴンザエモン等七人は布教の手先となれる廉を以て峻刑を受けたり。卽ち前記の原に七個の穴を掘り、其深さ三尺幅六尺にして相互に齊しき距離を保ち、各穴に太き柱を立て、其端には木を釘付して恰も十字形の如くす。罪人は座して腕を延ばさせ、之を十字に緊縛す。頸は中央をくり拔きたる二枚の厚き板の間に錠もて締められ、頭部は其板の上に見れて動かず。豐後殿は他の處刑者と共に此役目を行へり。最初に作左衞門の右腕を徐々に鋸にて切離し、次には緊縛せられたる彼等の頸を鋭き竹を以て擦り始め、此くて生じたる傷口には鹽を振掛く。五日間擦り續くるに、彼等の縛を解くことなく、亦少しの休息をも與へず、處刑者は互に交替し、醫は常に附添ひ、時々强壯劑を小き漏斗にて口中に注入せり。是れ長く活し置かんが爲なり。

殘りの四十三人は第一日第二日に於ては之を見物せしめられしが、第三日第四日には手足を縛せられて鋭き木片の上に据えられ、其膝の上には大なる石を載せられて、前日の犧牲者の傍に置かれぬ。薄暮に近く市中を經て獄に送らる。其中孰れか一人其鋭き木片より落つることあれば、日本人は彼等に對して喚聲を擧げて囃せり。獄中にての拷問は點火せられたる炬火を以て始まり、鋭き竹は爪の間に差入れられ、漏斗を以て水を腹に注入したる後、腹を踏みて之を吐かしめられたり。之が爲に四十三人は悉ちにして背教者となり、獨りコンガ(Conga)の青年ミハエル・ソーザブロ(Michael Xozaburo)は之を肯んぜざりき。島原の近くにありし七人も操守固からず、第一日に五人は受洗に背き、最後の夜にはナガタも之を否定せり。唯一人トマス・キビオイウス(Thomas Chibioius)は七日に亙りて此呵責に堪へしが、處刑者も倦怠して頸を鋸にて切落せり。時に一六三〇年五月晦日なり。ナガタ外二人は信仰を捨てたれども、豐後殿の命によりて殺され、他は獄外に放たれたり。クララは苦痛に堪へたれども感覺を失ひ、故に復せずして間もなく死せり。ゴンザエモンは背教を悔いしを以て、木製の鋸を以て首を斬られ、刀を以て胴を斬られたり。

志岐の怖るべき牢獄

志岐(Xiquo)島の富岡(Tomioca)市より遠からぬ處に領主トビョーヨ(Tobioio)は大なる獄を野中に建てたり。男女小兒と多くの室あれども、甚だ矮小にして囚人は座してあるのみにて、立つことを得ず、又左右に動きもならず、壁と天井とには鋭き竹及釘を植ゑたれば、多くの者は不眠及不斷の苦痛の爲に死亡せり。天草に於ては家を釘付にして餓死せしめたり。

當將軍樣(家光)の死　將軍監督者の寬大

一六五三年(譯者云く、德川家光の薨去は一六五一年なり)エムペロル當將軍樣は繼嗣無くして歿せしが、內府樣の家系は第二代にて終れり。エムペロルの職位を繼ぎたるは公子カネ(Quane)にして、五人の監督者之を輔導せり。コン

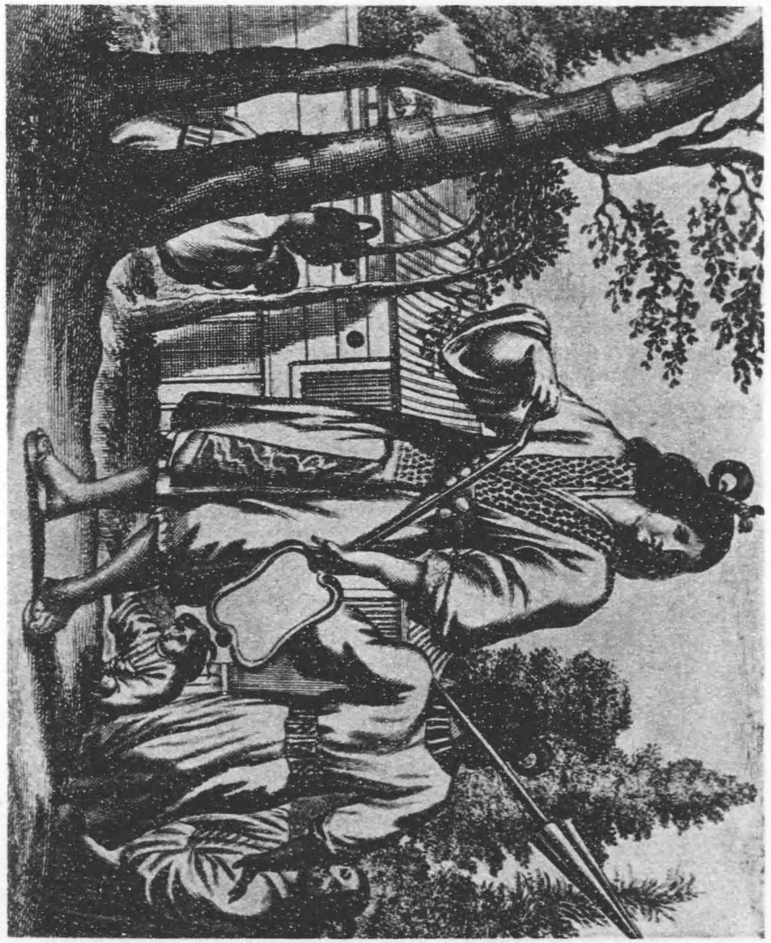
ゴノ(Congono 左近衛權中將保科正之)、ボンゴノ(Bongono 安部豐後守忠秋)、インハノ(Inhano 松平伊豆守信綱)、オエモ(Oyemo 土井大炊頭利勝)、サニキノ(Sannikino 酒井讃岐守忠勝)是なり。基督教は今や全く根絶し、之が爲に發布せられたる嚴令も忘れられ始めたり。エムベロルの監督者は外國貿易に寛大にして、以前のエムベロルとは異れる政治を施せり。從前の血腥き法を漸次に廢止に歸せしめしより、多數の貿易者急に海岸に來集するに至れり。西班牙人も亦以前の貿易を再興せんと希望せり。日本人自らも外國に出でて貿易するの許可を得しが、此は是まで久しく禁止せられたる事なりき。

エスイト派日本に還らんと欲す

然れども主としてエスイト派は再び勇氣を興し、直に日本の隣邦東京、交趾等に廣まり、機を見て日本に上陸して以前の計畫を進行せんと考へたり。然れども其後成功を見る能はざりしは、エムベロルの監督者以前の如く血の浴室を作る程には無けれども、彼等の侵入に警戒を怠らざりしを以てなり。

當將軍樣大に男色を好む　結婚　乳母の諫言

カネが日本の王冠を得たることにつきては少し記する所あるべし。當將軍樣は甚しく男色に溺れてありしが、幾年を經てやや老成に達して其繼嗣無きを認むるや、之が爲に內亂の起らんことを憂慎せり。ダイロも之に關しては憂慮あり。よりて近親の美女二人を當將軍樣に送りて、其一人を選びて御臺(Midaiy)たらしめんとせしかば、エムベロルは容貌の美なる方を選びたり。然れども男色を好むこと從來の如くなりしかば、御臺は心安からざれども、其夫の行爲を嫌ふことを知られては其怒に觸るべしとて忍耐せり。此かる間に御臺の乳母あり、老年にして忠實、亦生家の門地も高かりしを以て常に尊敬を受け居たるが、之を聞くや、折を見てエムベロルをして御臺を愛せしむるやう諫言せん



當將軍樣其內室を禁錮す

後姿さる詩人

と待居たり。或時乳母は當將軍樣の機嫌好きを機として謁を請ひ、繼嗣を得て天下の泰平を來すべきことを諄々勸說したるに、エムベロルの憤怒甚しく、之に對ふるに一言を以てせず、急に建築掛の長を召して城壘の如き宮殿を作らしめ、堅固なる壁、深き壍、大なる門、許多の莊麗なる室を設けしめたり。

建築の竣成するや、御臺並に其姉妹、母、從者を此に入れて、人目に觸れしめざらしめたり。

御臺の乳母は此くなりしにも拘らず尙も兩人の愛の成らんことを欲し、其目的を達する爲に日本の各地より美人を召して、巧に之をエムベロルの前に出ししに、其中に具足師の女眼を惹き、程無く一子を孕みたり。然るに其血統卑きを以て國內の貴族、廷臣、宮女等の間に不平あり、竊に相謀りて其子の生るるを待ちて之を殺せり。エムベロルは此隱謀を知らざりしかば、一同すべて事無きを得たり。

かくしてカネ(Quane)は相續者となりしが、是れ血統に於て當將軍樣に最も近きが故なり。

フリシウス等長崎に旅行す　着京

蘭國の使節フリシウス及ブロークホルストは一六五〇年辭去の許を得、長崎に向ひて旅行せしが、四月二十七日都に着して三日半を同地に費し、市內の重要なる家々の招待に應じて之を歷訪せしが、彼等は男女小兒の物珍しく群る中を輿に乘りて行けり。

日本婦人の衣裳

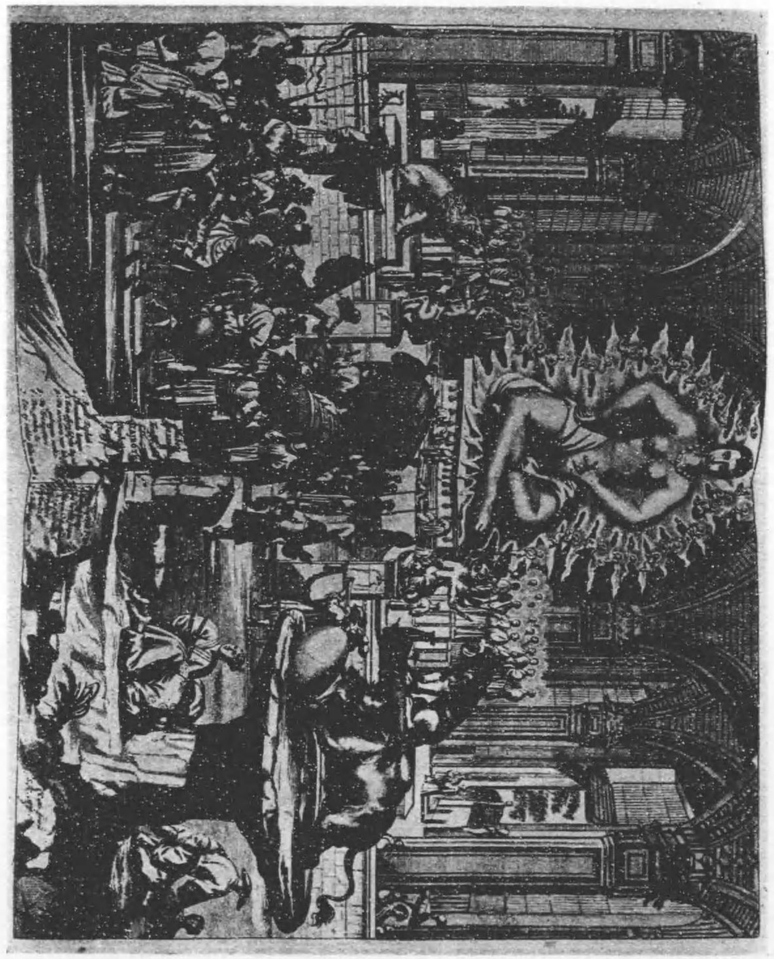
婦人は既婚未婚を問はず髮を綺麗に結ぶ。日々櫛を入れ、鷄卵の白身を以て之を滑にし、鏡の如く輝き、黑玉の如くに黑く、その束ねたる髮は後方に肩の上に垂れたり。而して一房を額の上に置く。其頭の大なることは他國民と區別すべき所なり。男女ともに長き「セマル」(Semarrs)を着る。此「セマル」膝より稍々下に垂れ、廣き袖を有し、其袖は緩

く折返され、絹その他を以て緣を取れり。胴の廻りには巧に刺繡せる廣き帶を捲く。婦人は外出の時長き柄の扇を持たざるもの稀なり。

大佛の殿堂

使節の巡覽せし殿堂中に大佛に獻げたる一堂あり。壯大にして美術的なるのみならず、亦頗る高價のものなり。門の兩側に二の恐るべき惡魔の巨像あり。手には小劍を持ち、腰には大劍を佩び、互に睨み合ひて、今や戰はんと構ふるものの如し。此通路を入れば方形の中庭あり。周圍には廻廊ありて石の柱を以て支ふ。各柱の頂には燈籠の如き巧なる箱懸れり。第二門の前に二個の石造の大獅子あり。其間に路ありて教會堂に通ず。教會堂内には一個の恐るべき像ありて、裁縫師の如く足を交叉して座せり。其高さは會堂の穹窿の屋根に達する程なり。日本人の語る所によれば、此像は木を以て作られ、漆喰を塗り、銅を以て蔽ひ、二重の鍍金を爲せるものなりと云ふ。頭髮は黑く縮れて黑人の髮に似たり。此偶像の大なるは其手にて判斷せらるべし。普通人の手よりも著しく大なれど、身體の他の部分に比して小し。像の全體は華美なる鍍金の發射する光の輪の上に座せる婦人を表せり。此圓形を爲したる光の中に諸種の形狀をなせる小き多くの像あり。兩側には尙多くの等身像あり。頭の周圍には輝ける輻射線あり。すべて豐に鍍金せらる。其樣恰も版畫に見る聖徒の如し。

使節は各日本人に舁かれたる輿に乘りて此殿堂に入れり。前後兩側には東印度會社所屬の使用人より成る大なる一隊行けり。各階級の日本人は一行を見んとて犇きたり。入口に喇叭手二人佇立して、彼等の堂内に在る間吹奏せり。此音に牽着けられて多數の人群來せるが、其間使節は驚嘆して巨像を見たり。像下の香案は地上より些か隆起し、其上には數箇の燈籠點火せられてあり。



大佛殿

日本人は毎日此處に來りて禮拜せるが、或は地上に俯伏し、或は頭を地まで低る。

牡牛の殿堂

大佛殿の外に觀賞すべきは牛の殿堂なり。牛は金を以て作り、背に大なる瘤あり。頸の周圍には寶石を象嵌せる黃金の頸輪あり。角を一卵に觸れ、卵上に前脚を載せ、後脚は石と土とを混じたるものの上に在り。此牛と卵との下に凹みたる石に貯へられたる多量の水見ゆ。其石の基礎としては方形の香案あり。香案の脚には多くの日本文字を彫せり。

佛僧の牡牛に關する虛談

佛僧は此牛に關して日本人に語るに妙なる寓話を以てせり。卽ち世界は創造以前には一大卵中に包まれ、其殼は眞鍮にて成れり。此卵と共に世界は水上を浮びありき、終に月はその透徹せる光線の力を以て殼底を聊か引上げしが、其部分は後に至りて土と石とになりたり。その上に卵は安定せしに、牛は之を見て眞鍮の殼を强く衝きて殼を破れり。是に於て世界は出來れり。然れども牛は此困難なる仕事に力を用ひながら烈しく呼吸せしに、その呼吸一瓢中に入りて、其瓢は一個の人間となれりと。佛僧は瓢をパウ(Pou)と呼び、最初の人間をパウラン(Pourang)といふ。

牡牛の魔王

ガスペル・ヴィレラの談に、彼の日本に在りし頃は惡魔は日本人を魅瞞し、彼は牛の王なりと云ひ、人々が彼の爲に殿堂を建て、牛の形を作りて崇拜するまでは人間を罰することを休めざるべしと云へり。此理由より日本の或處にては牛を殺せば直に死すと傳ふ云々と。

*　*　*　*　*　*　*

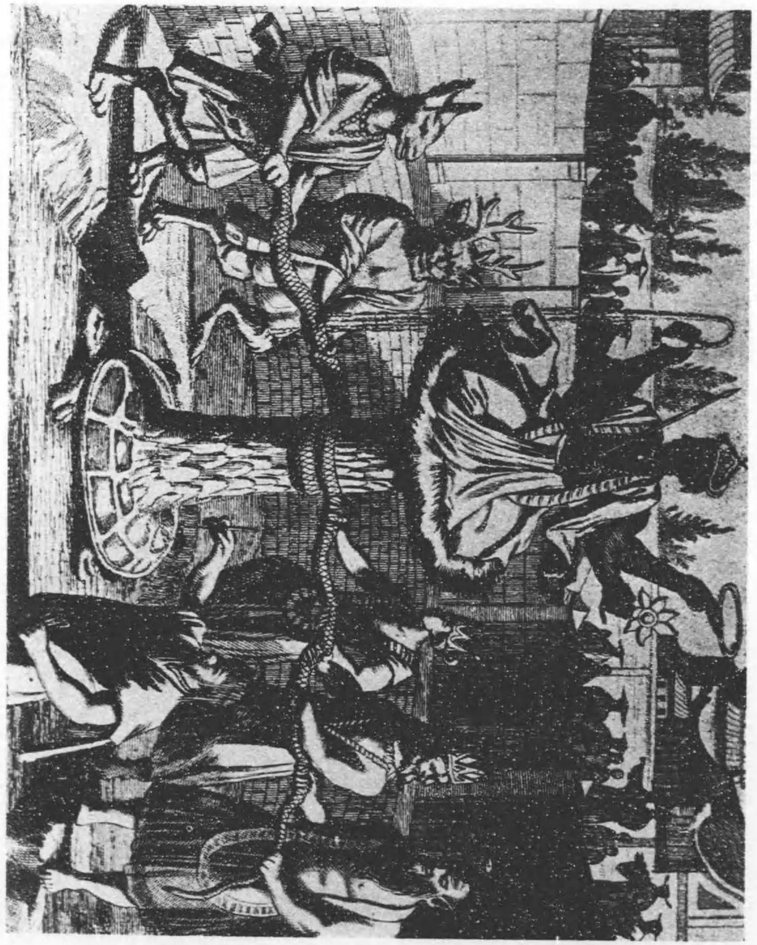
世界創造者を祀れる殿堂

都には此牛殿の外に造物者に獻げられたる莊嚴の殿堂ありて、造物者を表出する仕方甚だ奇なり。殿堂の中央に水を滿せる巨壺あり、圍むに地上より七呎上れる壁を以てす。其中央に非常に大なる龜現る。其甲、足及頭は水中に在り。其背より大木の幹を生じ、其上に奇なる恐るべき像座せり。此像は日本風に足を身體の下に置き。頭に黃金の冠を戴く。頭は胸と共に黑玉の如く黑く。髮は黑人のそれの如し。然れども頂は次第に小くなり、鋭き尖端に終りて、其處は聊か曲折して眞珠を鏤めたり。目の白きは黑き身體の上に著しく反映し、頸の周圍には二重の眞珠の紐を捲きたるが、高價なる金剛石を之に結べり。身體を蔽へる衣服は前方に於て開き、胸は腹部まで裸體にして、腹部は帶を以て結ばれたる布片を以て蔽はる。胸の上には眞珠の紐下れり。左腕の下には疊みたる黃金の頭巾あり。稍〻低き處に右側にも同じく頭巾あり。上衣の緣には寶石を附す。兩膝の間、腹部の上に一の袋懸れり。此像には四腕あり。左腕の一は直上に擧げ、其最も前なる指の周りに大なる黃金の輪をかく。此腕の臂より第二の腕出づ。其手は蓮を把りて閉ぢらる。右肩の稍〻下方に他の腕あり。其手は水壺を持ち、それより水は絶えず流れ出づ。尙一の右腕は笏を持てり。偶像は全部黑し。此黑色は日本人には歡喜を象徵す。此像の座する樹木は眞鍮製にて、此中には（佛僧の語る所に從へば）此像を作りたる材料の凡てを收む。樹木の中央に非常に大なる蛇ありて之を二捲せり。其頭及身體は右側に於て二個の怖しき形相の者之を握り、其殘部は尾に至るまで二人の王及日本の賢者の一人之を引延せり。日本人は確に其宗教中に蛇及惡魔を崇拜する痕を有す。兩者とも害を人間に及すの故を以て恐怖せらるるなり。

* * * * * * *

蘭使都を去る

フリシウス及ブロークホルスト兩蘭國使節は一六〇五年四月三十日都を去るに先ち、市の內外の寺院を見たるが中に



日本の創造神

も比叡山(Fronojama)の僧堂を見たり。日本の一王は九百年以前此山上に三千八百の坊舍を建てしが、其大部分は信長之を灰燼となせり。然れども都に對へる此山上には聳て斯くの如き建物七千ありて、其中には各十人、十五人、二十人又はそれ以上の僧侶住せり。此等の僧院の一は富有と美麗とに於て他に超えたり。諸王は戰爭の準備をなすに當り、その擴張維持の爲に巨額の金を與ふることを約す。而して勝利を得たる王は確實に之を果す。

必要に迫られたる貧民は世を脱れて此地に投ず。各僧院には監督ありて、ニンシル(Ninsir)と稱せらる。眞理の心といふ義なり。

佛僧の職業

此處にて養成せられたる佛僧の職は死者を葬り葬式を行ふこと、殊に富者の爲にすること、毎十五日又は三箇月に一回彼等の神々の前に於て讀經祈禱すること、公衆に說法すること、禮拜の神祕を明示することなり。又研究部ありて、此處にては教員は僧侶を訓諫し、彼等に種々の日課を課し、練習を十分に行はしめ、怠惰なれば之を罰す。

教義の尊嚴

彼等は教義の尊嚴を保ち、王又はエムペロルと雖も宗教に關する論議を決定し又事件に容喙するを許すこと無し。

* * * * * * *

弘法大師派の僧　弘法大師の爲人

抑々佛僧は十二派に分る。但し或人は其數を減ず。其中にても弘法大師を學者と認むる者は尊敬を受くること最も少し。弘法大師派の僧侶(Combadaxis-Bonzi)は高野(Coja)に多くの僧院を有す。彼等は此處に籠居し、彼等が現世を捨てて神聖なる生活を送る徵として頭髮を剃る。而も内部に於ては惡行至らざる無し。高野には多數の僕隷の外に僧の

みにて六千以上を算す。婦人此地に近づけば死を以て罰せらる。弘法大師は八百年前の人にして、一箇の惡漢なりしかど、其虛僞及能辯によりて聖師の稱を得たり。彼は日本の下層社會に用ひらるる文字の發明者なりと稱せらる。弘法大師高齡に達せし時、深き方形の穴に自身を埋め、何人も其墓穴を開くべからずと嚴命し、且彼は死したるに非ず、唯地上の生活に倦みたれば、十萬年間は地下にて休息すべし。此期間を經れば彌勒(Mirozu)と稱する非常の智識日本に出づべし。彼は其彌勒と共に歸來せんと語れり。彼の墓の周圍には日本の各地より送られたる多數の燈火燃ゆ。弘法大師の派に屬する者は信ずらく、此燈を奉納すれば現世の富を得べく、又死後には弘法大師彼等の爲に彼の世界に於ける仲介者たるべしと。

根來僧嫌忌せらる　根來の青年教育　根來僧と認知せらるる者は何處にても殺さる　戰鬪を事とす

欺瞞者覺鑁(Gacubau)をヌメン(Numen)の格位に進めたる根來僧(Bonzi-Neugori)は最も嫌忌せらる。その主なる住處たるハトノチャイチ(Fatonochaiti)は殺人者の巢窟たるに過ぎず。彼等には首長無く、何事の議事も一般の投票によりて決す。往々協議纏らずして爭論を生じ、互に逼りて相殺すに至る。

此等の根來僧は青年を養育して盜賊詐僞漢となす。機智あり敏慧なる者に教ふるに日本の諸王の系統、功業及國事を以てし、又武藝を練習せしめ、雄辯術を教ふ。此教育を受けたる後、彼等は最も遠き王國に旅行し、帝國の他の地方に住せる王の子なりと稱す。而して彼等の服裝及態度堂々たるが故に信用を博すること多し。此計略の圖に當りたりと思ふ頃、彼等は當用を缺けりとて金を請求す。彼等の爲に金を用立つるものは一二にして止まらず、是れ利子を約して證書を與ふるを以てなり。彼等は財囊を滿すや直に之を携へて僧院に歸る。故に根來僧なることの認知せらるる時は、何處に於ても直に殺さる。人々は彼等を憎めども、武藝に優れたるを以て怖るること甚し。

此派は三部に分れ、第一部の者は宗務に盡し、第二部の者は一日に矢五本を作り、第三部の者は斷えず戰鬪に從事す。一五六一年には彼等は三萬の兵を戰場に送り、都と堺との間に屯して公方と戰ひ、勝に乘じて都に入りて火を放てり。然れども勝利に誇りて慢心を生じ、少からざる損害を蒙りて都を逐はれたり。後信長に反抗して大に敗られ、僧侶の多數は戰死せり。

一向宗の僧尊敬せらる

他の宗派は大なる尊崇を受く。就中第十二の派一向宗(Ikkois)と稱せらるるものを其最とす。其長は輿に乘りて外に出で、王の如き榮譽を受け、其信者に禮拜せらる。

此派の僧侶は他に超えて大なる特權を有す。卽ち快活に暮し、山海より生ずる各種の食物を食ふことを許さる。或殿堂はエムペロルより歲入を受け、或はその建てる地方にて課せらるる關稅、租稅を得、他は普通の人民によりて維持せらる。何人もその附屬する禮拜堂及僧の維持の爲に獻金をなす。佛僧の各派に其檀徒あればなり。彼等は宗教の差違につきては何等の確執を生ぜず、蓋し信仰上の事には冷淡なるが故なり。

佛僧の娛樂　犯罪僧侶の奇刑

彼等の殿堂は大抵富豪なる信徒の家にして、多くは甚だ爽快なる地に建てらる。此處に人々の頻に來ること恰も飲酒の倶樂部に集まるものの如し。普通の娼婦も招かれ、竊に放逸の行爲をなせど、僧侶は之を默過す。然れども他の僧は遁に、隱遁的なるもありて、時には夜半或時間に集りて祈禱し、又香案の前に釋迦の最後の著書法華經(Foquequim)を誦して勤行す。

第十一級の僧は嚴格なる隱遁生活に於て他に優る。女色に遠ざかり、凡ての生活ある物を食せず。若し彼等の中に之を犯し誓を破りたること長官に知らるる時は、罪人は穴に投ぜられ、半ば土を以て蔽はれ、傍を過ぐる者は貴人と雖も此等の僧の頸を木製の鋸もて一回引かざるべからず。第四日には大抵死す。

佛僧の尊敬せらるる所以

隱遁禁慾的の生活は人をして僧を尊敬せしむること大なり。故に彼等の派の中數派は野菜、水及米のみを食とす。又多くの僧は門地高き家より出づ。蓋し子ども多くして彼等に遺產を十分に遺す能はざる時は、其二三を僧院に送り、父の死後家族の生活を容易ならしむ。

佛僧の教ふる教訓は大抵世間的の心配に對する非難なり。尋常人は救濟に關する法則を意とせざるが、僧侶は此罪を其身に引受けて佛神の宥免を祈る。思へらく、人は如何なる大罪に就きても罰せらるること無し。神は彼等を地獄の劫火より救ふべければなりと。但し此は人々が彼等の爲に調停の勞を執る僧侶を尊崇し、布施をなすに洪量なればといふ條件附なり。

貧民及婦人は救濟せられず

此救濟の約束は貴人又は富者のみになさるるものにして、貧民には救濟の道なし。婦人の狀態は亦甚だ惡し。罪業深く生れたれば、縱令僧侶に贈遺をなすとも、救濟せられんことおぼつか無し。

佛僧約束手形を人に與ふ

佛僧は公の說教に於て彼等に金錢を與ふる者は來世に於て十倍の利息を以て之を請取るべしと說く。斯かる莫大の利益を疑はぬ人稀なれば、僧侶は金と引替に約束手形を書くことを勞とせず。人々は之を得て大切に保存し、其死に臨みては埋葬の折に前記の手形を取落さざるやうに近親等に委囑す。卽ち後の世に於て元利共に請取らんが爲なり。又別に惡魔は此書類を嫌ひて遁走すといふ理由もあり。

佛僧說教の樣

佛僧の說教する樣態は立派なり。說教者は高壇の上に立ち、周圍には優麗なる日本製の布片を懸く。其登口は右側に在り。往々細工の巧妙なる手摺及階段を有するもあり。左側には偶像高き香案の上に座せるが、日本風に脚を身下に置けり。或は阿彌陀、或は釋迦、或は觀音等宗派に從ひてそれぞれ異なり。偶像に隣して供物を進むる者あり。其供物は皆美味のものにして、祭儀終れば彼等と僧と共に之を食す。偶像と進供者とは周圍に柵を作れる高座の上に着席す。說教壇の上には方形の天蓋ありて、前方は太き柱の上に安んじ、後方は壁に定着せらる。說教者の上には兩側に二個の燃ゆる燈懸れり。各四本の糸を以て吊られ、同じ數の燈火あり。說教壇の前には方形の棧敷ありて、三方に柵を設く。高さ三呎、其中央に壇あり。此棧敷の上には僧侶の從者坐し又は立つ。壇上には聖典法華經を載せ、之に近く貝を置く。僧侶は壇に上りて良久しく四方を見廻す。右手には幅廣き黃金の扇を持ち、頭は絹の傘を以て被はる。傘の狀麥藁帽の如し。彼は高聲に語るに先ちて、沈默してやがて深遠なる說法を始むべき容態を示す。最後に鈴を鳴らして、靜肅を命ずる合圖とす。其後は何人も最小の聲を發する者も無し。次で僧侶は彼等の法書法華經の中の數則を讀上げ、之につきて長き說法をなす。

佛僧の雄辯

日本語に通ぜるガスペル・ヴィレラは語りて曰く、「予は屢〻僧侶の言語の秀拔なるに敬服せり。其態度の整ひて言語の流麗なる點に於ても、又用語の奇拔にして議論を其目的に運ぶ手際に於ても、希臘、羅甸の說教家に比して遜色あるを

見ず。彼等の說話の上品なるは又彼等の着衣の絢爛たるに借るところ少からず。華麗なる臺の上に立てる彼等は頭より足まで絹を衣て、胴には廣き帶を締めたり。

* * * * * * * * * *

殿堂に聽衆の群參

聽衆は多數會堂に參集し、大抵は入口まで充滿す。鈴の音を聞くや、彼等は跪座して熱心に祈禱の聲を擧げ、凡そ一時間は之を繼續す。手に念珠を天の方にさし上げ、聲高く南無阿彌陀佛と叫ぶ。此は阿彌陀我等を救濟し給へといふ意にして、此祈禱は阿彌陀を彼等の神竝に保護者と認むる宗派の用ふるものなり。他の人は釋迦、觀音、又は他の偶像の名を呼ぶ。然れども大多數は阿彌陀を信ず。貧民にして救濟を乞ふ者は、一念彌陀佛卽滅無量罪 (Ichinen Amida-but Sucumet Muniro Zaij) と呼ぶ。卽ち正直なる心を以て阿彌陀の聖き名を呼ぶ者は救はるべしといふ義なり。

僧侶の一人說法する間は他の者は香案の段階の上に座し、手を上衣にて捲き、眼を下方に注ぐ。十二派ともに凡て聖書法華經無ければ救はるること無しと斷言す。されども其以外の事に就きては說を異にせり。

阿彌陀の子觀音を崇敬する者は最も熱度にして宗教的なる人とせらる。常時手に念珠を持ち、何れの處に於ても祈禱を休むることなし。

佛僧間の相異

又佛僧は其宗派によりて衣服を異にす。或は黑色、或は灰白色にして、此二つの間に大なる爭の起ること屢〻なり。日本には僧侶の數頗る多きを以て、之に屬する信徒の數も信じ難きほどの多數なり。何人も自ら僧院に隱遁せんとせば、十二宗派の孰れに入るも自由なり。

信徒間の相異　各派各信徒の互に一致する所

同樣に凡ての日本人は最良と信ずる宗派を奉ずることを得。故に家族中にして父は子と異なり、母は又前二者と異れる宗派たるもあり。或者は三百五十戒ありと主張す。されども凡ての人は主なる戒律五箇條あることに一致す。之を守れば人は救濟せられ得べし。卽ち殺生する勿れ、偸盜する勿れ、邪淫を行ふ勿れ、妄語する勿れ、飲酒する勿れの五戒是れなり。又彼等の神は自ら好みて長き且痛はしき苦難に堪へたるが、是れ其苦難を信じて、熱心と正直とを以て彼等を崇拜する人々を救助せんが爲なりとは、凡ての人の信じて肯定する所なり。彼等の禮拜には、サヴェリウスの語るが如く、圓き珠を串通せる綱を用ひ、祈禱を終ふる毎に珠の一顆を覆し又は落す。

釋迦屢生同す

又日本の偶像敎には多くの面白き寧ろ噴飯すべき空想を混ぜり。卽ち釋迦は八千回生れ變りたりとの說の如き其一なり。是れ婆羅門の所說と一致するが如く思はる。

* * * * * * * * * *

日本の小神

日本には主なる神の外に小き神あり。ホトケ (Fotoques) 及神 (Camos) と稱ふ。ホトケは數代以前に敎義を敎へたる僧なり。神は勇猛なる英雄にして、其尊ぶべき行爲と新しき發明とによりて其名を揚げし者とす。ホトケは救濟に必要なるものを得たれど、神は一時的の幸福を得たるに過ぎず。ネキロン (Nequiron)、デニチ・マリスチネス (Denichi Maristines 大日、摩利支天?) は戰爭の事を掌り、大佛、タモンデア (Tamondea 多聞天)、ベサモンデス (Besamoudes 毘沙聞天)、ヘモコンヂス (Hemocondis)、サジ゠リス (Zajolis) は天體の運行を整ふるに從事す。

佛僧の十二派

佛僧の分派はサヴェリウスの示す所に從へば九なりとし、カロンは其「日本記事」に於て之を十二とす。眞言宗の僧(Xingovini bonji)は大日を尊ぶ、禪宗の僧(Jenxuani)はホベム(Fohem)に事へ、法華經宗の僧(Foquexani)はミオン(Mion)に事へ、淨土宗の僧(Jondaxuenses)は阿彌陀に、シンタニ(Xintani)はコキウム(Quoquium)に事ふ。バラカッケ(Baracacque)は研究に時を費し、一向宗の僧(Icoxuani)は救濟には阿彌陀の德より他に何物も無しとのことを敎ふ。

一向宗の僧

一向宗にては首長の僧命令權を有す。彼は各種の惡事を行へども、人々の尊敬を受くること大なり。彼等は其僧侶の前に俯伏して、彼等の爲に仲介者たらんことを懇願し、彼等の罪の赦免と寬容とを乞ふ。根來は覺鑁を最高の神とし、祈禱者と製矢者及戰士に分る。山伏は六十日間の難行の後、富士山頂に恐るべき形相を以て現るる惡魔より就職を命ぜらる。一般の人は其祈禱を大金にて買ふ。然れども第十二派一向宗(Ikkois)の尊敬及勢力は他に優れり。ゲンゲス(Gengues)、ハルボリボンジ(Harboribonzi)及山伏(Jammaboos)も魔術に長ぜる日本の僧徒なり。但其貧困なること孤獨の生活を送るとの理由より佛僧の中に數へられず。

佛僧の欺瞞と罪惡とは彼等の行ふ祭日によりて見るべし。

祇園の祭

毎年八月に日本人は一の祭日を有して之をギボン(Gibbon 祇園會?)と稱す(人の義)。先づ市の凡ての隅に手工者の數に從ひて棧敷を作り、其日となれば多數の人茲に集まる。莊大なる祭を行ふ爲に、立派なる絹を以て蔽はれたる車十五輛、時には二十輛先導をなす。各輛四十人にて牽く。車中には各多數の青年ありて、唄を歌ひ、大鼓を打ち、又は笛を吹く。各種職業の男女は自身の車を買ふ。間もなく多くの車は更に武裝せる人と共に之に續く。車は亦絹を以て被ひ、其上に日本の英雄の勇猛なる行爲及貴き事蹟を畫けり。此列は徐に彼等の殿堂の傍を過ぐ。暮には二個の神輿殿堂より出づ。其一には彼等の崇拜する偶像座す。第一の輿の舁手は神性の存在の爲に壓せられて氣絕するが如くになる。然れども其後より女神の偶像の輿出て來る。是れ使者によりて彼女の夫が其妾に出會せんとするの報を傳へられたるが故なり。此輿の舁手は狂亂者の如くに奔り行く。此は女神が夫の濫行に因する正當の憤怒及悲哀を表する所以なり。此輿の狂氣の如く走り廻る中に、人々其後につきて高聲に叫び、女神の悲しむべき狀態を憐み、膝を屈げて彼女を慰め且祈禱す。終に三個の輿は一處に運ばれて殿堂に下さる。是にて祭儀終る。

摩利支天の血祭

軍神摩利支天の爲には彼等は其祭日に於て殺伐なる祭儀を行ふ。午後各人神像を肩に書きたる形裝にて集合し、急に二隊に分れ、初は小兒石を投げ合ひ、後には兩側の年長者少年の群に入り、先づ一二發の彈丸を交換し、それより接近して日本の劍を以て長く戰ひ、終に其中の一二人戰場を退くものを生ずるに及びて其方を敗とす。

一向宗僧侶の阿彌陀祭

一向宗の僧は年々阿彌陀の爲に例祭を行ふ。群集混雜の爲に僧院の入口にて死者を出す。或者は往々故に倒れて踏殺さる。斯くして阿彌陀の許に至るを得べしと思へばなり。夜間僧は右の死者の爲に說法をなし、勇氣ある決心を賞美し、會衆は死者を哀悼す。

日本の角力

宗教に關する此等の奇習の外に、日本人は他に多くの運動遊戲を有す。その中にも角觝は賤しきものにあらず。之を

演ずる場は方形の柵を以て圍み、その周圍に見物人立ちて之を見る。柵は恰も腰の處に達す。四本の柱を以て支ゆる屋根の下、土を盛上げたる壇上に審判者座す。角力者は帽子の形に作れる網の下に頭髪を收め、之を頭上に緊着す。此網の頂點より細き綱を垂れて背上に在り。身體は腰以上は裸體なるが、胴と背の廻りに銅版を着く。其上にはエムベロルの紋章を描けり。而して此銅版は胸部に於て開き、二本の繩を以て腰の廻りに定着せらる。同樣の銅版を向脛にも結付く。袴は銅版に附したる二本の紐を以て脚間に結上げらる。斯くの如き服裝を以て熱心に互に攻擊し、反對者を投げたるものは審判者の立てる土壇の上に行き、金盤又は銀盤を受く。此盤面にはエムベロルの紋章を附せるものあり、又否ざるもあり。

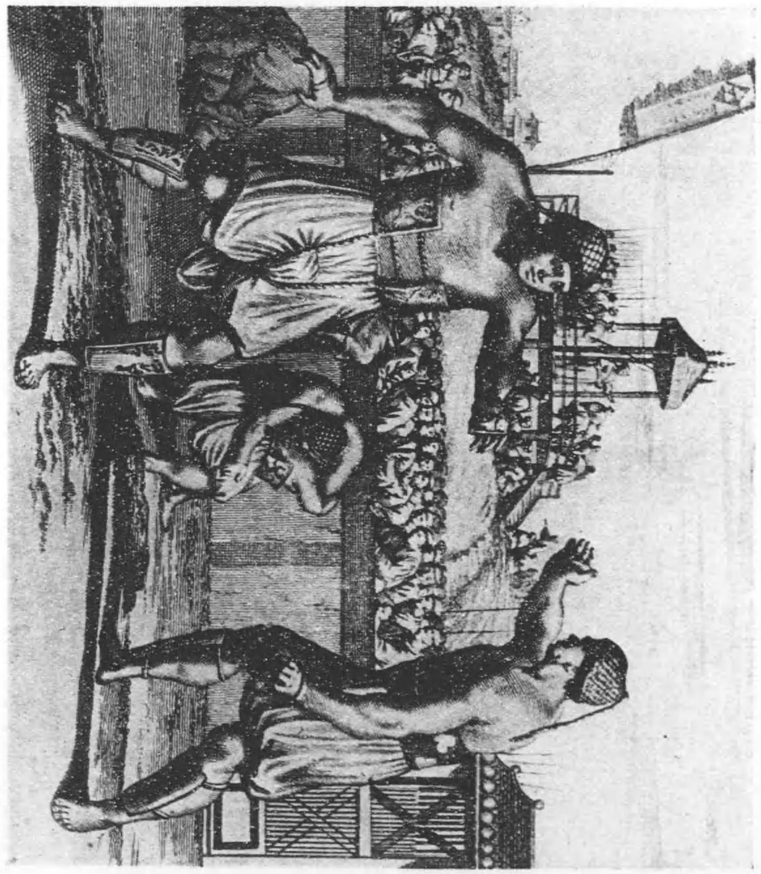
日本人が斯くの如き競技を行ふは、古代の希臘、羅馬に於けるが如く、戰爭に巧に又身體を勞するに慣れしめんが爲にするものなることは疑ふべからず。

都の莊麗なる橋　淀の城

兩使節は四月三十日都を出發せしが、市外に出づる處にて彼等の渡りたる橋の立派なるに驚きたり。長さ二百三十歩、都の中央を流るる河上に懸り、岩石より切りたる大なる柱の上にあり。頂部は眞直にして、兩側は石を以て壁となし、大なる眞鍮の珠(擬寶珠)を以て飾られたり。使節は同日伏見に中食し、四隻の小舟を儲ひ、河を下りて大阪に赴かんとす。途中堅城を以て守られ、絶えず二個の水車によりて水を供給せらるる淀(Jonda)を通過せり。河上に二橋あり、都の橋と同樣なり。日本人は橋梁架設の方法を支那より傳へ來りしなるべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

野僧



角力

夕方には美麗なる村牧方(Firaskatta)を後にし、翌朝二時大阪に着せり。

路上に多くの粗野なる佛僧住めり。彼等は二人づつ歩行せるが、其衣服は襤褸となりて裂け破れ、處々皮膚を露せり。髯を剃らず髪を切らず、さながら野蠻人の如し。唯爪のみは剪れり。髪も爪も切らぬダイロの如くにならざらんが爲なり。頭上には六の稜角ある帽子を被る。網の如く作られ、二の角は上に向ひ、二は前に二は後にあり。彼等は常に書込用に供する計算表、布片、瓢及小き角製の鎖を有てり。鎖は祈念の數を記するの用に供す。其殿堂は山の頂上に在り。此處に達するには大概岩石多き嶮岨なる路による。

此野蠻なる聖人は國人より尊敬を受け、大抵は病人又は死者の中に時を費す。其傍にて彼等は終夜神聖なる言語（是れ普通の日本語と異れり）を低聲にて唱へ、病人又は死者の爲に彼等が生時及盛時に仕へ居たりし阿彌陀、釋迦、觀音、其他の神に對ひ、彼等を宥免せんことを祈る。

大阪城の記載

使節は大阪に着するや、五月三日城の指揮官を訪問して多くの獻上品を呈し、此機會に於て城を見たり。外圍は三リーグあり。大阪の南方約二哩、市に附屬せる山上に在りて、他の總ての建物を瞰下すべき大阪の美觀なり。大阪には最も富みたる商人住居し、其最も卑きもの三萬クラウンを所有するは普通なり。城はよく磨かれたる青色の石を以て作られ、各石一仞の長さあり。城壁の高さは均一なり。

濠の深さ及廣さ

使節一行中の一人の語る所によれば、壁端に立ちて下の方、濠を見れば、眼眩する程深し。外濠の底は深さ三十三呎の水を以て被はれ、幅三百九十呎なり。内濠も水深は前者に同じく、幅に於て百四十呎少し。

大阪城を作りし人及其大なる理由

此城の建築が、巨額の費用を惜まず、よりて世界第八の奇觀を以て稱せらるるに至りしは、太閤樣の力なり。彼が伏見に病むや、秀賴の爲に憂慮し、彼を日本帝國の覇主とせんとのみ考へしなり。……

此考を實行せんが爲の一策として、彼は大阪城を愈〻莊大に愈〻堅固にせり。されど後内亂起るや、此堅城も毛利殿の賴み甲斐なき行動の爲敢なく大御所の手に落ちしが、爾後秀賴は此城を以て住殿となしたり。然れども終に舅内府樣に襲はれ、内城と共に燒死せしが、後再建せられ、舊觀以上の莊麗のものとなれり。外堡は地上一呎の處まで灰白色の石を以て濠底より積上げ、堡に從ひて入江を作れり。三箇の門に近づくに隨ひて地勢漸く高く、壕の廻りの石壁は水上百八十三呎にして、其上に粘土の胸壁立ち、兩側は漆喰を以て塗れり。

最も主要なる堡砦には其外端に石造の三層塔あり。二層には特殊の屋根ありて壁の上に突出す。最上層は小なれども、室は愉快にして、且つ遠距離の敵を發見するに十分なり。

此等の塔は其數十六ありて、内には信じ難き程に多種多樣の武器を貯へ、投槍、甲冑、楯、投箭、戰斧、劍、矛、小刀、大刀、短劍、火繩銃、負革、弓、臼砲、彈丸、小銃、鳶口、其他の日本の武器悉く備はれり。

主なる門に達するには濠の上に渡したる堤道あり。兩側には石の塀ありて、外堡と連絡して石壁の上に達し、門と同じ高さとなれり。其門の方形は前後に傾斜する屋根を以て蔽はる。此門を過ぐれば長方形の中庭に入る。中庭は四方高き壁を以て圍まれ、左側には大なる塔立てり。此中庭の内には門を通じての入口の右側に美なる警衛所あり。此中庭より塔下の路を以て一の入口を通りて又一の廣き中庭に入る。其左側には長き方形の入口ありて、其入口は内方に向ひ、内城に面す。

此處には諸種の官殿あり、太閤樣が日本の王侯を移轉せしめし處なり。内には大にして廣き室多く、外には多くの中庭あり。第一の平地の右には第三の平地あり。其壁の中二は城に屬するものにして、第三の壁は此方形の入口を他の長き入口と隔つ。更に第四の壁は廣き宮殿の近くに在りて、此處より平地に入るべき門見ゆ。其中庭には華美なる建物多し。

次には一重の壁を有する長き入口に來る。外壁は濠より上り來れるものにして、多くの莊麗なる宮殿あり。其屋背は大阪の上に聳ゆ。内壁は外壁と内城の第一濠を圍める他の壁との間に半途まで走れり。

之に連續して他の入口見ゆ。第一の如く長からざれども、多くの大なる建物あり。其美は他に劣れり。

此小き中庭の上に外壁に二箇の凹處あり。其第一には方形の臺地あり。堅固にして清楚なる番小屋を設く。臺地より一の壁直に胸壁に對して走る。胸壁は濠を經て高さは外堡より次第に第二門に向ひて上る。第二門も第一門と似たり。而して内方一の壁に圍まれたる方形の平地に面す。其左側に壁に接して衞兵の一隊あり。右側には胸壁の上に高塔あり。

稍離れて長き平地見ゆ。普通の建物を以て圍まる。此平地は内には二重の胸壁あり、外には夫の十六個の塔の一を以て固めらる。

壁に近き橋の上には二箇の倉庫あり。一は他より大なり。其側を一の壁走る。外堡より起りて内濠の圍りに至りて終る。

小き倉庫の前面を遠く距らざる處に二箇の相對せる門あり。之に達するには二の石壁の間を行く。一の石壁は内濠に對して作られ、他は三筋の傍徑を二箇の門の間の普通の路より相分つ。此三傍徑の第一は最も大なるものにして、多

數の立派なる家を以て飾らる。これより他の路に入る。此處にも家屋多し。之を出づれば前記二門の間を連接する路に出づ。第三の傍徑は同樣に方形なる第三門の前に在り、而して大なる堤防を有す。その上を經て外門に出づ。

此平地卽ち中庭は內壁の入口の右側に莊麗なる廣堂を有し、その下を行けば周壁ある街路に出づ。其街の右側の壁は、左側の壁より遙に進みて、內城の橋に遠からざる門の附近に終る。此門は非常に高し。玆より傾斜せる橋を下りてかの廣き中庭に出づ。此處より見れば、宮殿の多數は壁をもて周匝せられたる一街衢の中にあり。橋の兩側に石造の倉庫十六棟立ち、エムベロルの財貨を藏む。

內城は圍むに廣さ二百五十呎、深さ三十三呎の濠を以てす。兩側には胸壁を以て固めたる大堤防あり。此堤防は漸次に門に向ひて高し。門は銅板を以て張り、方形の市場に終れる廣き街路に入口を與ふ。然れども第二門は堡の外側に在り。此處には濠は水を滿たさざれど、非常に立派なる橋を架し、其欄干は張るに黃金の板を以てせり。門も同じく黃金の板もて張る。此黃金數噸に及ぶべし。

此門內には石壁を以て圍める廣き中庭あり。其右側には小き門あり。之を過ぐれば有壁の大なる街路に出づ。而して其端は長き中庭に面する他の一層壯麗なる街路に出づ。此中庭には防火設備ある三棟の大倉庫あり。エムベロルの貴重品を藏す。

* * * * * * *

此內城の壁は水上百六十三呎ありて、灰色の石を以て築き上げ、固むるに十二堡を以てす。此堡には堅固なる塔あり。此處には步騎兩兵の用具及攻圍用、防禦用の各種武器を納む。

本城の中央に近く第三堡ありて、總ての他の建物の上に聳えたり。其基礎は靑き石壁の上に築かる。形狀は方形にして胸壁を以て圍まる。壁石は大なるものを用ひ、且巧に接續せらる。城の上方の地面より上ること二百呎弱なり。

此處に又エムベロルの饗宴室あり。階下は廣き方形の廻廊より成る。第一の屋は窓及入口の上に斗出し、第一階の上に尙五階あり、上に進むに隨ひて狹小なり。第二階には七室あり、第三階も同數なれども室小なり。第四階は六室、第五階は五室、第六階は四室を有す。第一第二の屋背は石を以て葺き、第三第四は鉛、第五は銅、第六は金の瓦なり。他の空地に於ても同樣に屋背の飾ある建物あり。此空地はエムベロルの休息處なり。此屋背は塔の一方に在りて、頂はエムベロルの嬪御を以て滿たせる壯麗なる後宮に接續す。

塔の他側には更に靑き壁に對して立てる二の宮殿見ゆ。その各殿に於て床に千疊を敷く。一疊は長六呎半幅四呎半なり。宮殿の前に方形の中庭ありて、壁を以て圍む。此處より一方に二顆の黃金の球を以て飾れる門見ゆ。此門は黃金の板張の厩に通ず。

此處を距る遠からざる處に又一門あり、內城に入るには之を通過せざるべからず。

又前記の二宮殿に近く愉快なる庭園多し。附するに饗宴室を以てす。エムベロル大阪城に在る時は、屢〻園內を散步する習なり。

庭園に近く築山あり。頂上に巧妙なる家あり。其前面には六棟の石造倉庫ありて、三棟に銀を、三棟に金を藏す。此等の壯麗なる建物は日本人が支那人より出でたることを證明す。支那以外に於て斯くの如き驚くべき建物は見るべからざるなり。

山伏の登る魔神の山

此名城より遠からざる處に山伏が魔神ゴキス（Goquis 前鬼後鬼の後鬼の意？）に仕ふるが爲に毎年登る高山あり。魔

神は人の形貌を以て現る。山伏は一人づつ其方に歩み出で、悲しき音調を以て反覆懺悔をなし、他の者は之を聴く。此間一口の劍空中に懸り居ると云ふ。是れペーテル・ダヴィチー(Peter Davity)の「亞細亞記事」に書ける所なり。聴者は或は笑ひ、或は泣く。懺悔を正實にせる者は衆と共に下山すれど、罪を隱蔽せる者はゴキスに山上より投げ墮されて死す。

蘭使大阪を退く

使節フリシウス及ブロークホルストは五月六日夕方乘船大阪を發せしが、西風にて進航遲々たり。漸く河より海に出で堺の津を左舷に見たり。此地の附近にはダイロの建てたる大殿堂あり。別に市には堺市民のダイマオギニ(Daimaogini大明神?)の爲に建てたる殿堂あり。

ダイマオギニの奇祭

此ダイマオギニは聖師として尊ばる。古代の日本エムペロルの伴侶たりし人なり。其祭事は厭ふべき方法もて七月に行はる。先づ主なる市街を木柱及木板を以て閉づ。唯約二百歩に一の開きたる處あり、普通の人は其處より覗ふを得るのみなり。午後ダイマオギニの偶像は多數の人の中に運び出さる。此偶像は馬に騎り拔身の刀を持ち、二青年の間に在り。其一人はダイマオギニの弓矢を捧げ、一人は鷹を据ゑたり。之に次で數隊に分れて特別の記號を附したる立派なる騎馬隊來る。次には徒歩の一隊來る。是れ豫ての約束によりて當日此偶像を守るべき義務あるものなり。此等のものは歌ひ又踊り、屢〻千歳樂萬歳樂と叫ぶ。之に次ぎて佛僧來り、此偶像を讃美せる歌を諷ふ。次は堺の貴族全體にして、秩序正しく騎馬せり。最後の列は麻布を衣たる六人の魔女にして、多數の婦人之に伴ふ。彼等は呪文を唱ふ。行列の殿をなすは多數の武裝せる者なり。行列は夫の板圍ある街路に進み、此處よりダイマオギニの胡床を持來る。其胡床は全體に鍍金せるものにて、壯夫二十人にて運ばる。彼等は絶えず歌を諷ふ。其主なる聲は千歳樂萬歳樂なり。胡床の見ゆるや、彼等は衆人中に金錢を投じて拾はしめ、且つ胡床を宗教的に禮拜せしむ。

堺附近の大殿堂の記載

現ダイロの父の建てたる堺に近き殿堂は、建築、藝術及價格に於て最も優秀のものにして、遙に他を凌ぐものなり。位置も最も喜ぶべき平原に在りて、其一方は豐沃なる谷に境し、一方には高き大なる杉林あり。稍隔りては堺市の麓に在る山の頂を見るべし。杉林と殿堂との間には清流ありて、此殿堂の大部分を通じて流る。次に發見するは大なる門にして、其戸は印度風に漆をかけたり。之を通りて流に達す。入口の右側に五本の柱に支へられたる廣き廻廊あり。各柱の間に大なる窗あり。門に最も近き窗よりは第二の前廊を見る。之を經て殿堂に行くなり。窗下には兩側に欄干を設けたる厚き壁ありて通路をなせり。兩側には樹木ありて、快き光景を呈す。廻廊は銅瓦を以て蔽ふ。清潔にして輝き、日光照せば目を眩するが如き反射をなす。水門の左側には壯麗の館あり。地上より五呎上れる大なる土臺三列の上に建てられ、外部は各厚き斗出を有し、其上に壁を作る。壁は花模樣と三角の窗とを以て飾れるもの、日光に映じて美觀なり。

殿堂に附屬する家屋及庭園

館の一側には各種の花卉草木を栽ゑたる庭園ありて、園丁の手入よく行屆けり。其中に二の歩道あり。巧に描かれたる銅の柵を以て夾まれ、前記の館より川に達す。其川に沿ひて屈曲せる壁あり、川端に達す。其壁は傾斜し、數個の窗あり。此壁と銅柵との間に一路ありて、寶庫及僧舍の方に通ず。其僧舍の中三棟は一列をなし、各正面は杉の林に對す。屋根は六本の柱を以て支へらる。此三棟の背後に同じ建て方の家屋數棟ありて稍大なり。此處に殿堂内に於て

禮拜に從事する僧住せり。此家の上より第一門の頂を見る。門は大にして銅を以て葺けり。

莊麗なる塔

之に接して壯麗なる塔あり。高さ殆ど三百呎、八層をなし、八角形なり。各層に廣き室ありて、其窗よりは山川村落の美景を見るを得。塔と廻廊との間に小川に沿ひて壯麗の殿堂あり、其頂に方形の大なる室あり。其床は砂石を以て鋪ける殿堂の屋根に在り。其各側に四本の柱、各柱の間に四個の窗あり。八角形の屋根は中央に一つの尖端を作れり。凡て黄金を以て葺きたり。

ダイロは此建築物の爲に年々銀二十萬タールの歳入を充てたり。一タールは英貨五志なり。

ダイロは一五五〇年以後唯宗教上の事件に命令權を有するのみにて、其他の權力は凡てエムペロル何等の制限無く之を專にす。唯エムペロルは五六年に一回都に行き、服從の徵としてダイロに獻品をなす。而して銀盃を以て酒を飲み、之を破碎して懐中す。是れ日本に於ける從順を示す習慣なり。

内裏の服裝

ダイロは黑衣に赤き肩衣を着け、其上に大なる襞ある外衣を纏ふ、頭上には冠を被り、其周圍には多くの總を垂る。彼の宮殿には三百六十五の偶像あり。毎日其一を臥床の前に持ち來る、其身の安穩を守護する爲なり。若しそれにも拘らず不幸起るときは、當番の偶像は杖を以て打たれ、尚百日間宮中より追はる。其期間を過ぐれば又原位置に復す。

僧侶の長

僧侶の長たるニンシット(Ninxit)卽ヤコ(Jaco)或はサカ(Xaca)と稱せらるる者も同樣の習慣に從ふ。彼は僧侶より選ばれて都に住し、ダイロの如く三百六十五の偶像を有し、尚トンデス(Tondes)卽ち僧正を選ぶ權力あり。

内裏の座席　名譽稱號の與奪權

ダイロは晝間は足を下に敷きて稍高き席の上に座す。一方には刀を置き、一方には弓矢を置く。兩手に絹の手巾を持つ。彼の額は白と黑とを以て彩らる。時には黑き襯衣を着け、其上に紫の襯衣に絹の上衣を着く。ダイロの名譽と尊嚴とは、彼が地を踐み、髮又は爪を切り、或は何者かを殺すときは、之を褫奪するを得。彼の閣員は一般にブンギー(Bungies)と稱せらる。ダイロは之と協議して凡ての宗教上事件を命令し、又名譽の稱號を與ふ。此名譽の稱號は日本人の欲求すること甚しきものにして、貴族の位地をも巨額の金を以て購ふ。ダイロは土地をも關稅をも有せざれども、猶日本の最富者として數へらるるは、此稱號授與料の收入あるが爲なり。

主なる君主は絕えず使者を宮中に送り、或は自ら來りて偉大なる獻品をなし、之によりて新しき大なる名譽の稱號を得。是れ其臣民より大なる尊敬を得んとしてなり。

内裏の後宮

ダイロは十二人の妻室を有す。其他無數の嬪御あり。妻室は各立派なる宮殿を有す。六棟一列をなして相面して立てり。夕には此十二の宮殿に食事の設をなすに、毎に新しき土器を以てす。而して聲樂器樂を以て耳を樂しましむ。但しダイロの赴く處に凡ての食事を運び、十一人の妻室は伶人と宮女との間を其方に歩み、當夜ダイロに寵幸せらるる一人を祝賀す。眼耳及口を喜ばすものは凡てダイロの歡待の爲に準備せらる。

宮嬪擧子の時　乳母の選定

十二人の妻室の一人に子生るれば、ダイロは直に貴族の中より乳母となすべき八十人の若く美しき婦人を選ぶ。此婦

人は前記十二人の夫人と九人の主なる貴族より壯大なる儀式を以て名譽の稱號を受く。儀式終れば盛宴あり。翌日八十人より更に四十人を選ぶ。次で更に十人を選び、更に之を三人に減ず。此三人は尊敬せらるること最も甚し。第三日には此中より一人を選び、嚴肅なる禮式を以て其地位に就かしむ。その盛なるは言語に絶し、ダイロの宮中は恰も騷擾を起せるが如し。饗宴其他の式事の終りたる上は、新乳母は初の八十人の受けたるよりも更に名譽ある稱號を受け、斯くして若き內裏に乳を進むる價ある者と認められし後、乳を搾りて嬰兒の口に注ぎ入る。此儀式終りて嬰兒は其乳母の手に渡さる。

蘭使の南航

蘭國の使節は堺竝にダイロの殿堂を後にし、海岸に沿ひて南海の方に航し、尼崎(Ammanasacir)及兵庫(Fiungo)村の傍を過ぎたり。前者は市にして、後者は一時エムペロルの宮殿ありし處なるが、火災の爲に衰へたり。それより右舷にスリア(Swria)を見、海岸に沿ひてタケシマ(Takessima)、明石、姫路を經、室に至りて上陸し、市の歡迎を蒙りて有名なる溫泉に浴せり。……

長崎へ航行中の奇事(蠍と蟻との鬪)

大阪長崎間の航海には、無數の蠍の蟻群に襲はるるを見ること屢々なりき。蟻は蠍を四方より襲ひて其足を嚙むや、蠍は逃るる路なきを以て己が針を頭に刺して自ら死す。蟻群は之を運搬するに全力を盡す。雙方の鬪士が相互に扶助救援する情態を見るは面白きものなり。……

日本漁夫

使節は進行を續けしが、航海中多くの地、殊に島に於て日本の漁夫を見たり。彼等は大抵妻を伴へり。男子は概ね頭頂を剃りて其周圍に髮の環狀を殘すこと恰も羅馬教の僧の如し。衣服を胸の上に疊み、廣き帶を締め、之に大なるナイフを插めり。肩の上には頸木を運ぶ。其兩端に長き方形の箱を懸け、之に水を盛る。魚類を賣りに出づる時は、魚を其中に生かし置く。女子は頭の廻りに肩衣を捲き、額には一の總を垂る。胸を蔽ふに方形の衣を以てし、其衣は絹製にて數種の花を織込めるものなり。頸の廻りには長き木綿の布をつけ背に垂る。衣服は寬く長くして踝まで下れり。靴は寧ろ底のみのものにて、一種の紐を以て後部に緊着し、二の大なる指の間に結節あり。

蘭使長崎に到着す

使節は終に海峽を過ぎたり。一方には日本本州の海岸に下關市あり、對岸には大なる豐後島あり。針路を轉じて小倉(Kokero)灣に入り、朝鮮海に入り、シミ(Simi)島と豐後の村蘆屋(Assia)の間を過ぎ、呼子(Jobeco)、アウロー(Auroo)、平戸、七釜(Nanatrgama)、ゼッタ(Zetta)、福田(Fucunda)の側を過ぎ、長崎港に入れり。實に五月二十二日なり。彼等は卿人の悉く健康なるを見、蘭船に關する日本人の嚴重なる習慣及法律の報告を得たり。蘭船は法師山(Priest-Mountain)と鷄及雛(Hen and Chickeus)と稱する低き懸崖の間に來り、エムペロルの防舍の傍を過ぐる時は、大砲三發を發せざるべからず。日本の船は兵士を滿載して蘭船に漕付け、船員の人名、年齢、身分等を記錄す。此は退去の折にも尋ねらるる事なれば、自ら述べし所を確と記憶せざるべからず。若し詐りたること發見せらるれば、一死あるのみ。

日本人の蘭人取扱方

長崎の前に停泊すれば、再び發砲し、旗を取下し、端艇を卸す。漁夫は再び出帆するまで之を使用す。又日本の船二隻各二人の兵士を載せ、舳艫に添ひて晝夜警戒し、暴風の日にあらざれば船中に入ること無し。

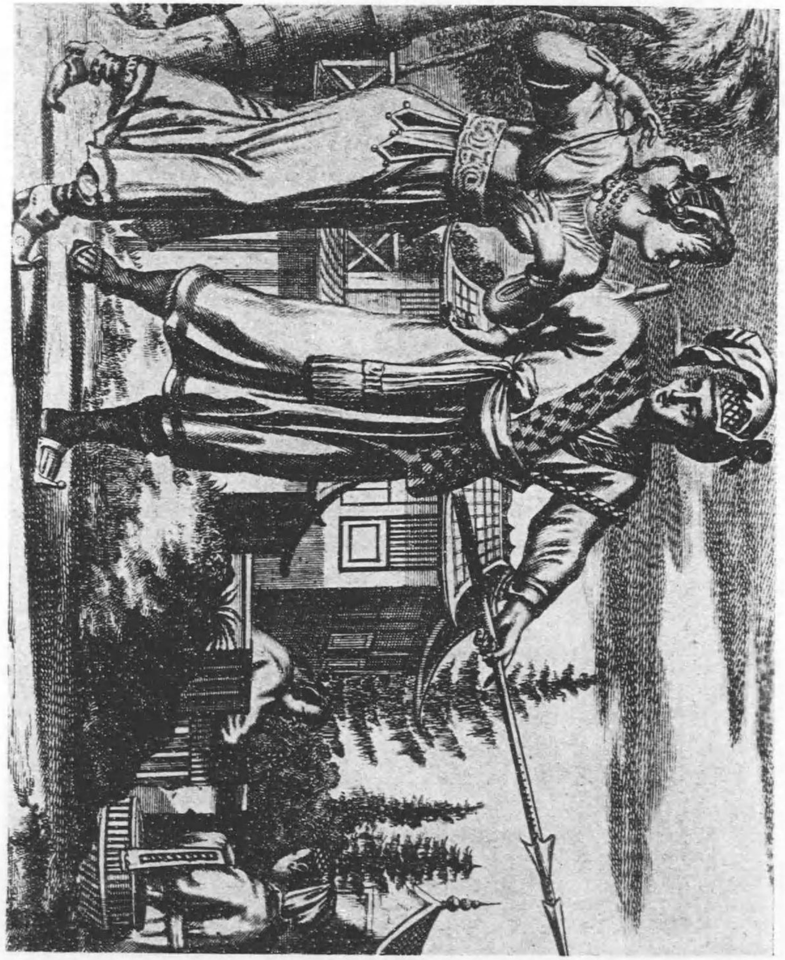
船長崎港に入りたる翌日、ボンヨイス(Bonjoisen)船に來り、此目的の爲にバタヴィアより持來れる美しき氈の上に座し

て船貨の事を問ひ、己が欲するままに包、袋、箱を開く。之を開くには會社の人足（The Companies Porters）と稱する使用人を使ふ。蘭人は貨物に觸るることを許されず、船に關する命令權を全く有せず、船長及商人は忍耐して之を傍觀せざるべからず。日本の水夫は主なる命令權を有す。前記の人足は一日に傭賃として十スチーヴェル（Styvers）を與へらる。是にて早朝より太陽が長崎の山背に隱るるまで勞働す。彼等は東印度會社の紋章を附したる小札を腰に着く。皆日本文字を以て署名せる切符を請取り、之を蘭人の倉庫に入來る門に於て番人に示す。右の切符は蘭貨其他の材料を卸す特權として有效なり。

彼等が船の荷卸に際して主に注意することは、十字架又は羅馬教の用ふる教會の裝飾品を發見せざるやに在り。若し彼等は其最小のものをも見出さんか、蘭人は船と貨物とを失ふのみならず、生命をも併せて失ふ。彼等は亦和蘭貨幣及書籍を嚴密に搜索す。故に蘭人日本に近づく時は、凡ての金錢及書物を一包とし、自己の名を記して之を封じ船長に渡す。船長は之を桶に入れて封を施す。彼等が船の貨物を却し了れる時、日本人は大砲を檢して裝藥せられ居らざるやを見、又碇を上げて之に祕密なるものを結付け居らざるやを見る。而して凡ての火繩、銃、彈藥、小銃、拳銃、槍、刀等の武器を貨幣及書物の桶と共に陸上に運ぶ。蘭人は其何處に運ばるるかを訊ね得る者曾て無し。

船艙の封印

船艙にも藁の結節の上を捲きたる紙片の上にエムベロルの紋章を以て封印し、蘭人の之を解くを得ざるが如くす。封印の上には板を以て作れる方形の被蓋を置く。ふとして其紋章を踐まざらんが爲なり。船の出帆せんとするや、艙口の封印は解かる。其時藁の上を締めたる紙をボンヨイスに示して封印の破れあらざることを示す。若し船の賄方が水、薪、其他の必需品を要することあれば、彼の合圖によりて通事、船中に來る。通事は長崎前面の出島に在る和蘭の倉



九州人の服裝

庫に於て、一箇月十二ギルダーの手當並に食事を給せられ居る者なり。彼は船中に來りて用向を問ひ、返事を聞き、船の艙に在る警衛船の一に行きて跪き、船側に頭をつけて中に在る人々を見ず、只船員の要求するものを告ぐ。此くて使命を了するや、二人の警衛者は其通事を長崎の奉行に遣はす。奉行は直に一小舟に命じて水其他の必需品を運ばしむ。以前には日本人は蘭船の舵機を取外ししが、近來は此習慣を廢したり。蘭船の貨物倉庫に運ばるる時は前記の切符を以てボンヨイス之を請取る。

日蘭兩國人間の貿易狀況

十月には賣立日あり。船載の貨物の目錄を長崎の各地に貼付す。此市日(マーケットデース)を知らしむる爲に鑼鼓を鳴らして市内を觸れあるく。其音を聞付け、多くの人々は群り至る。

豐後島(九州)住民の服裝

長崎及豐後島の住民の言語、風俗は他の日本人と異ならず。豐後人は頭を被ふに綏き木綿の帽子を以てし、其上衣は日本に於けるが如く長からず、裾を折上げて胸に重ぬ。胴には廣き帶ありて、其一端は膝に垂る。婦人は髮を組み、其一房を肩の上に垂る。上衣は花模樣の木綿物にして、廣き帶を以て臀骨の上に結び、下は脚の半にまで及び、長上衣の如く前は開きて、其下には他の刺繍したる上衣現る。

貿易品　商品陳列の場及有樣

さて賣立日には包を切開く。月曜日には凡ての貨物を見ることを得。東印度會社の倉庫の開かるるは此日なり。銀の容器中に鹿皮、軟皮、各種の綿布(愈〻精巧なれば愈〻可なり)、水銀、緋羅紗、斑點ある木材、各種の藥品、硫黃、龍涎香、麝香、トキンペリング(Toquinpelings)、各種の商品を入る。前記の皿は出島の蘭人の倉庫を通して設けたる陳列場の帳

臺の上に置かる。此倉庫には便宜にして地上に近き室三百ありて物貨を納れ、毎夜日本の監吏長の面前に於てエムベロルの紋章の封印を施して閉鎖す。彼は貿易期間は東印度會社の代理人と共に食事す。其食器は日本人より供する銀製の物なり。此仕事に使用する日本人は三百人にして、蘭人より給銀を支拂ふ。

長崎港前の陳列場の記載

前記の陳列場は方形にして高さ十二呎、斑點ある木材の柱の上に安んじ、廣き階段二個によりて昇る。其端に入口あり。床は緞通を敷く。品物を展覽する卓子の周圍には斑木の腰掛ありて、其上に東印度會社の紋章を刺繍せる絹の蒲團を置く。日本商人此卓子の周圍に座する前には履を脱す、泥を以て敷物を汚さざらんが爲なり。此卓子は陳列場の中央に在り。

商人月曜日に品物を見て翌日契約をなし、水曜日には品物の引渡を受く。其時使用する計量器は日本帝國のものなり。木曜日には蘭人の倉庫の水門を開く。其前には日々百隻以上の小舟來りて荷を積み卸す。日曜日には日本人も亦蘭人の如く休息す。

日本人の賣品

此貿易は一月間繼續し、此間出島は市場日の如し。日本人は帆布製の假小屋を作りて、樟腦及樟腦木、日本簞笥、衣服、山歸來、陶器及精粗各種の銀器を賣る。

貿易の指定日終るや、船は直に外洋に出でざるべからず。貨物の大部分未だ卸されずして甲板上に在りても、顧みられざるなり。逆風にても暴風にても、彈藥の船上に運び還さるるや否や出帆せざるべからず。若し海員速に錨を引上げざる時は、日本の兵士は直に各船に來りて其綱を切斷し、晝夜を論ぜず法師山以外に船を出す。同樣の匆忙裡にフリシウス及ブロークフルストの二使節も日本の地を離れて、無事に和蘭に歸着せり。

第二編　日本帝國紀事後記

日本の諸王國

日本は五州に分る。卽ち山城(Jamaystero)、越後(Jetsengo)、越前(Jetsesen)、關東(Quanti)、及奥州(Ochio)是なり。此他に西國(Saykok)及中國(Chiekok)あり。此中には、ペーテル・ダヴィチー(Peter Davily)の所說に據れば、下の如き王國あり。卽ち長門(Nangato)、イナミ(Inami)、周防(Suvo)、イズミ又はユズミ(Ixumi or Juxumi)、安藝(Aqui)、伯耆(Foqui)、因幡(Inaba)、備中(Bichu)、美作(Mimazaca)、播磨(Fatima)、タンケーナ(但馬)(Tanquena)、丹波(Tamba)、丹後(Tango)、バロサ(Barosa)、サミシロ(Xamixiro)、サマト(Xamato)、出雲(Inzumo)、紀伊(Quiy)、越前(Zechigen)、ボニ(近江 Bonni)、伊賀(Inga)、志磨(Xma)、伊勢(Ixe)、美濃(Mino)、加賀(Cangan)、能登(Noto)、越中(Jetchu)、ヒタキ(常陸 Fitaqui)、シマノ(信濃 Ximano)、ボアリ(尾張 Boari)、三河(Micava)、甲斐(Cay)、越後(Jechingo)、出羽(Deva)、チャヌケ(上野 Chaneuque)、ツットム(遠江 Tuttomu)、フラガ(Furanga)、伊豆(Izu)、武藏(Mucazi)、シモノユケ(下野 Ximonojuque)、相模(Sangami)、シラ(Xila)、豐後(Bungo)、肥前(Figen)、有馬(Arima)、大村(Omura)、薩摩(Saxuma or Sucuma)、肥後(Fingo)、筑前(Chicuzen)、筑後(Chicungo)、ブイゲン(豐前 Buigen)、土佐(Tosa or Tonsa)、キロー(Quiloo)、阿波(Aba or Ava)、讚岐(Sanoqui or Samuqui)、ホー(Ho or Hyo)を數ふ。島には佐渡(Sado)、隱岐(Voqui)、スシマ(對島 Ceuxima)、イカ(壹岐 Iqua)、アバギ(淡路 Abagi)及びイニュノシマ(Iniunoxima)ありて、各一の王國を爲す。

日本の要市

長門の首都は山口と云ひ、海に濱せる市にして、戶數一萬。美濃の主要なる市は岐阜(Guefu)にして、尾張(Boari)王國の主要なる市はフナマカ(Funamaca)なり。西國に屬して北方に位する王國は豐前(Buge)、肥前、及筑前なり。南方に位するは肥後(Fiungo or Finga)、大隅(Bonzumi or Ozumi)、薩摩、豐後及チュンゴ(筑後)(Chungo)なり。肥後は二諸侯の間に分たれ、一は天草(Emacusa)を、一は志岐(Xiqui)を支配す。さて長門の州が屢〻アマグエィ(山口)なる首都の名を以て稱せらるると同一の道理により、ボニ(近江)王はコンコル(Concor)と稱せらる。コンコルは佐和山(Saojama)の堅城あるを以て名あり。又平戶及五島は西國に屬す。豐後王國は他にも有名なる地あれど就中臼杵(Vozuqui or Uzuqui)、府內(Funay)の兩市と島原(Ximabara)堡を以て最も聞ゆ。豐後に隣して肥前あり。首都リョーソゲ(龍宗寺 Riosoge)を以て名あり。有馬領は其名、首都より來る。領內には其他市としてアリエ(Arye)、シマガ(Ximaga)、カンズラ(Canzula)、チンジア(Chingia)、サイゴ(Saigo)及ハシラオ(Facirao)あり。有馬王國には有馬灣と普通に稱せらるる江灣によりて肥後と分たる。肥後の最も有名なる市は宇土(Uto)、八代(Catenxiro)、野津(Nonzuy)、コンスラ(Consura)、トンド(Tondo)、志岐(Xiqui)、カタチノワ(Catatinova)、ホンヂ(Fondi)及天草なり、大村の首都は全王國と同名なり。其他にはコル(Coru)及ソヌギ(Sonuguy)あり。薩摩は鹿兒島、ミエ(Mye)、及堅城コギロ(Cogiro)を以て著る。筑前には有名なる博多市ありて、多數の富商住す。又チンスチ(Chinsuchi)及サタカ(Xataqua)あり。筑後には大市久留米(Coqui-mi)あり。堅城ありて之を守れり。キロー(畿內 Quiloo)には大阪あり、關東にはエムペロルの住せる江戶あり。五畿內(Coquinay)には有名なる市ミャコ(都)(Meaco)あり。

諸侯の權力無限

各王は其領内に於ては無制限の權力を有す、唯餘りに抑壓せらるる者は公平を得る爲に皇帝に上訴するを得。凡ての主人は其使用人に對して同一の主權を有す。又父の子に對するも同樣なり。但し凡ての人は王其人と雖もエムペロルに對しては服從し、エムペロルは彼等に對して欲するが儘に行ふ。故に臣民は其支配者が爲さしめんと欲することを爲さざるべからず。支配者が相當と考ふる時は死に處せらるることをも豫期せざるべからず。

日本貴族の名譽心

日本人の如く名譽を欲し義心に富み且つ高慢なるものは無し。王のみならず、クニセス卽ち公爵及トネス卽ち歐洲の男爵の如きもの、又下りて尋常の貴族に至りても、自己を以て甚だ優越なる者と考へ、他人には言語を以て答ふることを無く、彼が他人をして爲さしめんと欲することを手招又は點頭によりて合圖することすら之を賤しみ、時には之を紙に書付けて示す。臣民より親愛せらるることを少しも貴しとせず、又憎惡せらるることを慎れず。

貴人もしエムペロルの命によりて領地を移さるる時は、臣民は常に之に伴ひて移る。

エムペロルの奇異なる誓文

一家にて長く王冠を戴くことは稀なり。そは些瑣たる事件の爲にエムペロルの好むがままに之を他人に與ふるが故なり。ユスツス・リプシウス(Justus Lipsius)の日本エムペロルに關する記事に、其戴冠式に當りて誓を立て、必要なる降雨と日光とを供給し、植物に有害なる暴風洪水を防ぐを約束すと云へるは、頗る奇なるに似たり。

日本の比較的不毛の地に於ては、住民は他處よりも勇猛なり。平戸と五島には多量の鹽を產し、之を米との物品交換を爲す。

小兒の養成法

日本人は小兒に對して溫和なるのみならず、又小心翼々として之を養育す。縱令小兒が終夜泣くことありとも、穩なる方法を以て之を默せしむるに努め、聊も打擲を加へ又は暴き言語を用ふることなし。小兒七歲となるに先ち、之を學校に送りて佛僧の教育するに任せ、十四歲まで讀方及書方を習ふ。書方は最も煩しきものなり。其は文字に四體ありて、各形を異にするのみならず、其意義をも異にし、或文字及詞は貴人に對して書く時に用ひられ、他のものは一般の人に對して記す時に用ひられ、一種の言葉は韻文に就きて使はれ、之と全く異れる言葉は散文に就きて使はるればなり。

少年の教育

彼等の兒童を教ふるや、輕卒なる手段を用ひず。何となれば日本人には不正なる手段によりて何事をも爲さんと欲する者無ければなり。彼等は小兒を奬勵するに名譽心を以てす。名譽を貴ぶは兒童の天性なるが如く、學問に於て他に優らんとして最上の努力を爲す。十二歲に至れば初めて劍を帶ぶ。小兒は前額の髮を鑷子を以て拔き取る。市人は毛髮の半を殘し、貴族は頭を全く剃りて後方に一房を殘す。此を以て貴族と平民との區別を知るべし。若し彼等が貨物の賣買に折合はぬ時は其子之を決定す。

日本人は作法正し　健康長壽

貴族、市民、農夫、老幼ともに作法正しく、擧動閑雅にして、恰も宮廷にて教育せられたるものの如し。彼等は牛肉及羊肉を禁ずること歐洲人が馬肉を禁ずるが如く、多くは米魚、及鹿肉を食す。生命を長くする爲として萬事に中庸を主とせるが、實際健康にして長壽に達す。婦人は養育の見込なき兒を殺す。然れども佛僧は之を罪とせず。彼等は見知らぬ人に對して憐憫同情を有せず、基督教徒が困窮の爲に死する者を濟ふに驚けり。彼等は決して自己の苦惱を表

明せず。平生慎ること少けれども、一度怒りたる時は決して妥協せず。何人も正當に欺瞞を以て彼等を責むるを得ず。何ごなれば彼等が當に有つべきもの以上を彼等に與ふることあれば、之を與へたる者に返付すべければなり。その技藝に優れたるは、衣服、蠟塗の箱、及簞笥類に之を見るを得べし。

夫は妻よりも多くの特權を有す

既婚の男子は女子よりも多くの自由を有せり。何ごなれば男子は娼婦ごと共に住むことを恥ごせず、而して些細なる過失の爲にも妻を生家に還らしむるを得。然れども此離婚は普通の人の間に行はるるものにして、貴族社會にては、妻を厭ふことありごも、自己の身分に對して之を生家に遣歸すべきに非ず、家内に留めて之に凡ての必要品を供給し、自己は好む所の婦人ごと共に栖む。然れども婦人は斯くの如く常に恐怖狀態に置かるるを以て男子に仕ふるに最善の努力を以てす。蓋し一瑣事、例へば或男子ごと祕密に語りたるが如き事の爲に、彼等の法律によりて死せざるべからざることごなり居れる爲もあるべし。斯くて既婚婦人は一般に正直にして貞淑なり。

平戸に起りし貞婦の談

一六四六年八月十五日平戸に起りたる一場の事件は婦人の貞操を證するに足るべし。ヤカタイ (Jakatai) ごと稱する身分ある男子一婦人ごと結婚するや、間もなく要務の爲に都に赴きしが、是より先一貴族この結婚したる若き婦人に求婚を申込みて(若し承諾無くば他の婦人を娶るまじごと云ふ口實の下に)拒絶せられたりし者、此機會を利して、多數の從者を伴ひ、此婦人の家に至りて、强て情慾を滿足せり。彼の女は斯く害を受けたれば、復讐せんごと決心し、彼を引留めて再度の享樂を有すべき希望を抱かしめしが、其間にヤカタイは歸宅せり。其歡迎の爲に家人等は家の頂上に宴を設け、尙彼の女は自己の知友及彼の貴族を招くべきことを命じたり。かくて宴闌なる頃、ヤカタイの妻は立ちて、近頃一婦人ありて狼籍に逢ひしことを語り、彼の女は如何なる罰を受くべきかごと問ひしに、席に在る者皆其曲事の主を殺すべしごと言ひ合へり。彼の女は高聲に叫びて曰く、妾は實に其女なり、而して之を行ひたる者も彼處に座せり。乞ふ妾の生命を奪へ。斯くの如き行爲を忍びたる恥辱が他の正直なる婦人を汚さざるやう、妾の如き劣惡なる者が人間の中に生存せぬやうにごと云へり。衆皆之を意外ごせしが、殊に夫なる人の驚は無上なりき。夫は慰諭して今後此事を忘るべしごと云へば、妻は其語に滿足せず、郎君は妾の被りたる恥辱に對する復讐をなし給はざるか、さらば妾自ら爲すべしごと云ふや否、家の頂より飛下りて頸を折りたり。客中に在りし暴行者も、生前愛したりしものごと死を共にせんごて階下に下り、切腹して婦人の屍體の上に倒れたり。

* * * * * * *

日本人の暴戾　婦女を取扱ふこと殘酷

日本婦人の貞操は男子のそれの劣れるだけ賞讃すべきものなり。男子は嫌惡すべき曲事を公に行へり。彼等は男色の罪を犯すことを敢てするに拘らず、婦人に對しては既婚未婚を問はず邪淫を罰することごなり。平戸侯は一六三六年三人の仕女を生きながら箱に入れ、鐵釘を以て打ち付けたり。一人は貴族ごと私通し、他の二人は之を知りながら祕密になし居たるが爲なりき。

又同じ頃或人田舍より歸り來りしが、妻が他の男子ごと共に居るを見るや、日本の習慣に從ひて卽座に此男を殺したる後、女を梯子に縛し置き、翌日に至りて彼の女の友人を招き、さて席定るや、女の縛を解きて死裝束を着けしめ、手に箱を持たせ、其中に容れたる馳走を持ち出でて衆客の爲に其場にて開けよごと命じたり。女は命ぜらるるがままにせしに、之を開けば中よりは殺されたる男の四肢を花にて飾りたるもの出でたり。之を見るや女は失神せしが、怒れる夫

は直に其頭を切りたり。

高位地の婦人尊敬せらる

身分ある婦人は彼等の間に尊敬せらる。殊にエムペロルより諸侯に妻として送られたる者に於て然り。貴人間の婚姻は全くエムペロルの權内に在るなり。エムペロル貴婦人を婚姻せしむる時は、新夫は日々大饗宴を開き、宮殿を新婦の爲に作る。此處に新婦は住殿を有し、新夫の能力に應じて五十人、百人、乃至二百人の仕女に册かる。

婦人の正式外出

前記の婦人は一年一回正式の行列を以て友人を訪問す。仕女は五六十以上の輿を連ねて之に從ふ。輿は巧なる漆塗に黄金を鏤めたるものにて、互に二尋ばかりを隔てて肅々と運ばる。兩側には扈從、歩卒美しき揃の服を着けて從ふ。彼の女の擧ぐる子は父の一跡を相續して領地を支配す。然れども若し彼の女に男子なき時は領土權は大抵他家に移る。エムペロルが己の欲する人に與ふるは此場合なり。庶腹の子は相續することを得ず。

婦人住殿内の娯樂

婦人の住殿には藝術及金錢によりて彼等の快樂の爲に致し得べきものは一も缺くる所なし。池ありて魚を養ひ、苑ありて野禽を放つ。樹木滿栽の庭園ありて、各種の植物及佳香を放つ花あり。花床、歩道見る眼に快し。日々喜劇の演ぜらるるあり、其他聲樂、器樂の催ありて朝夕音を絶たず。眞に地上の樂園に在るが如し。然れども最も近き親族に非ざれば此に入るを得ず、而も親緣の訪問とても甚だ稀なり。

貴婦人及仕女の階級

彼等の侍女は最小の過失にても生命を失ふの危險あるを以て、萬事に用意周到ならざるべからず。殊に婦人が男子と

共に居る場合に於て然り。此等の婦人は君主又は夫人に奉事するに最高の恭敬從順を盡す。彼等は衣服に從ひて自己の職務を知る。或者は紅衣、綠帶、頭部に裝飾をなし、或者は黄衣、紫帶、頭に鈕を結び、或者は白衣紅帶す。皆金の刺繍を施せり。各級大抵十六人の仕女より成り、老女ありて彼等をして禮儀を守らしむ。彼等は何れも貴族の出にして、教育も亦佳良なり。十五歳までに仕へ、二十八歳又は三十歳に達すれば、同家に奉仕の士人と結婚せしめらる。それ以上に亙りて仕へんとする者は監督者となさるるを常とす。

諸侯大金を費消す

さて地方の諸侯は收入多けれど、亦莫大の資金を支出す。何となれば嬪御等の費用以外に異常のものあり、即ちエムペロルは貴族の間に奇なる習慣を維持し、之が爲に彼はその華奢を增し、諸侯をして謀叛を企てしむること無からんとすればなり。是れ實に諸侯に對しては致命的のものなり。之を詳說すれば次の如し。

諸侯の江戸在住

エムペロルは江戸に宮廷を有するを以て、江戸より東及北に當る諸王侯は一定時に於てエムペロルの目前に住居するを要す。期間は六箇月なり。之によりてエムペロルの威力に光彩を加へ、又彼の好むままに領土を沒收し、或は存續せしむ。諸侯は去來する毎にエムペロルに大なる獻上物をなす。半年を經過すれば日本の西及南の諸侯江戸に來る。故に日本の君主は半ば常にエムペロルの宮廷に在るなり。殊に彼等の費用の增加を致すは、凡ての王公侯伯等江戸に在る間行列の盛儀を競ひて、護衛、從僕、兵士、馬正等を資力の許す限り多くす。最も低位の諸侯にても江戸に於て千人の從僕を養へり。又宮室にも多額を費せり。扈從、歩卒等の一定の衣服、及同族間の盛大なる宴會、何れも彼等に多額の費用を要せざるはなし。

エムペロル其臣下を壓服して背叛の餘力無からしむ

諸君主の多數は斯くの如く凡ての收入を消費するにも拘らず、エムペロルは絶えず新稅を課して彼等を壓迫す。新城を建築せしめ、或は城寨を擴張せしむるに、皆之を彼等自身の費用を以て支辨せしむ。此かる命令を受けたる彼等が費用を惜まず、偉大にして莊麗なる建物を速に仕上げて、他に優らんことを競ふは、賞歎に價す。

貴族の收入

貴族の收入は斯くの如き方法其他によりて殆ど竭さるるを常とす。此等の收入は關稅其他によるものに非ずして、家屋の地代なり。此は建物の大さに隨ひて年々徵集す。各家は君主の爲に一定の時に於て奉仕の人一人を供給せざるべからず。尙日本は或地に於ては銅、其他に於ては金、銀、鐵、錫、鉛、材木、陶器、麻、木綿、絹、樟腦、米、其他の品を生產するが故に、各王侯は數種の生產品より特別の歲入あり。エムペロルは一錢の微に至るまでも之を知れり。何となれば彼は各王侯の家に忠實なる會計官を置き、其許諾無くしては諸侯は何事をも實行し得ざるが故なり。

諸侯賢人を顧問とす

最も貴き王公が其臣下の中に甚だ聰明にして勇敢なる者を養ひ、君主の過失非行を觀察し、且之を自由に申告せしむることあるは、少なからざる驚異に値す。彼等は常に君主の側に在り、殊に遊宴の席に待して、其主人の行爲の賞讃すべきもの又は嘲笑すべきものを悉く記し付くるなり。

諸侯君主にして統治の領土遠近に擴る時は、其領地をば君主の住地の名を以て呼ぶ。諸侯は三通の名を有し、幼時には幼名あり、壯年には他の名を有し、老ゆれば第三の名を取る。彼等は苗字を實名の上に置く。祖先よりの名を保存傳承するが故なり。

殉死の奇風

君主死すれば、大概十人乃至三十人の臣下之に殉じて割腹す。此自殺者の數は君主の人物によりて多少の異あるが、彼等の多くは生前に於て君恩に感激せるものなり。彼等が君主より何かの恩寵を受くる時は、叮嚀に之を謝して曰く、忠義の臣民は數多あるに、何の故にて臣は斯くの如き殊恩を蒙るにや、如何にして報謝せん。身は既に君に捧げたり。君主百歲の後には直に割腹すべしと。此誓を固むる爲に君主は臣下に對して酒杯を擧ぐ。之より後彼は君主の死時に此誓を遺るることを得ず。何となれば酒杯を以て固められたる凡ての義務は破るべからざるものとなり居ればなり。殉死の方法は次の如し。之を行はんとする人近親を寺院に招く。其中央に疊を敷き、此處にて饗應あり。主なる佛僧も來る。さて彼は十分に飲食したる後、腹を横に切り、臟腑を床上に出す。或は腹を切開せる後自ら咽喉を切るもあり。自殺の法愈〻悽慘なれば、彼等の名譽は愈〻高し。

臣下自ら殺さるることを甘んず

自殺に就きて第二の習慣あり。そは君主がエムペロルの命により又は自己の安全の爲に城又は城壁を築く時、臣下の中に彼の建物の基礎の下に身を埋むる名譽を乞ふものあることなり。生きたる人の上に築かれたる城は堅固なりとの想像より起りて此くの如し。巨大なる建物にして其基礎に一人又は數人の埋められざるは無し。

處刑の奇法

君主は臣下の裁判官たり。罪と稱すべき程のものならずとも、死刑に處せらるること容易なり。例へば僅に金一錢を盜む者又は金錢を賭して戲るる者も死刑となる。大罪となれば近親も共に死に處せらる。重罪とせらるるはエムペロルの命令を破ることなり。例へば貨幣僞造、放火、既婚婦人との出奔等の如し。皆家を擧げて族滅せらる。罪人の財產

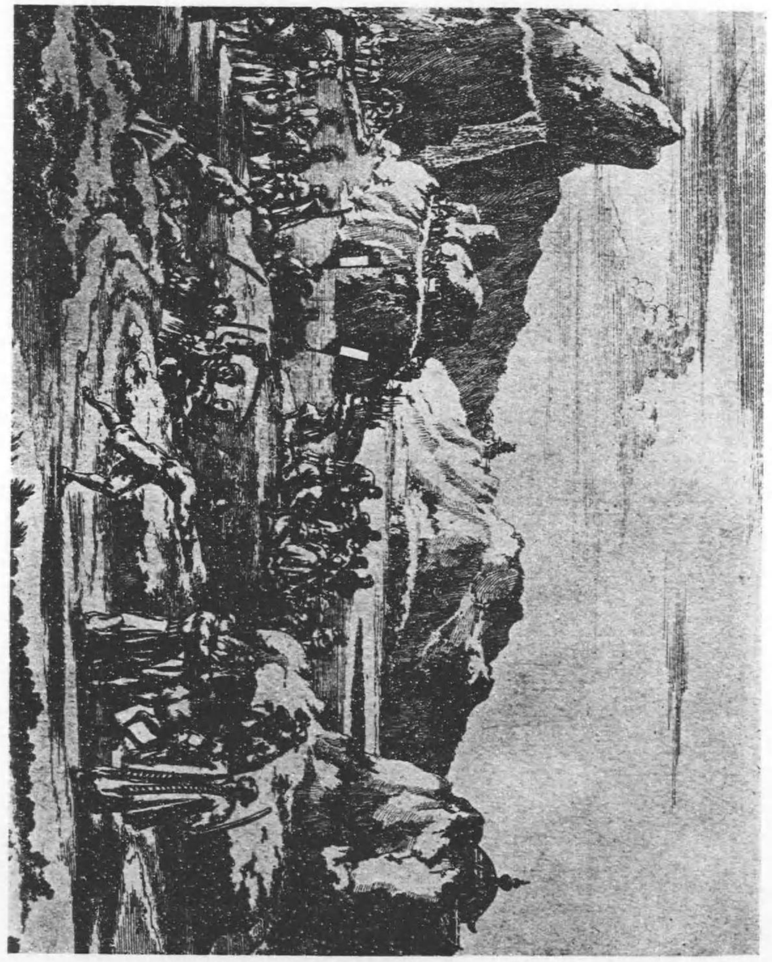
は官吏に引渡し、殿堂、橋梁の修繕、道路の改良等に使用せらる。刑罰には種々あり。切腹は身分ある人に微罪の時に許さる。他には燒殺し、生ながら焙殺し、油又は水の中にて煮殺し、又は四頭の牛を以て身體を割くなどなり。然れどもエムペロル逝去の時は凡ての罪人は同じ日時に日本を通じて放免せらる。此時貧民は金錢を給せらる。

ヘンリ・シャープの航海　日本に漂着す　日本人に款待せらる

日本人は甚しく虛誕を好み且約束を裏切ること多し。其一斑を示せば、バタヴィアの東印度會社より韃靼の北海岸その他を發見する目的を以て、「ケッチ」船ブレスケンス(Breskens)と「フライボート」カストレコム(Flyboat Castrecom)の二船を以て派遣せられたる商人ヘンリ・コルネリゾーン・シャープ(Henry Cornelizoon Schaep)及代理商人ウィリアム・ビレヴェルト(Factor William Bylevelt)の上に起りたること あり。一六四三年二月三日二隻の船は出帆せしが、ブレスケンスは七月の末日本の東海岸に於て北緯四十度に在る或江灣に入港し、漁村の前に停泊し、海員は和蘭の物貨と米及他の食料品との物品交換の許可を得たり。

日本の貴族船中に來りて、船長其他を招待せしかば、彼等は赴きて饗應せられ、上陸の自由を與へられ、行かんと欲する處に行くことを許されたり。夕方右の貴族は再び船に來りて、村長と共に米苞を持參せり。船長は返禮として西班牙の酒アラク(Arak)を以て之を饗し、新しき靴及絹の靴下を贈りしに、彼等は之を喜び居たる樣なりき。かくて飲食も終りたる後、船長シャープ、ビレヴェルト、其他數人は貴族に從ひて上陸せり。貴族は彼等を再び海岸に近き彼の宅に伴ひ、日本酒を饗せり。饗應終りたる後、シャープは村里を見、必要品を買入れたしとの希望を告げしに、貴族は之を許し、自身も共に行き、蘭人を市の長官の宅に伴ひ、長官は各蘭人に日本酒三杯を飲ましめたり。

日本の貴族蘭人を裏切る



蘭人捕へられ捕へらる

彼等は尙導かれて、一方は海に洗はれ一方は胡瓜、蘿蔔などの畑に接せる一條の道路を半時間許り進みし頃、一の山に來れり。米のみのれる田、牛馬の草を喰ひつゝある牧場等、喜ぶべき谷の光景を一眸の下に收むる處なり。此處より投石の距離に一農家あり。彼等は此家の方に歩みて休息せり。休息中彼等は何か飲料をと望みしに、貴族は既に註文したりとて之を制止せしが、休息すること一時間となれども何物も出來らざりしかば、蘭人は告別して船に歸らんとせり。

然れども貴族は今暫く止れとの合圖をなせり。蓋し彼は馬の來るを見て、村まで騎して歸らしめんとなり。されど蘭人等は之を辭し、脚あり歩行に堪ふと云へり。然れども貴族は乘馬を懇請して止まず。其中に馬は家に近づきたれば、彼は蘭人等を乘らしめ、日本人三名各側に立ちて之を牽けり。此くて山を下り、谷を經て村落に來れり。是に於て彼等は何かの奸計あるならんと疑惑を生ぜしが、愈〻之を深くせしことは、日本人の一人シャープの刀を見せよと云ひ出で、シャープに代りて持行くべしとて之を返さざりしことなり。

蘭人奇襲を被りて捕はる

蘭人は漸次或川に近づきしが、其對岸には多數の騎馬者あり。彼等は其處に案内せられしが、之を見るや大に驚き、馬より下りて來りし路を歸らんとせしかど、四周を見れば多數の日本人既に蘭人を包圍し居れり。近くに在りし日本船にて沖の方に走らんとせしもありしかど、終に一人も脫するを得ざりき。十二人の日本人は劍を拔きて各蘭人に立向ひ、彼等を地上に俯きに投倒し、手を後に廻して縛上げ、頸に繩をかけたり。斯く暴行を加へたる末、日本人は問へり。シャプー船長以下一同は日本エムペロルの前に出でて拜すべきかと。蘭人は之に對して承知の旨を對へ、尙蘭人はエムペロルとは平和の狀態にありて、年々江戸に入貢すること、彼等の指揮者は長崎に在りて商業を行ひ居れるこ

こを手眞似にて示せり。

日本人の囚人取扱方

日本人は此手眞似を了解したりこ見え、彼等を河に伴ひ行けり。其處にて蘭人は面部の泥を洗落したるが、其時彼等が先に船中にて霎應したりし市長の、僕、旗、鎗なごの行列を以て彼等の方に來るこを見たり。此一隊は彼等を處刑する爲の者ならんこ思ひ、蘭人は一死あるのみこ覺悟し居りしが、近づき來るや、蘭人の長は馬に乘せられ。他は牡牛(日本人は之を馬に代用するこ多し。)に乘せられ、里の方に牽かれたり。

江戸への旅行

彼等は二リーグ騎り行きたる比、日本の指揮者に對ひ、海員等に書簡を發して彼等が江戸より歸還するまで碇泊し居るやうに申し通じたしこ請ひしが、彼は之には答へず、手を解きて腕枷ばかりこなし、頸の繩はそのままになし置きたり。

囚人薄遇せらる

日没の頃惡路を五リーグ進みし後一村に來れり。船長及一行中の商人こ給仕こは農家に宿し、他は三人宛別處に入れられしが、待遇は薄かりき。彼等は貴族及市長が少許の飯、鹽魚及日本酒を蘭人に與へよこ命ずるを見たり。此食事は彼等の好む所にはあらざれども、彼等は鬱悶を示すべからざる場合に在り。エムペロルの前に出づるこを毫も迷惑らしく見せざらんが爲なり。同時に彼等は機會を見て、蘭人は日本エムペロルこ和親の條約を結び、年々八隻の船、貨物を積みて長崎に來るこを示したれども、何等の自由を與へず、一本の繩を外して、更に新しき繩を掛けたり。官人は立去りたれども警戒を怠らず、彼等は翌朝必ず殺さるるならんこ豫期し居たり。

彼等の船に書翰を發送すべき命令

翌日日出の頃前記の官人來りて旅行を繼續する準備をなせり。而して墨壺こ紙こを持來り、蘭船に對し向ふ三十日間其地を動くべからざるこを命ずる意味の書簡を認むべしこ命じたり。是に於て次の意味の書簡書かれたり。曰く、我等は昨日欺かれて五リーグの内地に入り、今や日本エムペロルの前に出づる途上に在り。旅行は一箇月の時日を要す。其間日本人に叮嚀なれ。船及貨物に注意せよ。又必要なる衣類を送れこ。書簡を書き終へて之を日本人に手渡しせし後、彼等は旅行を進めたり。指揮者たちは馬、他は牛に騎れり。

日本人木製の十字架を作る

日本人は木の十字架を持ち、之を蘭人に示して羅馬教徒たらざるかを知らんこせしが、蘭人が之を顧みざるを見て、彼等は之を投下せり。殘りの路は狹くして困難なりき。正午頃田舍の陋屋に憩ひて輕き食事を取れり。

木板多き日本の一村

夕方八リーグ旅行し來りたる一行は大なる村に着せり。街の角毎に數枚の木板ありて、日本文字を記し、周圍に金色の鈷三十個を打ちたり。是れ何人にても基督教徒を捕へ來りたるものには、此板に書きたる條件に從ひてエムペロルより賞金を賜はるこのこを錄せるものなりこ云へり。

日本人の來訪

蘭人は此市の中央に宿せり。前記の貴族は來りて囚人を慰安し、亭主に命じて肉を供せしめたり。然るに食事を終へて聊か休息せんこせし時、多數の日本人孰れも兩刀を佩びたるが此旅亭に犇き來り、其中には女も少からず交り居りしには蘭人も一驚を吃し、此野蠻の國にて今にも殺さるるここ絶えず豫期し居りしに、程無く此は好奇心を滿たす

所爲なること明白となれり。女は殊に歡びて青年ヤコブ・デ・パウ(Jacob de Paw)を見、彼をして其胸部を露出せしめたり。夜半までに來り集まる者益々多く、屢々羅馬教徒なりやと問ひたり。指を以て十字架形を作り、之を示して彼等が之と接吻し禮拜するかとの意を表せり。然れども囚人は之を嫌ふが如きを見て、日本人は大に喜び、「オランダ、オランダ」と叫べり。

記念の爲の署名を望む　縛を解かる

翌日は尙一層多數の人珍客を見に來り、記念の爲に姓名を書かしめて彼等を煩はしたり。

見物人の中には、怖しく怒れる樣子と奇異なる身振とにより、死を以て蘭人を威嚇するが如く、或は白眼を以て睥睨し、或は恐るべき音を立てたり。蘭人はさてこそ死の宣告を與へんが爲に官人の來りたるものと思惟し、其宣告を今か今かと待ち居たり。殊に時は方に正午となれるに、前進にかかる談の聲は一も聞えざるが故に、愈々恐懼を懷きたり。斯樣に恐怖に襲はれし時、貴族來りて告ぐるに憂慮すること無きを以てし、出發の準備をせよと命ぜり。中食後再び旅程に上り、美快なる溪谷、潺湲たる河流、稻田、村里を過ぎ、概ね西へ〳〵と進めり。村落よりは多數のもの彼等を見んとて後に隨ひ來れり。

六リーグを旅行したる後、夜に入るに先つこと一時間半にして彼等は小き村に入り、船長と商人と二人の給仕は同一の家に泊り、他は處々に分宿せり。既にして貴族及蘭船の停泊處に近き村の長とは彼等を訪問して、縛を解き繩を去るべきことを命じたり。今や蘭人なること明白となりて疑ふべからざるに至りたればなり。是に於て蘭人は頭を地に低れて、其寛典を謝せり。村長は又彼等が船より來りたりと想像せる封書を示し、日本酒一杯を與へたり。貴族は此處にて初めて姓名を明し、オンチド・コンサイモン殿(内田勘左衞門? Ontido Consaimondonne)と名のりぬ。彼等の去りし後蘭人は繩を解かれたり。

囚人は厄介物を外されて勇氣を恢復し、今後は幸あるべしとの希望を抱くに至り、靜に休息に就きたるに、再び見物人は多數に入來りしが、夜半に及びそれぞれ散歸せり。此くて愈々睡らんとせし時、兩刀及棒を以て武裝せる日本人數人入り來りぬ。蘭人は大に驚きしが、警戒の爲に來れる者の由を聞き、それよりは靜に安眠するを得たり。

蘭船よりの書翰

八月一日コンサイモン殿はシャープ船長に席に包みたる二個の小荷物を渡し、船よりの書簡を添へたり。其文中には彼等の連れ行かれしことと其事情とを詳に彼の書簡に依りて知りたることを述べ、生活を持續すべき物資の在らん間は其處に止るべしとあり。

船長シャープの返信

コンサイモン殿は船長に命じて其書翰の返書を認めしめ、且曰く、村々に命じて米、清水、魚、薪、其他の必需品を供給することとしたれば、心を安んじて止るべきことを船員に告げよと云へり。

船長はコンサイモン殿の命じたる如くに返書を認め、更に之に添加して四月を經ども現在の處に止るべし。然らざれば彼が今より面謁せんとする諸侯等に詐僞の嫌疑を受け、船の蘭國にて造られたる事及蘭人の所有たる事も其實證を失ふべく、又東印度會社の貿易、彼及其他の人々の生命、皆大に危險ならんと告げたり。

蘭人旅行を進む　常陸の佳市

書簡は封緘の後一人の僧に附與せられたり。次で船長と商人とは馬に騎りしが、鞍は巧に漆を塗りたるものなりき。今や各人自ら手綱を持ち、二人の僕之に伴ひしが、僕の鄭重なるには蘭人をして讃嘆せしめたり。

六リーグ旅行したる時、彼等は一の城壁ある市に來れり。市は爽快なる土地に在り。彼等は其名を知る由無けれども、常陸に相違なしと思へり。街路廣く、家屋も壯麗にして、商店の中には骨董舗もありき。

蘭人厚待せらる

蘭人は或街の一角なる大厦に宿泊せしが、此處にコンサイモン殿は來りて彼等を訪問し、住き食事を準備すべきことを命じ、後直に蓆に包みて船より送り來れる衣服を着用せよと命じたり。

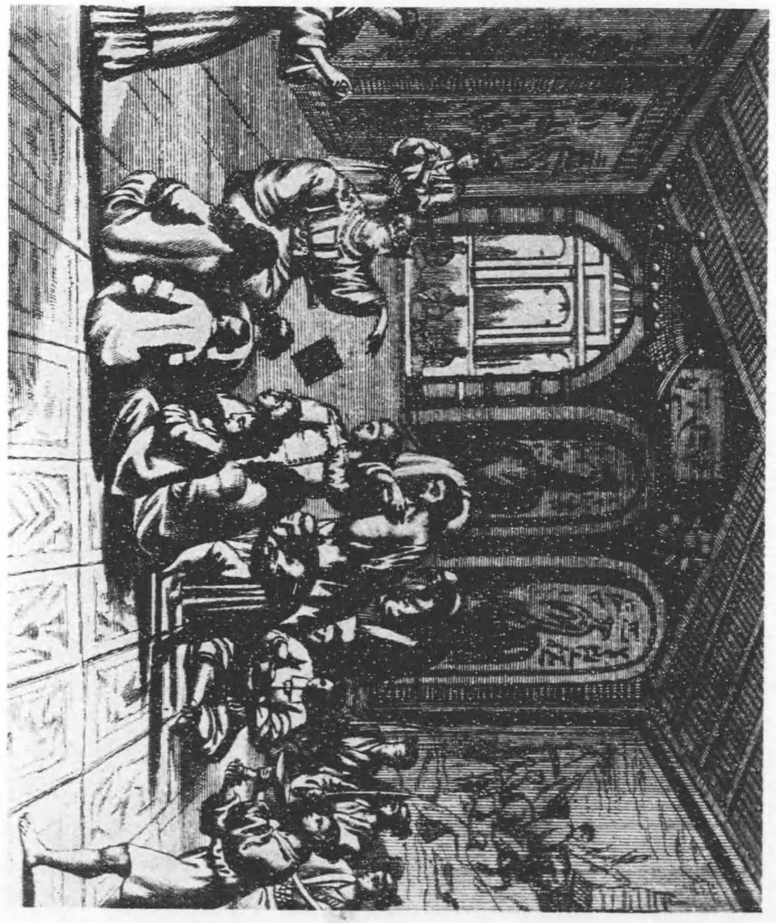
蘭人の衣服を更むるや、コンサイモン殿は船長シャープ、商人ビレヴェルド、事務長シワルド・ヨンソン(Siward John-son)、砲手ヘンリー・ヴァン・エブスフォールド(Henry van Elsfoord)及二人の青年を伴ひて市中を歩行せしが、若し兵士の路を開かざりしならんには、通行甚だ難かりしならん。何となれば見物人は此處彼處より夥しく來集し、全市は此珍客の爲に大混雜を呈したればなり。

常陸に於ける王の宮殿

彼等は多くの町を案内せられて大なる市場に來り、一對の大なる門を過ぎて壯麗なる中庭に入れり。こゝに通ずる路數多あるが、悉く六階段を有する高處に集り、其處より廣大なる堂に達す。此堂に入れば、中央に高き卓子あり、二ふりの刀を交叉して其上に置けり。數名の日本人盛裝して座し、四邊を警戒し居れり。

蘭人王に謁見す

前記の村長は蘭人の處に來りて履を脱ぐことを命じたり。而して彼等は直に彼及コンサイモン殿と共に廣き幾段かの階段を上り。技術を盡せる壯嚴なる廻廊に入りしが、村長は彼等に命じて跪座して王侯の來るを待つべしと云へり。彼等が其處に居る間、盛粧せる數人の士人等の互に挨拶を交換し居たるを見たり。終に王(國主又は大名の意)は廻廊の端



蘭人常陸宮内に通らる

に在る壮麗なる廣間に現れしに、蘭人は其處に導かれて王の前に出でたり。王は年齒四十歳ばかりならんと推せられしが、[illegible]がら壮重を失はざる蘭語もて彼等と語り、直に各種の肉、魚、果物及日本酒を持來ることを命ぜり。然れども蘭人は此[illegible]壮麗に驚きて何物も食する能はず。コンサイモン殿及村長は此遠慮を以て彼等が毒殺を恐れてのことならんと思ひけん、疑惑を霽らす爲に各の皿より少しづつを取りて食したれば、彼等も之を食し、各人日本酒二杯づつを飲みたり。

奇なる饗應

饗應終るや、彼等は其室の他の部分に移され、王の次に座せしめられたり。王は彼等に基督教なりやと問ひ、又指を以て十字を作り、彼等をして之を摸擬して十字架を作りて之に接吻し、禮拜せしめんと欲することを示せり。是に於て彼等は自分等が蘭人にして、年々大なる船を以て來り、長崎に於て貿易し、エムベロルに大なる獻品をなすことを示せり。其中に各蘭人は又二杯の日本酒を飲むことを命ぜられたり。彼等が飲みたる時、一人の老日本人隅の方より出で來り、シャーブ船長に囁きて、汝は蘭人なりや、西班牙人なりや、佛人なりや、英人なりや、丁抹人なりや、瑞典人なりやと問ひたり。此日本人は葡語を巧に操れり。屢〻十字を作りて蘭人にも之を爲さしめんと欲せり。然れども蘭人は凡ての十字架を嫌ふ態を示せり。終に王は基督を懷きたるマリアの像の銅板に刻せるを持ち來らしめ、彼等が之を拜するかを驗みたり。然るに蘭人は若し許されんには之を破壞せんと欲すと云へり。是に於て王は一笑の後之を投出し、臣下をして他處に持ち行かしめたり。此時事務長ヨンソンは胸衣の釦を外して身を露し、曩に錫蘭島にて葡人より受けし傷痕を示して、葡人は蘭人の敵なりと云へり。王は之を聽きて非常に喜べり。終に彼等は退出して宿に歸りたり。翌日コンサイモン殿は宿處に訪問し來りて、汚れたる衣服を洗濯せよと云へり。船長は彼に對ひて何時江戸に赴くに

やと問ひしに、彼は「江戸、江戸」と答へて、指を屈して十五日を意味したり。次で直に佳膳を命じ、桃、巴旦杏、林檎、胡桃、鹿肉、酒、其他の美味多量に現れたり。

此かる待遇は八月十二日まで續けり。同日夜間奇妙なる音響蘭人の目を覺さしめしが、彼等は之が爲に大く驚怖せり。そは一人の日本官吏彼等の室を警衛し居たる者、呼出されて出で行きしが、又直に歸りて蘭人を喚び覺し、衣服を着けて盥嗽すべき由を命じたればなり。やがて全家は大騒となり、僕婢は室内の掃除に忙しく、疊を振ひ室内に水を撒きたり。驚き呆れたる蘭人は警衛者に此夜間の準備は何の故かと問ひしに、或貴婦人及び身分ある人々彼等に面接に來るを以てなりとの返事を得たれば、稍合點行きて、三時間三本の大蠟燭の側に座し居たり。其時常陸王は室に入來り、蘭人に點頭して座し、シャープ船長及商人に卓上にて骨牌戲をなすべき由を命ぜり。彼等は此遊にて時間を過す中、二人の日本武士、一人の佛僧を伴ひて室に入來れり。

日本武士の服裝

彼等の表の上衣は（コレコレ（Korrekorre）と稱せらる）各種の色をなして華麗なる刺繍を施せるものなり。其下に他の上衣懸り、其緣端には巧に紋所を刺繍せり。袴は著しく長く地上に曳き、歩行の際には之を踐む。刀は大にして左の腰に在り、其柄は少くとも二呎の長さあり。黄金の針金を以て被ひ、寶石を嵌入せり。鞘も華美なる刺繍を施せり。頭は剃りて、一房の頭髪を頸背に殘すのみ。斯くの如き武士は此國に多數なるが、五人、十人、十五人或はそれ以上の僕を伴はざれば外出すること無く、外出の時は、彼等の後方より扇及傘を運ぶなり。

佛僧蘭人を尋問す

かの二人の武士と共に入來りし佛僧は、善き西班牙語と少許の英語とを操れり。彼は蘭人に對して佛人なりや、英人

高官外出の態

なりや、丁抹人なりや、瑞典人なりや、何處より來りしか、船には何を積めるか、何故に北方に來りしか、尙彼等の中に葡語又は西語を解するものありやと問ひたり。蘭人中には葡語を解する者もありしかど、尙之より以上の尋問を蒙りては面倒なりと思ひて、之を承認せざることとせり、故に蘭語のみを用ひて、バタヴィアよりテルナタ(Ternata)に向ひて出帆し、それより針路をタヨアン(臺灣? Tayoan)に取りしが、南西の大暴風に遭ひて北方に吹付けられ、四箇月を經て日本の港に休養の爲に停泊せり。海員中病に罹るもの多く、止むるを得ざるを以てなりと答へたり。

日本人尙彼等に問ふに、レメール(Lemaire)海峽を通過せざりしやを以てせり。彼は之に對して否と答へぬ。此尋問には一時間を費ししが、終に二人の武士は各蘭人に酒一杯を與ふべしと命令し、之を爲したる後、王、武士及僧は歸りたり。僧は去るに臨み、船長と商人との處に來りて耳に口を寄せて曰く、彼は西班牙語を語る。鷄卵、魚及各種の日本の美味を食ふ。二日の後再訪すべしと。此約束は蘭人を當惑せしめたり。各個につきて取調を受くとも、今日語りたることと相違せざるやうにすべきことを示し合せ置けり。

蘭人江戸に行く

一六四三年八月十四日彼等は衣服を包みて江戸旅行の準備をなすべき命令を受けたり。二人の貴族及數人の僕も其準備に入れり。同行者の中の一人は告げて曰く、モシスオケ・チョボエ殿(望月長兵衛 Mosysuoque Chyoboyedonne)はオンチド・カンサイモン殿の代りとして(彼は家に歸りしによりて)彼等を江戸に案内すべしと云へり。既にして二日以前に來りて王の前にて彼等を審問せし佛僧及二人の武士來れり。又一行中にはブレスケンス號の碇泊せる村の長もあり。直に大なる食卓の準備成りて、各種の珍味佳肴は卓上に滿ちたり。酒杯の獻酬もあり、出發祝の盃も回りし後、船長及商人は輿に乘り、他は騎馬することとなりて紙の外衣を與へられしが、此は雨を防ぐの料なりき。

渡船及饗應

四リーグ進みし時、一の急流ありて、好風景なる兩岸の間を非常の速度にて駛る。渡場に行く路の一端には數個の十字架ありて、數人の慘殺せられたるもの之に懸れり。渡場を越えて對岸に達し、樂しき村落に入り、此處にて休息し、盛饌を以て中食をなせり。僧と共に來りし二武士は名を告げしが、一人はイシカオワ・イハエモン殿（石川岩右衛門？ Poechy Chennemondonne）と云ひ、門 Isy Cavova Ifa Jemondonne）にして、他はボエチー・センネモン殿（星千右衛門？ Poechy Chennemondonne）と云ひ、此名を記憶すべしとて、彼等は蘭人に大なる責任を課したり。既にして馬か輿かを選ぶべしと云ひしを以て、蘭人は渾て騎馬となりて西南に向ひ、八リーグ旅行したる後、夕方大なる村に入りて饗應を受けたり。イハエモン殿とセンネモン殿は蘭人に挨拶し、馬上の疲勞は無きかと問ひし後、護衛を其家に留めて辭し去れり。

旅行に鷄を携ふ

翌日日出頃再び西南に向ひて進み、概ね山中を行けり。各蘭人には二人の兵士竝に七人の馬丁附添へり。各生きたる牡鷄を持ち、之を馬の後に藁籠に入れて結付け、時々之を取り出して手に運べり。此日は十一リーグ旅行し、新しき馬を取換へしこと七回なり。薄暮小き村に入りしに、此處にては待遇惡しかりき。

佛僧の煩はしき訊問

前記の佛僧は蘭人の許に來りて種々の問を發せり。シャーブ及ビレヴェルトの職業は如何、船長不在中ブレスケン號の指揮をなすは誰なるか、其名を何といふか、船員幾人ありや、食料、武器の量如何、何を積込めるか、何處より來りしか、何處に赴かんとするか等なり。之に對して船長は此僧に言質を取られて困難を生ぜんことを恐れ、成るべく詞少に答へたり。彼は僧を以て背教の西班牙人と思ひたり。彼が西、葡兩語を巧に操るのみならず、又英語も蘭語も多少之を用ふればなり。

蘭人の答

彼等は用心深く答へて曰く、シャーブは船長にして、ビレヴェルトは代理商人なり、船長不在中其代理をなすは機關長なり、船員は五十名にして、バタヴィアよりテルナタに赴き、タヨアン（臺灣？）に行かんとしたりしが、險惡なる天候の爲にカストレコムと稱する提督の乘船を見失ひ、日本に吹流されて此處に停泊せり。そは日本人は東印度會社と平和の狀態に在るが故に、殊に船は暴風に惱まされ、海員は病人多く、船も修繕を要し、人は休養を要するが爲なりと。僧は一々之を記錄せり。

江戸への旅行繼續

日出再び旅行せり。而して九日間旅行を續け、江戸を距る一リーグの地に來れり。此處に至るまでは稻田、杉林の傍を過ぎて快きこともあれば、廣原、小野を過ぎて平板に惱むこともあり。又石多き坂路又は嶮岨なる山路にて困難せしこともあり、又は駛き流、深き湖を人馬ともに渡船にて越す時に危險を覺えしこともあり。然れども斯くの如き危險の通路に於ても、岸には大抵小村落あるを以て、住民は直に援助を與ふべければ安全なり。

蘭人到處に好遇せらる

市にも村にも行く處として蘭人は鄭重の待遇を受けたり。市民も商人も皆帝國の囚人を好遇するを以て名譽となし、且彼等は日本より數百リーグを隔たれる遠地より來りし者と言語を交へ、皆其衣服及風俗に驚き居たり。凡ての人は蘭人に姓名を署せんことを求め、それにて彼等を厚遇したる費用に對して滿足し得たるが如し。然れども蘭人は絶えず六人のボンヨイス及百三十人の兵士に警衛せられ居たり。

日本樂師の記載

此九日間の旅行中に彼等は日本の樂師に遇へり。此等は地方を往來して音樂を聽かんとする青年者等を喜ばしむるものにて、主に結婚の席又は娼婦及嫖客の混ずるが如き大遊宴を尋ねて行く。女の樂師は脚を體下に敷きて座し、頭の頂には黑き紙の卷物を載せ、それより長き肩布背の上に落下す。外衣は刺繡せる襟を有し、前面を開く。その間に襞のある帶見ゆ。手には銅を張れる二本の棒を持ち、之を用ひて巧に樂聲を作す。女の後に男あり、高き腰掛に脚を十字にして腰かけたり。此等も前の開きたる短き胴着を着く。下衣は凡て一枚の裂(きれ)より成る。袴は足までかゝれり。彼等の胴衣は襞ある帶二筋を以て結ばれ、其一筋は腕の下、胸のあたりに、一筋は腰のまはりに在り。最も下に二本の劍を挾む。又兩手に鞭を持てるが、その端は結ばれ居り、中洞の滑車を附し、中間に鈴あり、此鈴頭上をあちこちと搖れて一種の快音を發す。而して腰掛の上の足を以て拍子を合す。座せる女の兩側にも露頭の女立てり。其女の右肩には廣き帶かかり、其帶は左腕の下に來りて銅の棒を有する圓き輪に結付けられ、一箇の鐵の取手により右手を以て之を回轉し、他の手を以て其銅棒を鈴にて打つ。此音樂に合せて彼等は巧に踊る。此等の前に他の者は顏を被ひ、左手には大傘を持ち、右手には扇を把り、多くの古風なる姿勢をなす。

蘭人江戸に入る

蘭人は時には斯くの如きものにも慰められて、江戸を距る一リーグの地に來れり。此地に於て例の村長は別を告げしが、彼は彼等の海員の拔錨したること及何處に行きしかを知らざることを告げたり。此は蘭人をして至大の恐怖を懷かしめしものなりき。彼等は帝國の形勢を見る爲に來りし探偵ならんと疑はるべく、日本の殘酷なる死より以外のものを豫期し難しと思ひたればなり。

門附の音樂師

午後彼等は江戸に入れり。彼等は和蘭の使節が定期長崎より豐富なる獻上品を持ちて入京する時に宿泊する家に入れり。此處にて彼等が曩に十四日間滯留の後八月十四日を以て出發せしは、常陸にあらず南部(Namboe)なりしこと、又彼等の碇泊せし港は南部灣内なりしことを告げられたり。彼等は南部より江戸までの旅行に馬を換ふること八回なりき。

蘭人一貴官を惡む

然るに蘭人は休息して半時間も經じと思ふ頃、南部にて別れ今は家に在るべき筈なるオンチド・カンサイモン殿突如彼等の室に現れたるには愕きたり。蓋し彼等は此人によりて不公平の取扱を受くることを常に恐れ、斯くの如くにして彼等が罰せらるる曉には、オンチドは船と船貨とを沒收して、自家の利益を圖るならんと考へたればなり。彼等は外人なるが故に、上告して無罪を明にすべき道なきを一層憂懼せり。カンサイモン殿は蘭人が和蘭の使節の旅館に宿したるを太く喜ばざるが如くなりしが、そは彼の巧が露れて豫期の希望を達し得ざらんことを恐れたればなり。シャープ船長は南部にて彼に與へて停泊船に渡さるべき二通の書簡につきて問ひしが、彼は返事をなさざりき。彼は定めて之を差押へるならんと、船長をして判斷せしめたり。

蘭人宮廷に招かる

夕方船長シャープ、商人ビレヴェルト及給仕ヤコブ・デ・バウは奉行イノヴィイ・シクンゴ殿(井上筑後守 Inovii Sicungo-donne)及長崎奉行三郎左衞門殿(Sabrosaimondonne)の前に召喚せられ、宿舍の主人及二人の僕を從へて赴けり。シクンゴ殿の家に行着くや、立派なる廣間に入り、暫時の後善美を盡せる室に案内せられ、少時座し居たる後、シクンゴ殿、三郎左衞門殿兩人の前に近く出づべきことを命ぜられたり。兩人とも親しげに「おお蘭人よ」と云へり。彼等の次には

例の背教の僧西班牙人座せり。卽ち南部より蘭人と共に來りし者なり。

航海につきて尋問せらる

此僧は二卿の命令によりて尋問を始め、何處より乘船せしか、何處に行かんとせしか、何故に何の目的を以て北に來りしか、何故に南部に入港せしかと糺せり。蘭人は僅少の日本語、葡語、蘭語を混じて彼等の尋問に答へしに、其時西班牙人は印度の地圖を出して航路を示すべしと命ぜしかば、彼等は之を指示せり。終りて彼等は酒一杯を受けて退出せり。

日本人蘭人に知を求む

翌日凡ての蘭人は同じ二卿の前に出でたり。前記の廣間に在りて、二卿の出づるを持つこと良久しき間に、彼等は謁見の爲に來れる數名の日本人に遭ひしが、其中に葡語に巧なる二人あり。彼等は商人にて長崎に往し、エルスラーク(Elsrake)、オヴェルトワーテル(Overtwater)、其他出島なる蘭人を識れりと語り、又彼等に問ふに一行中葡語を語る者一人も無きか、又前述の蘭人を識れる者無きかを以てせり。蘭人は葡語に經驗無し、されど右の人々にはバタヴィアにて逢ひたりと答へたり。此二商人は蘭人の此答を得て、當惑の面持をなしたり。

復び尋問せらる

二時間待ちたる後、シクンゴ殿に附屬の祕書、基督教に背ける二三の葡萄牙僧、例の西班牙僧と共に來りて、再び南部灣に入りし目的及其灣の緯度を問へり。彼等は再び地圖に就きて之を示ししが、之に依れば三十九度に在り。彼等は夜間何處とも知らぬ處にて暴風中指揮官を見失ひ、其後長崎に至らんとせしが、逆風の爲に北に流されたる由を答へたり。

此交話中、シャープ、商人、及青年は他のものとは離れてシクンゴ殿及三郎左衞門殿の威儀儼然と座せる廣き廻廊に案内せられしが、恰も二卿は生命を失ふべき囚人を裁判し居たり。然れども蘭人には別に重要なることを問はず、唯酒一杯を飲むべき由を命じて、宿舍に下らしめたり。出づる時に四臺の古けれども丈夫なる輿、中庭に在るを見たり。此は囚人を載せしものにて、囚人は葡國の神父なりき。

蘭人を恐怖せしめし事

さて殘されし七人の蘭人は前記の數僧に尋問せられて、少からず恐怖せり。何となれば彼等が其處に在る間に、葡人の衣服、外衣、外套、書物、文書等を容れたる箱二個、外に鐵の手枷、足枷、鎖、其他の責道具此廣間に運び入れられたれば、一同は之を故意に持來りたるものと判斷し、又絕えず羅馬教徒にあらずやと問はれたるが故なり。次で彼等の恐怖は增大せり。そは蘭人が宿に歸りて半時間も經ざるに、再びシクンゴ殿より法廷出頭を命ぜられたるが、彼等は之によりて背教僧等が何か彼等に不利益の申立をなしたることと推斷したればなり。

日本人四名のエスイト教徒を呵責す

宮殿に入れば、處刑者が忙しく四人のエスイト教徒を拷責せるを見たり。彼等の推定によれば、其中最年少なるは四十歲なるべく、他は五十歲、六十歲乃至七十歲なるべし。身には日本服を着けたれども、一見日本人とは容易に區別し得べし。處刑者の之を取扱ふこと頗る野蠻にして、手に鐵枷を掛け、足には重き鎖を着け、隻肢をも動かし能はざるやうにせり。

此光景は少からず蘭人を恐怖せしめたり。彼等は又航海に就きて嚴重に審問せられたり。殊に南部より來れる西班牙人は、ブレスケンス號はマニラ又は媽港にて葡國の教師を載せて南部灣に上陸せしめしにあらずや、汝等は羅馬教徒

にあらずやと問ひしに、船長は之に對して否と答へ、シウワルド・ヨンソンは漸く癒えたる胸の創痕を示して、是れ錫蘭島に於て葡人より受けたるものなり、我等は葡國民に復讐するより愉快なることなしと云へり。此話はシクンゴ殿及三郎左衛門殿を特に喜ばしめたり。

蘭人の姓名、年齢、職掌を記す

蘭人は宿處に歸りしが、夜に入りて西班牙僧、委任を受けたる二人の吏員と共に各人の姓名、年齢、職掌を書取る爲に來れり。即ち記すやうは、ヘンリ・コルネリソン・シャープ、船長、三十二歳。ウイリアム・ビレヴェルド、商人二十四歳。シウワルド・ヨンソン、事務員、三十三歳。ペーテル・ゲリットソン・コーペル(Peter Gerritson Cooper)、二十六歳。アブラハム・ピーテルソン・スペルト(Abraham Pieterson Spelt)、砲手、二十二歳。ヘンリー・エルスフォルド(Henry Elsford)、運轉士、二十歳。ユリアン・ショルテン(Jurian Sholten)、機關士、二十七歳。ハンス・スレー(Hans Slee)、水夫長、二十歳。アールト・バスチアンソン(Aert Bastianson)、青年、十五歳。ヤコブ・デ・バウ(Jacob de Paw)、給仕、十四歳。

二人の日本貴官自ら來歷を語る

二吏員は彼等に語りて曰く、彼等は元東印度會社に通譯として勤めたるものにして、一人は吉兵衛(Kitsbioye)と云ひ、一人は八郎左衛門(Phatsiosaimon)と云ひ、長崎より彼の地へ四人の有罪なるエスイト教師を護送したりと。尚曰く、平戸より二人の蘭人の通譯法廷に於ける彼等の爲に來るべく、三十日以内には江戸に到着すべしと。最後に曰く、彼等は基督教より背きたる僧と共に宿るべし、されども之が爲に危險あること無し、又恐るるを要せぬ理由としてはシクンゴ殿及三郎左衛門殿が彼等に好意を有すと云ひ、尚何事につけても缺くる所無きやうにせよと宿主に命じたりと云へり。此後九日間は無事に經過し、唯通譯の時々訪問するのみなりき。

蘭人死を覺悟す　日本の步騎兵

然るに九月一日は彼等の悲劇の最末と見えたり。彼等は死を覺悟せり。何となれば吉兵衛、八郎左衛門、シオワン(Siovan)、其他多數のエムペロルの衛兵來りて、蘭人を江戸の外に連れ出したればなり。步兵は小き圓兜を被り、上衣は鎧にして腹の中程まで懸り、胴のあたりにて紐を以て結べり。各人の帶には二本の刀を插む。一は長くして一は短し。柄の下に黑檀の圓き貝あり、それによりて刀は懸れるなり。袴は貴族の如くにして、足の上に掛れり。肩には小銃を擔へるが、そは歐洲のものの如くにて、唯その打金の式を異にせり。彈藥入の代りには葦を以て編める方形の籠を持てり。但しエムペロルの近衛兵は騎馬なり。其馬は巧なる騎者の日々訓練せるものにして、馬衣は美しき緣を取り、頭は美しき裂を以て蔽へり。兵士は羽毛を飾とせる兜を被り、肩布は腕の下まで來り、左肩に定着せらる。二箇の房を有する太き絹の紐、頸の周圍に懸れり。背には大なる弓あり、左腕の下に箙ありて、矢を充す。帶には兩刀あり、左手には手綱を持ち、右手には大なる槍を携へ、脚には臘塗の長靴を穿つ。蘭人は此くの如く護衛せられて、江戸以外に拘引せられたり。

蘭人法廷に引出さる

市に近く大なる宮廷あり、其大なること小市の如し。此に入りて二三の路筋を通れば、暗き牢獄の前に出づ。其格子戸の前には四人の有罪となれるエスイト教師、他の日本の基督教徒と共に大なる鎖に繫がれてあり。それより開きたる中庭に導かる。此處には絞首臺、十字架及水を湛へたる井あり。人は群り居れり。砂石を敷きたる主なる入口には、殊に各種の官吏、其從者、處刑人などありて、彼方此方に往來し命令を待ち居れり。終にエスイト教師及日本人

は獄より引出されて、日本の裁判長の前に出でたり。判事は其審問に其日の大部分を費したり。其間蘭人は此開きたる中庭にて、旅館より警衛し來れる兵士の側に立ちて其經過を見居たり。而して彼等は夥しき群集の爲に失神せざる爲菓子を與へられて、之を食したるが、此はシクンゴ殿の命令によることこと推察せられぬ。終に彼等は小門を經て快き場處に入れり。其一方には木造の廊ありて疊を敷けり。此處を過ぎて善美なる廣間に入り、此處にて彼等は多數の判官に圍まれ、高座に泰然こ控へたるシクンゴ殿の前に跪座することを命ぜられたり。判官は通譯を經て次の問を發せり。

蘭人に對する質問及其答辯

何處より何處へ航海せんこせしか、何故に南部港に投錨せしか。

蘭人は一六四三年二月三日バタヴィアを出帆してテルナタに向ひ、四月四日同地を發せしが、大暴風の爲に南部港に投錨するの止むなきに至れりこ答へたり。

シクンゴ殿は次に、羅馬教にあらずこも基督教徒にあらずや。四人のエスイト教徒こ私に語ることを欲せずやこ問へり。

之に關する彼等の答に曰く、我等は基督教信者なれごも羅馬教徒にあらず。我等は天地の創造者にして主宰者たる一神を信ず。此宗教の爲には死するの覺悟あり。然れごもエスイト教徒に對しては語るべきこと無し、我等は彼等を以て最大の敵こすこ。

他の訊問は次の如し。

バタヴィアには蘭人、支那人、其他幾人住するか。大守は何處に政廳を有するか。大守は船幾隻を有するか。何處に航海するか。各種の工藝者はバタヴィアに住するか。靴工、縫工、織工、其他の職人も住するか。

蘭人答ふるやう、バタヴィアに住する蘭人は千二百人にして、支那人は三千人あり、其他マラバール人、ジャヴァ人、バンダ人(Bandaneesen)、アムボイナ人(Amboiners)、マルヂク人(Mardikers)等あり。又各種の職人市に住せり。然れごもバタヴィアより波斯、錫蘭、コルマンデル、マラッカ、暹羅、モラッカ島、臺灣(Tayoan)、及他の地に航海する船の隻數は之を知らずこ。

彼等は又訊ねられたり。蘭人はキラン(基隆)に於て爲せし如く長崎を奪ひ得る方法を知れりやこ。されごも彼等は此質問を了解せざるが如くにして、之に答へざりき。

シクンゴ殿は又問ひて曰く、彼等のケッチ船ブレスケンス號が南部灣に於て數回發砲せしは何故ぞ。之が爲に漁夫其他近傍の人民は驚かされたり。又船中に牧師を有せずやこ。

蘭人答ふるやう、船を見る爲に來りし日本の紳士の乞によりて空砲を發射せり。此を以て人民を驚かさんこの考は無かりき。平戸に於ても或紳士の乞あれば爲したることにて、驚かすが如きこあらんこは思ひかけざりきこ。されごも恐怖の心より船中に牧師を有することは之を否定せり。

最後に彼等は問はれたり。汝等は遊泳し得ざるか。長崎に於ては多數の蘭人の泳ぐを見たりこ。

此質問は彼等を驚かせり。何故に之を問ふかの理由を知るに苦しみたればなり。而して彼等は泳ぎ得るもあり、否ざるもありこ答へたり。

シクンゴ殿は更に審問すべしこ告げて、當日は宿處に歸ることを許せり。九月二十三日まで宿處に留りたり。此間何等の事件も無かりき。其日に至りて祕書は旅舍の主人がシクンゴ殿の宅に行きて衣服を乞ひ來ることを語れり。是れ

寒氣加はり來れるにより、彼等に暖き着衣を與へんが爲なりき。シクンゴ殿は上衣を彼等に供給することを約せり。彼は又囚はれたるエスイト教徒及日本人は拷責に堪へずして宗教を棄てたる由を語れり。翌日吉兵衛、八郎左衛門、及背教僧シォワン來り、シクンゴ殿の命によりて綿製の日本上衣を各蘭人に二枚づつ與へたり。此親切に對して蘭人は陳謝の詞をも知らざりき。

蘭人間の新なる恐怖

然るに明日は或判官の前に出づべき筈なりとの風聞一僕の口より傳はり、彼等は大なる恐をなしたり。何となれば平戸より來るべしと云ふ蘭人の通譯未だ江戸に着する能はざるを知るが故なり。彼等は此事を考へて悲歎に暮れ居たる最中、俄然家の壁動き、木材は鳴り、屋は裂け、戸牖は開き、地は動きたり。日本人は恐るべき怪物が其尾もて海岸を强く打ちて、凡てのものを動搖せしむるなりと蘭人に語れり。

* * * * * * *

蘭人地震を恐るること少き所以

然れども蘭人どもは地震を怖るること甚しからざりき。家屋の倒潰によりての一死よりも遙に怖しき死に遇はんことを憂ひてなり。何となれば彼等は日本人の暴虐なるを知れるを以てなり。ともかくも蘭人は判官等の前に出づべき由の命令を以て吉事ならずと思ひ、終夜嘘を合さざりしが、翌朝に至り、吉兵衛及八郎左衛門來りて、今日閣員の前に出づるは衣服の謝禮の爲なりと云ひたるにて初めて安堵せり。通譯は蘭人を案内して、長官の殿舍に赴き、蘭人は恭しく謝禮を述べたり。

判官蘭人を弄す

然れども判官等は次の如く蘭人に問ひて自ら快とせり。曰く、ブレスケンス號は拔錨して南部港を出でて何處に在るかを知れりや。羅馬教を唯一の眞の宗教とするかと。之に對してシャープ答へて曰く、予は船がバタヴィアか、臺灣か、長崎か、何れに行きしか、之を知らず。又予は羅馬教を嫌忌せりと。

次で蘭人は酒二杯を受け之を飲みたる後、彼等は命令に從ひて古き踊を踊り、顏を歪め、横目を使ひ、足を擧げて步み、腕を振りなどせり。日本の貴族は之を見て喜びしが、かくて彼等の愉快の高潮に達せし時退出を命ぜられたり。

蘭囚の深憂

然れども蘭人の痛く心を惱ましし、彼等の航海の目的が韃靼及ボリサンゲ河に赴き、西部亞米利加及金銀島を發見する爲なりしことを審問廷に於て語り居らざりしことなり。エルセラクは多分之を長崎の奉行に語りしならん。若し不眞實を以て責められんには、死刑は必定なりと。此重大問題を考へたる後、彼等は葡語を解せざることを承認するを最も便宜なりとせり。葡語は彼等がシクンゴ殿の前に於て吉兵衛及八郎左衛門に審問せられし折の國語なり。而して又二人の蘭人の通譯が平戸より來らば、其時こそ彼等の航海の目的を十分に說かんと決心し居たり。

蘭囚への來翰

既にして長崎なるヨン・ヴァン・エルセラク及ベーテル・アントニゾン・オヴェルトワーテルの署名せる一通の書簡を領收せり。其文下の如し。

今九月十日予等は長崎奉行より通知ありて、船長シャープ及商人ビレヴェルトがマンサニー(Mansany)領に碇泊せしに、日本人の爲に上陸を要請せられ、彼等は卿等の何國人たるかを知らず、囚人として江戸に護送せるを聞けり。然

れごも何國人たることは明瞭となりたれば、諸君は近き中に釋放せらるるならん。此地にては萬事順調なり。我が船は五隻、近き頃バタヴィアより入港せるものにて、今や出島の前に碇泊中なり。東印度會社は今年大なる利益を得るならん。卿等は心を一にして疑ふ勿れ。予等は卿等の此地に來らんことを豫期す。予等は此書翰が長崎奉行の郵便によりて送られざるならば、尚記したきことあれごも、然らざるをもて筆を擱けり。予等が此書を認むる中、吉兵衛の書ける江戸よりの書翰を受取りしが、卿等囚人は十人にて、東印度會社の通譯の家に宿して好遇を受け居れりとの事を承知せり。又ブレスケンス號が拔錨して南部を去りしことをも聞けりと。

蘭囚と通譯との交話

此書翰を受取りたる後二日にして、吉兵衛、八郎左衛門、及シォワンはシクンゴ殿より下の件を承知せり。卽ちエルセラクは長崎奉行に報ずらく、バタヴィアの政廳は韃靼に大貿易の地を發見せんが爲に一六四三年二月三日船二隻を出帆せしめたるが、此地は既に有名の學者の知れる處なり。又韃靼人も船中に在りて此計畫を奬勵するに盡力せりと。而してエルセラクの信ずる所にては、ブレスケンスは此二隻の中の一なりと信ずとなり。此由通譯を以て蘭人に告げたれば、蘭人は其事實なることを承認せり。然れごも彼等は夜間の暴風雨の爲に指揮艦カストレコムと相失ひしが爲に航海を繼けず、殊に其船はブレスケンスの用ふべき米六噸を積込めるに、之を失ひては食糧に事缺くにより、成し得べくは長崎又は臺灣に進航するか、或はバタヴィアに歸航するか、孰れかを選ばんとせしかど、此決定を實行する能はず、船は北へ北へと暴風の爲に流されたる趣を語れり。

日本の地圖

彼等がかく語る中に、シォワンは日本紙に印刷せる地圖を持ち來れり。中には小範圍の中に日本、アンボイナ、モラッカ島、マニラ、南洋、ボルチオ、セレベス、マラッカ、臺灣、朝鮮、及世界の其方面に在る國々を含めり。該地圖には彼等が四十二度の處にて止りし國をも見出し、其地は日本の西北部より東北東に擴がり、海上十六リーグの距離に在ることを見たり。然れごも其地と日本との間に通路あるを發見する能はざりき。故に彼等は其海岸を以て日本に連れる蝦夷と思ひたり。何となればスンガル、蝦夷間の入江は串通せず、辛うじて上方四十リーグ弱の處にて山により て止められ、その山は日本の奥州(Ochio)の國に擴がり居ればなり。

蝦夷の記載

蝦夷の廣袤は明ならず。日本のエムペロルは其地の發見に意を注ぎ、其縱横幾許なるかを知らんとして人々を簡派したり。然るに人々は高山を越え幽谷を涉り、深く其國に入りしかど、窮極する所を知らざりしが、唯其住民が一の野蠻人なることを復命せしのみ。險難を冒し辛勞を重ねたる旅行も其效を見ること無かりき。

蘭人は蝦夷の地四十七度に在りて廣く東北に擴がれることを知れり。今此シォワンの示したる圖によれば、蝦夷は日本を距ること百リーグの處に在りとせり。それにも拘らず、奥羽を以て蝦夷を日本に接壤せしめ、尚遙に北亞米利加に接するまで延長せるものとし、アニアン海峽(地理學者は一般に之をカタヤ(Kataya)又はキタイ(Kitai)と北亞米利加との間に置く)は圖中に見るを得ず。隨ひて凍結せる海より南海に出づるの通路は見出されず。……

シォワンの疑問　シャープの解答

右の地圖に示す所を以てすれば、蝦夷は亞米利加と接し、韃靼は内地に在るが故に、シォワンは囚人に對して、韃靼の最南部は南海より遙に隔たれるに、如何にして韃靼に航貿し得べきか。且つ北に於ては海に洗はるるにもせよ、韃靼と南海との間には海峽なきに、如何にして其處に至るべきかと難じたり。シャープは之に答へて曰く、韃靼は北は不

可航なるマルマレ(Marmare)海に洗はれ、西はムスコヴィ(Muscovi)に接し、南は裏海、バクトリアナ、印度、支那に斗出し、東は亞米利加に接して、五箇國の州に分たる。……

韃靼のポリサンゲ河

ポリサンゲ河は其中のカタイエ(Cataie)州より流れ出でて南海に注ぐ。此河の水源は海より百リーグに在りて、河岸には有名なる貿易市キンセン(Quinsen)、ヤンギオ(Jangio)、ブレマ(Brema)、カムバリー(Cambaley)あり。バタヴィヤなる東印度會社の社長はカストレコム及ブレスケンスの二船を送り、此河及其諸市を發見せしめんとしたるなれど、既にカストレコムと離れたる上は(多分同船は亡失せるならん)此目的を捨てざるべからずと。又曰く、自分は葡語を解せず、又固より日本語を解せず。故に蘭人の通譯が平戸より到着せし上にて十分に詳細のことを答申すべしと云へり。此答を得て三人は蘭人と別れたり。

蘭人の熱議

其後蘭人は相議し、從來屢〻述べたるが如く、六月十一日水を得る爲に南部の港に入りて再び海上に立出でし以來、二百リーグを往來して、日本の南端に航して北緯四十度に達せんとせしかど、終に南風に吹流され、再び南部灣に入るの必要となりしことを判官等に申立て、金銀島に行く目的は便宜上之を宣言せざるべきことに決したり。

蘭人が江戸に囚人となりて旅宿せる間に、彼等は日本の貴族の訪問を受けたり。其中には八右衛門(Phoechychemon)、石川(Isicawa)、ヨアイエモン(與右衛門? Joaiemon)ありて彼等を慰め、善き肉類、飲料、夜冷を凌ぐに足る衣服を與へらるるや否やを尋ねたり。八右衛門は日本金貨の一種なる一分金(Itsibos)若干を紙に包みて船長に與へ、要あらば尚多くを與ふべきことを約せり。又曩に南部江戸間にて船長に囑して得たる蘭船員の姓名錄(卷物製)をシャーブに渡し、後日の記念として保存したければ、更に二通を複寫して與へよと云ひしに、シャーブは卷物を受取りて承諾し、次回の來訪までに複本を作り置くべき旨を答へたり。

通譯江戸に來る

九月末日夕方蘭語の通譯者平戸より江戸に來り、直に囚人たる蘭人を訪問せり。其年長なるをトサイモン(Tosaimon)と云ひ、年少者をマニエケベ(Manieke-be)といへり。兩人ともに蘭人に厚意を有するものの如く、判官の前に出づる時の心得なことを教へたり。即ち彼等に對する尋問には迅速簡短に答へざるべからず。是れ日本の貴族の大に喜ぶ所なりと云へり。彼等が蘭人と同宿すべしとの事は誤聞にして、平戸の君侯たるトノサマ(Tonnosama)の邸に投宿する由なり。

蘭人韃靼への航海につきて閣員の前に訊問せらる

彼等の長く豫期せられたる審問は翌日シクンゴ殿の前に於て次の如くに開かれたり。通譯トサイモン及マニエケベは、シクンゴ殿の命令により、船長シャーブ、商人ビレヴェルド及ヤコブ・デ・バウの順序にて次の問を發せり。何時幾隻の船を以てバタヴィアより、後にはテルナタより來りしか。何地に航海せんとする目的なりしか。如何にして船は遙に北方に來りしか。何故に屢〻日本の東海岸に出でしか。何故に南部の港に停泊せしかと。

彼等の答辯

彼等は答ふるやう、我等は一六四三年二月三日バタヴィアを出帆し、カストレコム及ブレスケンスの二隻を以て針路をテルナタに取れり。四月四日同地を拔錨し、タイオワン(Taiovan)に向ひて更に其地より韃靼に赴かんとせり。同地にては我等の聞ける所に從ひて貿易の地を發見せんが爲なり。されども此目的を以て進航する間に、名も知らざる海岸

に於て夜間暴風起りて吹流され、爾來カストレコムと相失したり。同船は多分岩礁に觸れて沈沒せるに非ずやと思はる。我等はそれを見出す望は殆ど無かりしかど、尙日本の海岸に沿ひて其踪跡を尋ねたり。既にして我等は食糧の缺乏の爲に大なる不便を蒙れり。そは我が船の食料とすべき米六噸をカストレコムに積込み、必要に應じて渡さるべきことなり居りしが故なり。かくてカストレコムを發見する能はざりしかば、韃靼に進むことも不可能となりたるにより、直に相面する日本の東海岸に於て必要に迫られ居りし積水を得ば、直に風及天候の許すに任せてタイオワン、長崎又はバタヴィアに航せんとせり。乃ち六月十日我等は南部灣の口に入り、此地に投錨して住民より歡迎を受け、直に必要なる淡水を供給せられたれば、翌日再び海に出でて東に進めり。そは始めて日本の東南端を視察し得んが爲なりしが、終に之を越えて正西に見るに至れり。然るに南風及反對の潮流によりて日本海岸に押流され、目的とせる航路よりは北方に一度轉じたり。其時我等の測算せし所によれば、南部より二百リーグを航海せしなり。斯くの如く暴風に揉まれて船は修繕を要し、海員は四箇月間の外洋の勤に疲勞し、多くは病に罹りて速に休養を要するに至れり。此等の爲に南部灣は最も近かりしを以て、且は曩に歡待せられたることにもあれば、同地に入りたり。されども尙帆を下さざりしが、住民の船來りしに遭ひ、其村の前に投錨するの許を乞ひしに、村長は之を容れたり。次で其許可を經て彼を船中に迎ふる爲に我が水夫等は小舟を海岸に漕付けしが、彼は豐富に貯へたる食料品と我等の積載せる商品の或物とを交換せんことを希望せりと。

閣員の質問

トサイモン又問ふやう、韃靼は何處に在りや。彼等の目的とせる市は何處に在りや。又歐洲船は其地に航海したることあるかと問へり。蘭人答へて曰く、我等の知れる限にては、歐人は未だ韃靼に航行せしものあらず、又同地に導くべき案内者たる地圖も海圖も無し。されども バタヴィア大守よりの命令には、日本の最北部を越ゆれば進路を北西に轉じて四十五度まで進むべし（此處にはボリサンゲ河、南海に注けり。）とあり。同河の河岸にはブレマ(Brema)、ヤンギオ(Jangio)、カムバリー(Cambaley)の三市ありて、皆貿易を以て名あり。されども我等は四十度以上には進むことを得ざりしを以て、これ以上何等の知識をも得ざりき。之に關してはバタヴィアに於て承聞せし以外に語るべきこと無しと。

他の尋問は次の如し。若し韃靼を發見せしときは、住民の言語を如何にして領解すべきかと。

シャープ船長答ふるやう、ブレスケンス號に三人の海員ありて、ムスコヴィヤ語及波蘭語を解し且つ之を語れり。韃靼人は大抵兩語を解せり。カストレコムには韃靼人ありきと。

トサイモン問ふ、如何にして其韃靼人を得たるか。年齢如何。如何なる役に在りしかと。

シャープ答ふ、露人が韃靼に侵入せし時、其捕虜の中に一人の青年ありしが、英國の商人に賣られ、該商人は彼をアムステルダムに伴ひ、此地にて蘭語を敎へ、筆算を能くし得るに至りたれば、終に東印度會社に採用せられたり。是によりて彼はバタヴィアに簿記者として送られ、今日まで其職に在り。若しカストレコムが安全にして難破し居らざれば、彼は生年二十歳なりと。

シクンゴ殿に對する答辯

シクンゴ殿は更に彼等に問はしむるやう、何故に日本海岸の沖に遠く近くさやうに久しく在りしか。何故に彼等の港泊を發見するに力めざりしか。何故に南部の前面にて小銃大砲を發せしかと。

蘭人答ふ、兩船の役員會議がテルナタに於て議決したる所にては、若し暴風、潮流、濃霧、其他の爲にテルナタと日

本ごの間にて兩船相離るるこごあらば、日本の海岸にて相互に搜索すべし、又天氣暗昏たる時は發砲し、其合圖によりて互に發見を容易にすべしと定めたれば、兩船ごも此約を守らざるべからず。されごも發砲せしは唯一回なりき。そは三十七度半に在りし時、カストレコムの消息を聞かしむる爲、端艇を卸して我が水夫を日本の漁夫の許に遣ししが、同船を歸還せしむる爲に十六ポンド砲を發せしなり。南部灣に於ては唯火藥のみを以て數回發火せり。是れ船の見物の爲に來りし日本の貴紳の請求によりてなりご。其時マニエケベは彼を遮りて曰く、何故に韃靼行の目的ありしこごを先づ告げざりしぞご。シャープ曰く、彼等の審問せられたる日本語ご葡萄牙語を解せざるが故に、十分に說明するこごを得ざりしなり。尙又シクンゴ殿は蘭語の通譯者が平戸より江戸に來るを待ちて判官の前にて十分嚴重なる審問を開くべきこごを告げしにより、精確なる答申を其時まで延期し居たるなりご。

其後蘭人は一日休息を與へられ、十一月三日再び江戸より法廷に引出されたり。此處にては二十八日間に一回開廷せられしのみ。又此時は二人の通譯者の外には一人の警衛者も無かりき。而して待つこご二時間、判官は大雨の爲に遂に來らず、開廷は其月の九日まで延期せられ、其間蘭人は旅舍に籠り居たり。

再度法廷に出づ

當日ごなりて雨又大に降りて道路殆ご通行し難き程なりしが、再び法廷に出でたり。通譯者ご共に未だ曾て入りしこごなき場處に導かれ、彼等に不安の念を懷かしめたり。其上八右衞門殿來りて船長及商人を他の蘭人ご別に拉し去りたるが故に、一層憂慮を增したり。されごも八右衞門は一時間彼等を放置して雨の中に立たしめ、判官の食事の了るを待たしめたり。終に彼等は雨避の爲に玄關に入り、それより廣き室に入れり。此室にて八右衞門は彼等の爲に酒を注ぎ居たる間に、判官着席の報到り、直に其方に赴けり。シャープ船長及商人は木造の廻廊の傍に跪座するこごを命ぜられ、シクンゴ殿は其前面に於て立派なる上段に座し、カストレコム及ブレスケンス二隻に關して彼の宅にて問ひしこごを再び糺し、蘭人も前に答へし如く答へたり。シクンゴ殿の後には判官ありしが、蘭人は之を十分に見るこごを得ざりき。

蘭人にかかる新なる尋問

彼等の審問は更に始れり。何時何處より何の爲に日本海岸に來りしか。我が海岸に屢〻來りて發砲するこごを如何にして善意に解し得べきかご。

シャープ船長は答へぬ。五月二十一日三十七度半に至りし時、我等は日本を見たり。之ご接觸を保ちつつ、テルナタに於ける約束に從ひ、今し見失ひたる指揮艦を發見せんごせり。而して約束により暗夜に於ては互に知らしむる爲に發砲するこごはなし居たれごも、唯一回發砲せしに過ぎず。しかも是れ端艇を卸して日本の漁夫に友船の消息を質さしめし時、同艇の歸還遲かりしかば、習慣に從ひ歸船の合圖ごして發砲したるに過ぎずご。

マニエケベ問ふやう、汝等が魚ご米ごを交換の爲に、江戸を距る十リーグの處にて日本の漁船に來りし時、卽時蘭人なるこごを告げざりしは、如何なる意志なるか。又葡船は海角、地端等邊陲の地に大抵其國の僧を置き去るに對し、日本のエムペロルが特に此かる地を警戒せしめ居らるるこごは、汝の知らざる筈無きに、汝等が海岸を航行する間に役員を出して蘭人なるこごを當局に報ぜざりしは何故か。此義務を怠りたるが故に、南部の住民をして汝等を疑はしめたり。エムペロルは又海岸に於て屢〻發砲せるこごを痛く忿怒あり。此事は汝等は否定すご雖も、判官に報告せられ居れり。此罪の爲に汝等は處罰を受くべきなりご。

蘭人の答辯

シャープは此尋問に答ふるやう、日本の漁夫は彼等の魚に對しては十分の報償を受取りて滿足し、彼等は我等を鄭重に取扱ひ、アラク(arak)其他我等の必要品を贈れり。我等は互に友人にして讐敵に非ずと判斷し得らる。而して我等は及ぶ限り蘭人なることを知らせたれども、詳に領得せしや否やは、我等日本語を解せざるを以て、之を知るに由無し。尙エムペロルの警戒に關しては毫も知る所無し。又海岸に近づきて報知すべき命令の在りしことをも知らず。數回の發砲と云ふ事は全く其實無く、唯一回前に述べし如き理由にて發射せしのみ。又南部灣に於てありしこと、爲せしことは日本の貴紳の請によりしなり。故に若し他に發砲の音せりとせば、カストレコムか乃至或他の船よりせしものならんと。

トサイモンの質問

是に於てトサイモンは再び問へり。汝等果してエムペロルより自由貿易を許され居る蘭人ならば、何故に檣、帆、桁、米、食糧、其他の必需品を自由に請求せざりしか。南部の港に於ては汝等は之を十分に得たりしならんものを。何故に其時汝等の中にて我が官憲に出頭せざりしか。バタヴィアの太守は日本に寄港を命令せしにや、又は汝等自らの勝手にて來りしにや。如何なる吏員がケッチ船ブレスケンス及カストレコムの總指揮權を有するか。汝の航海が韃靼に向ふものなること、及葡國と和蘭合同國とは平和の間がらなる今日、汝等の來航は葡人の僧を上陸せしむるが爲にあらずといふことは、何人が之をエムペロルに證明すべきかと。

シャープの答辯

シャープ船長答ふるやう、初めて南部に入港せし時、數百の日本人來りて我等の船を見しが、彼等は我等の歡待を受けて我等の清水を汲入るることを許可せり。我等の欲するは是のみなりしなり。而して我等は和蘭人たることを彼等に告げたり。其後暴風の爲に再び南部に入港するの止むなきに至りしが、地方長官の許可を得るまでは入港を控へたり。此くて彼は船の凡ての必需品を買ふことをも許ししにより、其目的の爲に上陸したるに、我等が蘭人たること、隨ひてエムペロルの友人たることを證明する證人の助無く、囚人として江戸に送られたり。尙我等はバタヴィア太守よりも亦印度の官憲よりも日本に寄港する事に關しては格別の命令を受けず。唯テルナタを發する前に於て、契約書により、暴風其他の爲に兩船の相失したる場合に於て、再び容易に相發見せん爲には途上に在る日本海岸を以て此目的を達する最適當の地と判斷して之を協定せり。船の命令は商人、船長、及水先案内に屬せり。最後に縱令葡國と和蘭合同國との戰爭は終熄すと雖も、葡僧とは宗教に於て調和すべからざる間柄にて、我等には不俱戴天の仇敵なり。若し日本海岸に僧を留めたる嫌疑ありとせば、想像せられ得る限の最も殘虐なる死をも甘受すべしと。

マニエケベの質問

マニエケベは更に問ひて曰く、韃靼は何處に在るか。地圖なくして如何にして之を見出すべきか。如何にして貿易すべき都市の其地に在るを知りしか。汝等の國には世界の地圖あり。韃靼も固より世界の一部なり。何故に地圖無しといふか。疑もなくカストレコム號の水先案内は韃靼の地圖を有せしならん。長崎より送られたる斯くの如き地圖を見て汝等は驚かずやと。

シャープの答辯

船長答へて曰く、我等は何處にも韃靼の地圖を得る能はざりき。唯印度政廳よりの命令は、日本の最極北端を離るれば西北に進み、而して如何なる土地をも寓目せざらんには、四十五度まで進み、それより東北に北緯五十六度まで行け、其處にボリサンゲ河南海に注ぐといふに在りき。此河岸に貿易市あるは信ずべき書籍にも見ゆ。然れども歐洲船

は未だ此地方に航海したること無く、此海岸の地圖を發見することを得ざりき。眞實ならざる技術によりて作れる從來の海圖を信ずるを得ず。和蘭にも世界地圖はあれど、唯航海によりて發見せられたる處の外には海岸を置かず。又カストレコムと雖も斯くの如き地圖を有せざりしことは斷言し得。若し長崎に韃靼地圖ありとせば、唯内地の地圖たるに過ぎざるべし。我等の知識にては未だ歐人の其地に航海したるものあるを聞かずと。

和蘭に於ける宗教につきての質問

マニエケベは尙問へり。蘭人は基督教徒にして、葡人の信ずると同一の神を信ずるにあらずや。如何なる斷食日を守るか。十字架の發見せられし日を神聖とはせずや。法王の僧は和蘭に無きか。蘭國の宗教と葡國の宗教とに如何なる差異あるかと。

之に對する答

此尋問は次の如く答へられたり。蘭人は基督教徒にして三位一體を信ず。之によりて世界竝に萬物は六千年以前に創造せられ、今も支配せられ居ることを信ず。祭日といふは無し。唯一週に一日を神の日と稱して仕事を休み、多數の人は教會に行くなり。羅馬法王派の僧も私に小集會をなすことなるが、彼等は之が爲に屢〻裁判官の處罰を蒙れり。此は羅馬教と蘭人が懷ける信教心との間に大なる牴觸あるが故なり。蘭人は法王及其教義を忌みて、使徒の手により神自身の書きたる一書のみを信じて、之をば聊たりとも增減することを欲せず。是以外の兩者の差違は說明することを得ず。何となれば我等は少年の頃より海上の生活をなし居れるが故なり。而して又羅馬教を穿鑿するは我等の主要なる仕事に非ず。我等は唯祖先より傳承し來れる信仰のみを以て滿足せりと。

和蘭の海戰事態につきての質問

シクンゴ殿問はしめて曰く、バタヴィアより年々航海してスピリトサンクト(Spirito Sancto)岬を廻りマニラに赴く船は、如何なる目的を有するにや。其船は西班牙船と戰ひて勝ちたることありや。小船が大船に勝ちしことありや。船中には彈丸を避くべき胸壁其他の防禦工事を有せずや。海戰の法如何。劍、戰斧、手榴彈、照彈、小銃、馬具、兜を何に使用するかと。

船長は語れり。バタヴィア政廳は船をマニラの前面に出し、西班牙の艦隊を待てり。其艦隊は年々南海より同地に來ればなり。然れども常に之を逸し、唯近年一回會戰して之を沈沒せしことありと。

海戰の法は次の如し。大さを同じうする船二雙互に相逢ふときは一方は先づ他の風上に出でんと力む。而して其目的を果せば、風下に在る船に砲擊を加へて、後に船を接近せしめ、一隊の兵士に劍、手榴彈、照彈、拳銃、戰斧等を携へて敵船に乘入らしむ。是に於て兩艦の兵士は激鬪し、其一方は大抵非常の損失を受く。風下に在る艦は自己及敵船の煙にくらまされて自覺せざる間に敵軍に乘込まる。然れども大艦に對して小艦の捷つは、人員多く又操船に巧にして、而も夜間に於て、敵船に近づき之を制伏するだけの兵を乘入らしむる場合の外は、頗る難し。彈丸交換中には何人も之を防ぐの法なし。彈丸命中すれば、之に觸るる者は勿論、船側の破片に觸れても死する者多し。馬具、兜、其他の鐵製武具は艦中には用ひず、唯陸戰にのみ用ふ。

キラン攻取につきての問

次にはシクンゴ殿よりキラン城砦の略取に關し訊問あり。船長は所聞を以て之に答ふる所ありしまでは、審問も危險の惧なかりしが、是に至りてシクンゴ殿は憤怒の形相を現し、トサイモンをして問はしめて曰く、ブレスケンス號の蘭人が江戸を距る數哩の地にて日本漁夫と物品交換をせし際、其船に羅馬教の書物を殘し置くが如き大膽の行爲に出

でしは如何。速かに該書の内容を明すべし。何の目的にて之を爲せしか。直に陳述せざれば既に羅馬僧の例に見たるが如く、拷問を以て告白せしむるの方法ありと。

シャープ及ビレヴェルドは共に證言すらく、此嫌疑のかかれる書物は毫も知らざる所なり。海員中に無智の者ありしゆゑに斯かることありたらば、船の法律により、彼等を懲治する爲に其者に嚴重の刑罰を加ふべしと。

トサイモンは之を遜りて曰く、是れ羅馬教の書にして聖師等の圖あり。蘭人は之を知らずと證言すれど、十分の辯解とはならずと。シクンゴ殿も亦云へり。此件の事實は直に判明すべし。日本の法廷に於て明なる虚僞を申立つるは至大の罪にして、如何なる處罰も之に對して十分なるものあらずと。シャープ及ビレヴェルド再び答ふるやう、若し事實を僞りたりとの嫌疑あらば、如何なる苦痛の死をも厭ふまじと。

日本娼婦の記載

此審問の後判官は退出し、シャープ及ビレヴェルドは他の蘭人の中に歸れり。此等の蘭人は庇の下の打開けたる中庭に於て往來する人を見居たり。その中に或婦人は丁斯を伴ひ、之をして食物の皿を持たしめて客に販げり。其婦人は長き上衣を背後の地上に曳きずり、而も前方にては胸部を露したり。胴には花模樣の帶を締む。袂は大きく廣く、此袖を通して右腕の下に他の袂見え、凡ては開口を作られて左腕の下に懸れり。髪は頭の廻りに緩く垂れて、唯後方の一房のみ諸種の飾紐を以て括り上げられたり。後に此は普通の娼婦なりと知られぬ。彼等は大抵家の前に庇の下に三角形の腰掛に坐し、膝には食物の皿を置けり。其兩側には蓋ある壺二個ありて、食物と飲料とを盛る。此くして往來の人を誘ひ居るなり。

日本人蘭人を饗す

蘭人は船長の取調如何を聞かんとする間もあらせず、船長、商人の二人が忽に拉し去られしには皆大に驚けり。彼等は八右衛門に伴はれて行く間にも、此度は拷問に遇ふに相違なしと安き心も無し。小き庭に通れば、水責に用ふる瓶ありて水を湛ふ。然れども恐怖は直に去れり。立派なる室内に在るトサイモン、マニエケベ兩通譯の處に導かれて、ハチエモン(Phocchychemon)より酒食の饗應ありたる後、夕方宿に送り歸されたり。

翌日もシャープ及ビレヴェルドはシクンゴ殿の前に引出されて前日と同一の訊問ありて、同一の答辯をなせしが、是れ前後に矛盾なきかを見んが爲なり。但し新に加へられたる訊問あり、下の如し。

日本人の難問

日本の官憲は汝等の中に韃靼の地圖を有することを疑はず。恐らくは水先案内之を有し、汝等之を知らざるならん。長崎に來りて投錨する船にして地圖を持たざるは無し。此必要なる助無くして盲目的の航海が如何にして爲し得べきか。地圖なくして如何にして彼地に渡航するかと。これに對してシャープは下の如く答へたり。

韃靼の地圖を有せざるは確たる事實にして、水先案内と雖も之を有せず。長崎に來る船が、之に反して地圖を有し居る所以は、航海し得べき海を來るものなれば、其地圖を手に入れ易き故なり。韃靼には未だ歐洲船の航海せしものあらざれば、其海岸を地圖に記入し得べくも無し。されども我がケッチ船には羅針儀を備ふ。是れ大なる助力を與ふるものなり。之あるによりて、或知られたる地を發すれば、太陽及北極星の高さを觀測して(但し羅針儀以外の物の力をも借り)復び原の處に歸るを得べし。且つバタヴィアなる印度政廳の命令は、三十九度まで來りて日本の最極端を離れたる時は、船中に備へたる二個の地球儀に從ひて進行し、西北に四十五度まで韃靼を見出さんが爲に進航せる我等の發見地圖を作れよといふに在りきと。

シャープは尙附言して曰く、若し閣下幸に地球儀を示し賜はらば、韃靼、ボリサンゲ河、及貿易市の所在地を示し、並に我等が何處を目的とせるかを明すを得んと。是に於てシクンゴ殿は直に地球儀を取出さしめたり（是れエルセラクの獻品なり）。されども彼は尙怖しき顏して、唯之を遠くに示せるのみにて、地球儀上の何物をも指點せよと蘭人に命令せざりき。曰く、如何なる理由によりて韃靼の地圖無くとも、船中なる二箇の地球儀を用ひて航海し得ることを豫め告げざりしかと。シャープ答ふるやう、問はれたる限は凡て答へ申したり。されども航海の助たる地球儀其他に就きては、未だ訊問を受けざりしが故なりと。

トサイモン再びシクンゴ殿の名に於て問へり。何故に汝は海岸に於て大砲小銃を發射せしか。是れが爲にエムベロルの氣色を損ひたること甚し。汝は之を否定すと雖も、確實なりとの報告あり。幾回南部に於て發砲せしかと。

ビレヴェルドの答

ビレヴェルド答ふ。我等に對して如何樣の誣告ありしかは知らねど、日本の海岸に於て發砲せしは唯一回なることを誓言すべし。而して南部港の地方官の許可を得て投錨したる後、多くの貴紳來船して船内を見物し、船室に入りて小銃、拳銃が定めの處に置かれたるを見て之を取上げ、火を用ひずして發射し得るにやと不審り、好奇心より引金を引きて發火せり、後其請求によりて、大砲を十四回發射せしが、皆火藥のみを用ひたる空砲なりきと。

されどもトサイモンの云ふやうは、日本人は其取扱方を知らざるに、如何にして小銃及拳銃を發し得るか。蘭人自ら銃を發したるにて、日本人には非ずとの報告を受け居れり。日本人は此物に就きて無知識なり。僅の時間に之を學び得べくもあらずと。

シャープ答ふ。銃を發するは小技のみ。我等が裝藥して之を渡せしが故なり。此等の武器は燧石を以て鋼の上を打ち、火を發して藥池に在る火藥を爆裂せしめ、之によりて彈丸を發するなりと。

トサイモン曰く、予も斯くの如き武器は平戸に着せる蘭船中に之を見たりと。是に於てシクンゴ殿は蘭製の拳銃を法廷に持來らしめ、トサイモンに對ひて、足下の見たるは斯くの如きものなりやと問ひしに、彼は同一の製法なれども稍長かりきと答へたり。

シャープは尙進みて曰く、日本人が蘭人の武器を用ひ得るに何の不思議も無し。唯引金を拇指にて引くを以て足れりとするが故なりと。

此等の審問がシクンゴ殿の宅に於て行はれし間に、一人の日本僧、蘭人の傍に座し居りしが、彼は屢々シクンゴ殿に語りて蘭人を責めしめたり。

蘭人に對する其上の難詰

マニエケベ又問ひて曰く、汝等因はれし時何故劍を抜きて抵抗せしか。是れエムベロルの怒を招く所以なるを豫期せざりしか。何となれば汝等は探偵として來り、海岸を偵察せし者と認めらるべければなり。何故汝等が蘭人たることを告げざりしか。汝等は曾ては日本に來りしこと無かりしか。エルセラク（Elserak）、オフェルトワーテル（Overtwater）、コックバケル（Kockebakker）、及カロン（Caron）を知らずや。カロンは再び和蘭より印度に來らずやと。

シャープの答辯

シャープ之に答ふるやう、閣下、我等を信ぜよ。我等が抵抗したりと謂はるるは誣告なり。我等は友誼の假託の下に欺かれて、最下等なる惡人と同じ待遇を蒙れり。我等は異國に於て四方を圍まれ、脫走の見込なき時に、何故に抵抗なさずすべき。若し彼我敵對の行爲ありしとせば、八人の蘭人が易々と陸上よりボートに達し得らるる道理無し。此ボ

ートは必ず數百の兵士を以て警固せられたるべければなり。我等は武器なく、唯予一人帶劍せるのみ。斯くの如きは、我等は日本エムペロルの友人たるを知り、よし理不盡にして捕へられたりとも、直に放免せらるべきを豫期し居たればなり。眞實なる友人を誣ひて探偵と目する者は何人ぞや。何となれば我等は韃靼航海の途に在る指揮艦カストレコムを日本の海岸に索むるものにして、若し此地に航海することが此くまで惡意に解せらるるならば、寧ろ洋上に餓死すとも、エムペロルの不快を招くことを爲さざりしならん。且つ我等が蘭人なることは屢〻明言せり。それが否認せらるるは是非も無し。或は我等日本語に通ぜざりし爲に、之を了解せしめ得ざりしにもあらんか。我等囚人は未だ日本に足を入れたること無き者のみなり。予のみは二回平戸に來れり。其地より三年前にフランシス・カロン氏をバタヴィアに送り行けり。エルセラク及オフェルトワーテルとはバタヴィアを出づる少し以前に交話せしことあり。コッケバッケルとも相識れるが、彼は此頃和蘭に住して其地にて結婚せり。カロンが印度に歸れることは確知せずと。

シクンゴ殿蘭人をして誓はしむ

終にシクンゴ殿は、蘭人が誓約書に署名し、エムペロルの命令ある時は何時にても直に判官の前に出づべき義務を負ふべきかと問ひ、且又若し衞僧を日本に輸入せしこと明にならば、該誓約書は沒收すべく、尙其履行に關しては彼等自身のみならず、長崎なる蘭人の長官も出島に在る東印度會社所有の貨物と共に責任を負ふべしとのことを示せり。船長以下の囚人は此提言を喜びて受諾せり。彼等はブレスケンスにもカストレコムにも羅馬僧を載すべき考を有したること無ければなり。彼等は思へらく、羅馬僧は深仇なり、深仇の便宜を計らんとて自家の生命財產を賭するものあるべきかと。彼等は固く信ぜり、長崎の長官も何等の遲疑なく此提案を受入るべく、そは何等の危險あるにても無ければなりと。

書翰の日本譯

此提案の承諾せらるるや、シクンゴ殿は席を立ち、蘭人を距る數歩の處に來り、廊下の端に坐して誓約書の草案を作れり。同時に九月十日附エルセラク及オフェルトワーテルよりの書翰はシャープ及ビレヴェルドに交付せられ、此を日本語に飜譯して判官に渡すべしとなり。然るに彼等は此飜譯に就き、書翰の內容をトサイモンに領解せしむるに困却せり。そは通譯者は蘭語の知識に乏しかりしを以てなり。先づ彼は此書翰が誰に屬するかと問ふに多大の時間を費したり。日本の判官は此囚人が和蘭東印度會社に屬せる者なることを疑ひ居たりしを以てなり。

シクンゴ殿蘭人に好意を示す

書翰はトサイモンの手にて飜譯せられしが、彼は直に之をシクンゴ殿に渡せり。後者は亦トサイモンに誓約書を渡して之を蘭語に譯せしめ、次で蘭人をして署名せしめたる後再び彼に返納せしめんとせり。シクンゴ殿は又祕書の一人をシャープ及ビレヴェルドに遣し、自分は明日誓約書を判官に持行きて釋放を仲介すべけれど、釋放が卽時實行せらるべきや否やは今明言するを得ずと云へり。此懇切なる申入に對して、蘭人は祕書及之を遣したるシクンゴ殿に感謝せり。此くてシャープ及ビレヴェルドはトサイモン及マニエケベと共に旅館に歸りぬ。

通譯の執拗

二人の通譯者は曰く、蘭人にして判官及シクンゴ殿の前にて陳述することを誤らざりしならば、夙くに釋放せられしならんと。されども此痛言あるにも拘らず、彼等は蘭人に對して誤を正すべき方法を告げず、隨ひて船長及商人は何處に冒瀆の言の存せしかを知らず。强ひて請へども、或は嘲りて之を斥け、或は默して答へず、これには蘭人も大に當惑せり。

誓書に署名

然るにシクンゴ殿の書きたる誓約書は、シャープ及ビレヴェルド之に署名して、祕書イノウヱ・シクンゴノカミサマ（井上筑後守樣 Inowy Sycungono Cammysamma）に渡されたり。其意味次の如し、ヘンリー・コルネリソン・シャープ及ウィリアム・ビレヴェルドは和蘭の囚人と共に次のことを證す。彼等は和蘭の習慣に從ひてブレスケンス號より發砲せり。日本の海岸に於て斯くの如き行爲の禁止せられ居ることを知らざりしなり。此過失につきては赦免を請ふ。彼等は又バタヴィアより韃靼發見の爲に航海せしこと、及葡萄牙の僧を載せ且つ日本に伴ひ來らざりしことを明言す。然れども若し此等の件にして虛僞なること明となりたらば、其責を負ふべく、世界の何地に在りとも、エムベロルの命により直に來りて日本の法廷に出で、罪犯に相當する刑を受くべしと。

此誓約書をシクンゴ殿に提出したれども、釋放せられず。第二日にはキツビョーエ及ハチオサモン兩通譯及背教僧シヨワン旅舍に來りて、ブレスケンス號は地圖を有せざりしか、南部港に於て發砲せざりしかを問へり。ビレヴェルドは答へて曰く、ジャヴァ、テルナタ、タイヨファン及日本の海岸の海圖を所有すれども、韃靼の海圖は之を有せず。又日本貴紳の請により南部灣に於て數回發砲せしが、見失ひたるカストレコムの爲には海岸に於ては唯一回發砲せりと。キツビョーエは叫びて曰く、虛僞の蘭人よ、汝等の陳述は全く虛僞の通譯を與へられ居れり。トサイモンとマニエケベの通譯によれば、船中には一の地圖無く、又日本海岸に於ても南部灣に於ても一回も發砲せざることとなり居れり。故に日本の當局は此事件に疑を挾みて、汝等の答辯は虛僞なりとなし居れりと。是に於てシャープ及ビレヴェルドは通譯者の言ふところが自分等の證言せるものと大なる逕庭あり、自分等が判官の前に虛僞を語れりと云へるも其理由あるべきことを初めて了解せり。故に彼等は今や事情を了解せるキツビョーエ、ハチオサモン、ショワンに對して和蘭通譯の爲せる誤を正して、シクンゴ殿に執成を請へり。三人は此請を納れ、落膽する無きやうにと語りて辭去せり。

通譯間の內訌

翌日彼等は再び蘭人の旅舍に來り、マニエケベを見て、彼等殊にトサイモンが蘭人の陳述の通譯を誤れることを彼に告げたり。マニエケベは其過をトサイモンに歸し、トサイモンが主任として彼に沈默せよと命じたるなりと云へり。終に其報知トサイモンの耳に入るや、彼は蘭人にも之を語り、辯解して云く、彼は十分忠實に通譯したれども、シクンゴ殿が判官に反對のことを語ることありと云へり。然れども過失を感ぜざるにもあらぬ容子見えたれば、シャープは將來の注意を請ひ、日本の判官が事情を理解して、彼等を危險より脫せしむるやう盡力を乞ひしに、彼等は之を諾して去れり。

蘭人の拘囚の長びく所以

此後ハチオサモン來りて、エムベロルの母重病にて快癒まで法廷を開かざるが故に、彼等の望める如く速に長崎に歸ることの許しを得ずとも、暫く忍耐してあるべき旨を傳へたり。

翌日マニエケベ、ショワン、キツビョーエ、ハチオサモン及宿の主人は日本人多數を伴ひ來りて、蘭人十名の室に案內せり。何事を語れるにや蘭人には了解せざれども、エルセラク、オフェルトワーテルの名の話中にあるを聞けり。マニエケベは終に通譯してシャープに語りて曰く、此日本人の中一人は近頃長崎より歸りたる人にて、其出發の際エルセラク及オフェルトワーテル、其他の蘭人と交話したるが、皆健在なりと謂へり。マニエケベは其他何事も語らず。釋放のことを聞けば、輕蔑的に沈默を命じたり。

少年バウの尋問

此後も蘭人を見に來るもの多かりき。青年ヤコブ・デ・バウも貴婦人等が彼を見たしといふ口實の下に宿の主人の子息に伴はれてシクンゴ殿の宅に赴きしが、貴婦人等は來らず、シクンゴ殿の祕書取調を行ひたりしなり。其口供は他の蘭人のそれと異らざりき。

閣員會合の席にて審問

十月十九日四通譯、蘭人の宿に來り會し、和蘭の囚人を集め、翌朝日出前一時間に準備せよ、シクンゴ殿の宅に於て閣員の會合あり、尙一應審問あることに決定せりと云へり。蘭人は承諾の旨を答へしが、其出廷時刻の例に違ひて早きに多少疑惧の念あり。されども指定の時刻に四通譯、ショワン、宿の主人、其子息と共に行けり。控室に待つ間、終に午時となり、パン及酒三杯を與へられたり。それより謁見室に案内せられしが、四人のエスイト教徒の隣に疊の上に着座を命ぜられたり。彼等は拷問の爲に太く衰へ居れり。蘭人は何の故にエスイト教徒と同席するにやと驚けり。

エスイト四名の訊問

此教徒等は基督教を捨てたりと云へど、公に通譯等に語りて曰く、自由に背教者となりたるにあらず、呵責に堪へずして此くの如しと。判官は彼等の所懷及神の力につきて質問せしが、一人は息も絶え〳〵に答へたれども、他の者どもは決然たる態度を以てせり。

蘭人は判官に疑念を起さしむるを恐れて彼等背教者の取調に注意することを憚れり。されども隣接するが故に聞くともなく聞き居る中に、彼等は退廷を命ぜられ、蘭人は二閣員サカイ・サムモシサマ(酒井左衞門尉樣? Sackay Sammo-ccysamma)及マツォダイロ・イソサマ(松平伊豆樣? Matsodayro Ysosamma)に相對して着席せしめられたり。やがてサムモシサマは嚴しき顏色を以て蘭人に問ひて曰く、

日本閣員の尋問

シャープ及ビレヴェルドはブレスケンス號の指揮者たりと云へり。然るに同船は役員なくして南部港を出帆し了れり。蘭人は其配下に在る者に對して指揮權斯ほどに小なるにやと。

蘭人の答

ビレヴェルド答へて曰く、船長及商人の不在の場合に於ては、水先案内は習慣に從ひて指揮者となり、他の海員は之に服從す。されども水先案内が其事由をバタヴィアに在る印度支廳に開陳するに方りて、如何に答辯せんとするかを知らず。何となれば南部より拔錨すべからざる趣書簡を以て懇に申し置きしに、之に反して船長及商人の歸還を待たずして拔錨せしが故なり。彼をして此擧に出でしめし理由は、正しくは知り難く、寧ろ之を想像するに過ぎず。多分彼は我等の奪去られたるを見て、彼は蘭人の日本貿易は長崎に於ては許さるれど、北部に來るの特權無しと判斷し、より以上の危險を恐れたるならん。且船員は未だ一回も日本に來りしこと無き者のみなるが故に、水先案内の考にては、我等は江戸より南部の港の船に行くよりも長崎に在る我が國人の許に行く方が速かならんと判斷したるならんかと。

葡國に關する問答

サムモシ樣いはく、現エムベロルは蘭人に自由貿易を許されたるのみならず、エムベロルの父も祖父も蘭人には同樣懇切にてありき。然れども日本の仇敵たる葡人との戰爭の後、汝等が彼等と媾和したるは如何。此處置は日本エムベロルの好まれざる所なりと。

西班牙の勢力を語る

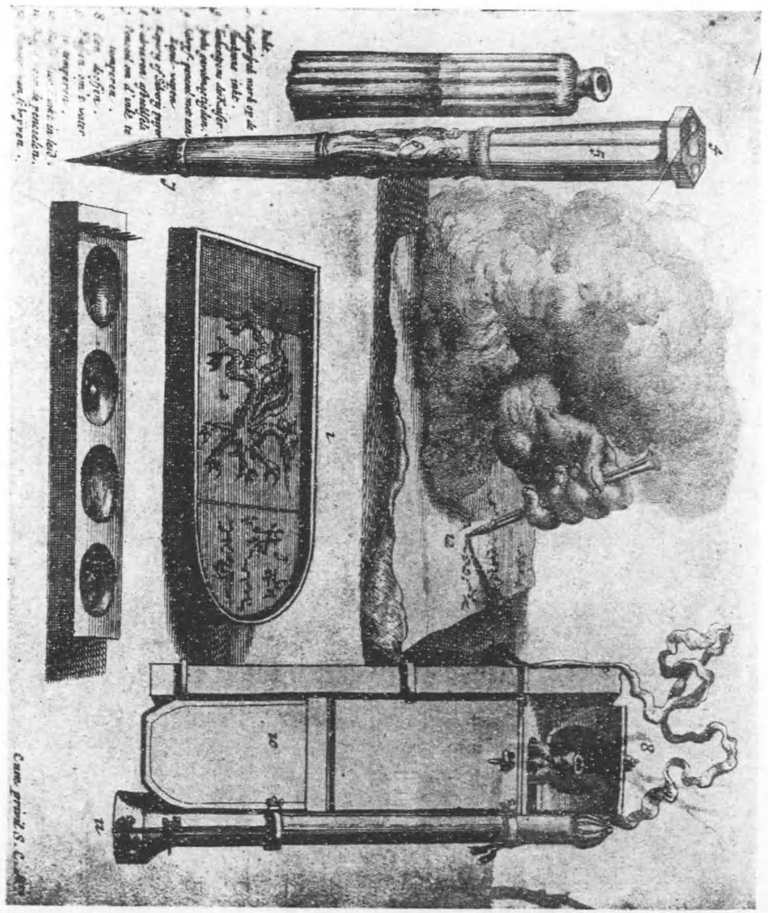
ビレヴェルドは答ふ、西班牙王は葡萄牙王の死後武力を以て同國を征服し、久しく之を支配し居りしが、西國の勢力隆盛にして世界の到る處に版圖を有し、歐洲は之が爲に惱まされしを以て、和蘭は他國の援助を得て戰を起し、各地に西班牙の領土を得たり。葡國は元來西國の羈絆の下に在るを好まず、曩時の自由を得、自國人の王を戴かんと欲せるを以て、西國の衰頽を見るや元氣づきたり。而して一層然りしは、和蘭の援助あるが爲なり。但し和蘭が之に援助を與へたるは葡萄牙を愛するが爲にあらず、唯西班牙を弱くせんが爲なり。之を援助せりとて、同國に對する恨は決して融和し得べきものに非ず。媾和にあらずして唯數年間休戰せるのみ。尙東印度會社は和蘭諸州及オランエ公の支配に屬し、彼はバタヴィアに命を下し、我等をして鬪爭を止めしめたり。日本エムベロルの恩寵は蘭人の深く感佩する所にして、蘭人は常に忠實なる友邦たらんことを期せりと。

日本閣員葡蘭兩國の宗教の異同を問ふ

サムモシ樣は尙審問を續けて曰く、葡人の僧は祈禱と供物とによりて、現世に於てのみならず未來の世に於ても自を助け又人を助け得と敎ふ。蘭人も此方法によりて利益を得べしと信ずるかと。

シャーブの答

シャーブ答ふ、閣下、我等の精神及肉體を苦しむる人々より善事の到來を豫期するほどに我等は愚にあらず。葡、蘭兩國の僧侶の差異は霄壤にして、蘭國の僧侶は羅馬敎僧侶の時代に殺害せられしもの數千に及べり。今日にては暴力を我等に加ふるを得ざるを以て、我等を無賴漢と罵り、猛火の中に投ぜらるべき者なりと稱せり。縱令彼等は我等を救ひ得とも、心より救ふを欲せざるべし。而もまた如何にして他を救ひ得べきか。何故に彼等は自己を助けざるか。彼等はかくの如き多くの呵責を脫するが爲に、その法術を用ひては不可なるか。我等は日本エムベロルが長崎に赴く



筆硯及筆寫の態

べき自由を賜はるものと信ぜりと。

此シャープの語には日本の貴族は皆笑へり。此審問中、シクンゴ殿の隣に座せる祕書は閣員と蘭人との問答を記錄せり。

日本の墨汁入

蘭人の筆記に曰く、墨汁入は長き箱の如く、其頂部より長き壜の口見え、その破壞を防ぐ爲に口は蠟製の蓋を以て蔽はる。箱には三區あり、一は筆を入るべく、筆の尖頭部は鋲(ピン)を以て定着す。壜の入れる箱の底には墨を收むべき場處あり。墨は赤きもあれど、大概は黑く、而して價は高し。彼等が之を用ふること少きが故なり。此墨にはエムペロルの紋章を附し、官吏ありて之を試用せざるべからず。その良品なる時は之に或文字を印す。若し此印なければ販賣又は使用するを得ず。犯す者は死刑に處せらる。

日本人は書技に精妙なり

之によりて日本人は書技に於て精しきを見るべし。筆は銅又は銀にて作らる。一端は八角にして頂は平し。此部分に各人の印を刻す。而して各人は書簡に此印を捺す。印の下には圓き中空の關節ありて、墨汁の色に從ひ黑色又は赤色の粉末を滿たす。中程には畫を刻せるが、是れ粧飾の爲なり。下には筆見ゆ。之を以て字を書するには次の如くす。前記の箱には一側に筆尖を入るべき圓き箱あり。他の側には長き方形の場處ありて、此處には四個の凹處あり、其端には八個の銅又は銀の鋲(ピン)あり。四個の凹處に水を注ぎて墨汁を作り、好むがままに之を黑又は赤とす。先づ筆を其水に浸して之を墨の上にて擦る。

日本人の書方

其書方も歐洲風とは異りて、筆を三指の間に置きて書くにあらず、手全體を用ふるやうにして、其上端は拇指と人差指の間に見え、中央を掌もて握り、此くして良き文字を書くこと迅速なり。紙は歐洲のものに似たれども、歐洲品よりも稍褐色にして又滑なり。書かぬ方の一面には綠の地に銀色の格子を現せり云々。

蘭國青年太鼓を打たしめらる

再び審問の話に戻る。此謁見室には新しき日本の太鼓あり。閣員マツオダイロ・イソサマ此太鼓を同じく審問を受け居りし青年デ・バウに命じて打たしめたり。彼は稍心得ありしを以て、初は進行曲を打ち、次には警報を打ちしに、諸卿の心に協ひたるが如くなりき。間もなく彼等は退席し、蘭人も亦歸宿を許されたり。

日本貴婦人の記載

歸途に貴婦人の歩行するを見たり。伴の者を多く從へ居たるが、或は蠟塗の道具を運び、或は手拭を持ち、或は諸種の食物の皿に入りたるを持てり。側には侍女團扇を持ちて行く。稍離れて二侍女從ひ、各曲りたる棒を捧ぐ。其棒の間には絹の天蓋懸れり。貴婦人の頭上に運び行くべきものなり。

貴婦人の外出には美服を着く。髪は長き紐を結びて飾とし、頸の下に垂れたり。左の顳顬には黄金の簪針を插し、其端には金剛石を垂る。髪の上に眞珠の耳飾あり。胴には廣き刺繡ある帶を締む。薄き絹を以て作れる日本の上衣緩く其上に懸り、其上衣の數は身分によりて五枚、六枚、十枚、二十枚乃至百枚までを重ぬ。

此間シャーブ及ビレヴェルドはシクンゴ殿の室内に於ける經過につき通譯者と語りたり。曰く、何故に彼等は四人の僧の次に置かれしか。是れ前例に無きことなり。又サムモシ樣イソ樣が俄に退席せし理由は如何と。之に對してトサイモン語るやうは、サムモシ樣は蘭人に對する忿怒甚しく、蘭人に逢ひたる時、彼等が日本の僧侶を伴ひ來りし曲事を斷ぜざるべからずとし、特に四人の葡萄牙僧の次に座せしめて有罪に決せんといふ考なりしなりと。此話は蘭人に少からざる歡喜を起さしめたり。彼等はエムベロルの宮廷に行き、大法廷に出頭すべき準備を急ぎつつありて、既に其時刻も近づき居れるなり。

二人のエスイト改宗を取消す

後に蘭人は旅館の僕より聞きたるに、四人の羅馬僧の中二人は日本の宗教に改宗せしことを取消したるが爲に、長崎行に決せるショワアンも更に命令あるまでは江戸に滯在すべき旨命ぜられたりと。二人の僧を拷責するには彼の居留を必要とせしなり。

四人の通譯二通の書翰の飜譯に苦しむ

トサイモンは蘭人を南部より江戸まで護送する吏員の一人なりしが、プレスケンス號の乘員の名簿を作ることを曩に船長に依頼しおきたり。蘭人は此を書き與へたるを以て、彼はマニエケベをして日本語に譯せしめたり。十一月二十四日トサイモン、マニエケベ、キツビョーエ、及ハチオサイモンの四通譯者は頗る惑ひ居たり。そはバタヴィアの太守より長崎に在る三郎左衛門に宛てたる同一内容の書翰二通、一通は蘭語を以て、一通は葡語を以て書かれたるを二判官より交付せられしを以てなり。此書翰は一六四三年四月二十四日附を以て發せられしものにして、サムモシ樣は其内容如何、兩書の異れるや否やを知らんと欲したり。四通譯者は長時間を費して飜譯せんと努めしかども能くせず、遂に蘭人に手傳を命ずるを以て便利とせり。トサイモンとマニエケベとは最も困却せしが、そは蘭語につきて知ることろ甚だ少きが故なり。而も彼等は良通譯者の稱を得たる者なりき。キツビョーエ及ハチオサイモンは葡語をよく了解せるが故に、蘭人は此二人と交話することを得、漸くにして兩書とも同一内容なるを知りて、之を日本語に反譯せり。

蘭人消息に接す

翌日マニエケベは蘭人を訪問せしが、其談話中に、シクンゴ殿に面せし時、彼等は近日江戸に來るべきエルセラクの到着まで此地に止らざるべからずと語りし由を告げたり。蘭人は季候寒冷に赴けるにより綿入の毛布六枚を十人の間に給せられんことを請求せしに、マニエケベは心得て主人に語りしに、主人は毛布のみならず他の必要品をも望のまに供給すべしと答へたり。

彼は尙シクンゴ殿よりの言を傳へて、蘭人は憂慮するを要せず、エルセラクも近々上途すべければと告げ、且つ長崎の消息二三を語りたり。

此後ショワンは長崎に赴くべしとて蘭人の宿に告別に來りしかば、彼等は之に書翰を托せんとせしに、そは禁制なりとて拒まれぬ。然らば何れの地にてか面會の機あらん時、蘭人の現狀を口頭にて申し傳へんことを依賴せしに、ショワンは之を承諾せり。

十月一日通譯者キツビョウエ等來りて理髮の許可を傳へしが、此時まで禁止せられ居たりしなり。

エムペロル蘭人を恐怖せしむ

數日の後トサイモンは悲報を齎して曰く、エムペロルは蘭、葡兩國の媾和につき、又蘭人が葡國と戰爭中は日本の北方に航海せざりしことにつき、未だ釋然たらざる所あり。（葡僧の輸入に關しては否認の證あるにも拘らず。）尙エムペロルは蘭人が日本の東南に在る日本の領地黃金島に航海するといふ事に對して少からず忿怒せらるると。

又曰く、此件は汝等蘭人が江戸に護送せられし時には陳述無かりしを以て、全體の事件の眞相を明にするが爲に、エルセラクの來るまで監禁し置くべしとの命あり。彼が一旦江戸に來りたる上は、葡僧を伴へりといふが寃罪なること

高官の服裝

と、亦黄金島發見の企ありきといふことも明白とならんと。

日本の黄金島

ビレヴェルド問ふやう、黄金島は何度に在り又何處の邊に在るにや。蘭人は日本の黄金島なるものあるを一向に知らずと。

トサイモン語りて曰く、其島は江戸の海角より六十リーグの海上に在りと。此によりてシャープ及ビレヴェルドは五月十九日カストレコム號を見失ひしと同一の海岸ならんと判斷せり。同處は江戸より東南約五十六リーグに在りしなり。

日本紳士の記載

彼等は此話を聞きて考へ居たる時、宿の主人來りてシャープ及ビレヴェルドを莊麗なる一室に呼び入れたり。此處にはキツビョーエ及ハチオサイモン一人の貴族と共に在り。日本文字の文書と方形の蠟塗の箱とを持ち、氈の上に座し、紹の皮を裏につけたる上衣を着せり。露頂にして髪は頭の頂に束ねらる。上衣は前は開きて胸の中程に金の鈎を以て止めらる。上衣の開きる間より花の模樣ある衣服見え、其袴は膝の上に垂れて殆ど足に及ぶ。左手には扇を持てるが、其頂は鍍金の薔薇を以て飾らる。僕は氈の各端を牽き、其緣が方形の座席の上に蔽ひかぶさる樣にす。すべて貴人の多數は右の如く氈上に坐して屋内を運ばれて、戸の側に座すなり。されども屋外に出づる時は輿に乘る。

貴族と蘭人との奇なる問答

さて此貴族は蠟塗の箱を開きて其中より取出ししは、先づ蘭製の罐とロムメル(Rommer)にして、次には赤き縞のセルジ、支那製の釉藥ある壺、帆布の一片、テルナタの煙草、白き緞子の殘片、佛國製の念珠の赤と黄とを混ぜるもの一連な

り。此等の品を一つづつ蘭人に示し、又トサイモン及マニエケベにも示せり。二人は之を見たる後問ひて曰ふやう、シャープ及ビレヴェルドの二人は此等の品を知れりや。此等はブレスケンス號より魚、野菜、其他の食料と交換せしものにやと。

シャープ答ふ。予は此等の貨物は壺、念珠、及セルジを除くの外、蘭國製なりと認む。此くの如き品は船中にもあり。同時にブレスケンス號の此種の附屬品が此等の品と交換せられしことは毫も知らざる所なり。閣下若し之を確にする必要ありと認めらるれば、之に關して他の八人の囚人を審問せらるべしと。是に於て前記の貨物を示ししに、凡ての人々の答は船長の言と異なる所なし。彼等はトサイモンに對し、何處如何なる時に此交換の行はれしかを貴族に問はれたしと希望せり。

貴族は答ふ、交換は八月二十五日に行はれ、蘭人が日本の東海岸に於て江戸に囚人として送られし日と同日なり。如何程北方に於て交換の行はれしかは之を辨ぜず。其時の船は長さ約三十尋、幅二十五呎、甲板の間に砲十六門、砲室に三門を備へ、後甲板に小口徑の砲四門を備へたり。其上には一羽の鸚鵡鎖に繫がれ居り、鍛冶工一人仕事をなし居たり。上記の品物を日本人と交換せし海員は大抵絹服を着け、黃金の指環を貫けり。然れども漁夫若し外國船を海上に見る時は之を通報すること當時の習慣たりしを以て、此度も地方官吏に通知せんと上陸せしが、其間に船は進行して遂に之を見失ひたりと。此口述よりして蘭人は是まで沈沒と定め居たりしカストレコムの未だ沈沒し居らざることを確にせり。此日本船の魚と物品交換を行ひし船はカストレコムに相違無しと思ひたればなり。

二船の記載　日蘭人の問答

貴族はカストレコムとブレスケンスの長さ、幅、砲數、引率せる端艇、艇中の砲等につきて尋問せり。

シャープ答ふ、我等の知る所にてはカストレコムは長二十九尋、幅四尋半、バタヴィアを發せし時は砲十五門を備へ、その中に端艇用の砲一門を含む。然れども テルナタに於てブレスケンス號より四門を取り、以て其數を增せり。カストレコムは小砲四門を載するに堪ふる大型端艇を有するのみ。ブレスケンスは長さ百八呎、幅五尋、端艇には小砲四門を載せ得ること カストレコムと同樣なり。然れども日本を見るや其砲を端艇より取りて本船に移せりと。

トサイモン尙問へり、ブレスケンスは暴風に如何なる帆桁と檣とを失ひたるか。樂器を有せしか。又船中に鸚鵡と鍛冶職を有せしか。幾人の絹服、金指環の青年と役員とを有せしか。ブレスケンスは大型端艇を牽かずや。それは船中に引揚げられ居りしかと。

ビレヴェルドは答ふるに先ち、數隻の葡船を描ける畫の懸れる壁の方に行き、之を指して暴風の爲に凡ての頂檣を失ひしことを示して、尙曰く、小き端艇は甲板より流されたり。樂器はヴァイオリン一個、篳篥（フラジエレット）一個を有せり。鍛冶職は在らず、砲手の一人が武器係を勤め居たり。鸚鵡二羽はテルナタより持來れるものにして、是は韃靼に於て何人かに贈らんとの考なりしかど、日本の地を見るに先ちて死せり。カストレコムに二羽ありしが生存せりや否やを知らず。ブレスケンスには四人の青年ありしかど、絹服、金指環の者無し。役員は三人だけ絹服を有すれども、之を匣中に納めたり。カストレコムには指揮官、水先案內、商人、事務長、外科醫は絹服金指環を着け、篳篥、風笛、琵琶及びヴァイオリンを有せり。最後に我等の端艇は遠洋に在る時は引揚げられて甲板に繫がれ居れり。然れども海岸に近づけば端艇及大形端艇は引卸されて牽引せらるるを例とすと。

貴紳は此問を文書より讀みたり。その一々の問の間に蘭人の答を註すること非常に速なり。一字は一語をあらはすものにて、語と文字とは其數相等し。其數はアタナシウス・キルヘルの言によれば八萬ありといふ。是れ日本人及支那人

は一の文字を他の文字の下に置く理由にして、一字は一全文をあらはせばなり。

* * * * * * *

既にして蘭人の答辯を書き留めたる貴紳も去りたれば、蘭人は通譯に對ひ松前は經緯何度に在るかを問へり。松前は前記の船の前面に見えたりといふ地なり。然れども通譯は之を知らずと云へり。蘭人は此答に對して不信の念を抱きしが、尚一層驚きたるは、旅館の小使等より内密にせよとの約束にて前記の船の幾人かが拿捕せられて拘引せられしことを承知せし時なりき。

翌日蘭人等再び旅舍主人の美室に入りしに、そこには四人の通譯の外に昨日文書を以て質問せし貴紳も來り居れり。蘭人は彼が奉行(Bongyo)と呼ばるることを了解せり。其次に尚日本の貴族三人座せり。未だ蘭人の見ざりし人なり。此三人の中一人は嚴格に蘭人を凝視してありたり。彼等の見たる所にては此貴紳は四十二三歳にてもあるべく、身長高く、大なる平たき面にて胡頽子の色をなし、鼻低し。彼は前記の船に赴きしものにて、十人の囚人の何れかが彼の之より先に見たるものに似寄りはせずやとて其檢分に來りしなり。

奉行は前日と同樣の訊問を繰返しし、此間に能ふべくんば蘭人を罠にかけんとせしなり。最後に以前の問に加ふるに次の新難問を以てせり。曰くカストレコムの指揮者、水先案内、及商人の體格年齢は如何。ブレスケンス號に髪の短きもの幾人あるか。カストレコムとブレスケンスはバタヴィア拔錨の時幾人を載せしかと。

シャープは次の如く答へたり。曰く指揮官は四十一歳になるやならずにて、美貌にして身長高く、褐色の髪にして美しき鬚あり。水先案内は二十六歳ばかり、身長は中位なり。商人は水先案内より少きこと三歳、鬚無し。短髪の者ども もにつきては確なることを言ひ難し。然れども推察する所にてはブレスケンス號に在りし者十五人二十人の間に在りしならんか。又人員はバタヴィアを發せし時各船六十人を載せたりと。

奉行は亦此答を書取れり。彼は起ちて去らんとして三人の貴族と少時談話をなしたり。其時貴族は蘭人を嚴しく睥みつけしかば、蘭人は少からず驚愕せり。是に於て奉行が三人の貴族と共に退席せし後、蘭人はトサイモン及マニエケに對ひて、前記の船が何度の處にて發見せられしか、人々は何處にて捕はれしか、その捕はれしが爲に新しき困難起らずやと問へり。

トサイモン答ふらく、船は微風にて日本の北海岸を南方に航行せり、その牽き居たる端艇には帆檣と「ボルト・スプリット」とを有し、石砲四門を運べり。一隻の小端艇其舷側に繫がれ居れり。此後如何にして新しき困難の起るべきか。カストレコムより取去られたる囚人が諸君の韃靼行を證明せば、諸君の放免は必定なるべし。其故は此事に關する彼等の詞にして諸君の詞と符合せんには、彼等の言ふ所の眞實なることを肯定すべければなりと。

四人のエスイト派の釋放

其後蘭人はハチオサイモン及旅宿の主人の子息の口より、エムペロルが四人のエスイト教徒(二人は伊太利人、一人はカスチリヤ人、一人は葡萄牙人)をエルセラクの此地に來るまで獄中に置き、彼をしてバタヴィアに送らしむることあるべきを知れり。……

十月二十五日イシカワ・イサヤモン殿來り、エルセラクは本月九日に大阪に着したれば、五日以内にはエムペロルの朝廷にあらはるるなるべく、そはエムペロルが特に旅行を急がしめて、例の如く獻品を持參する爲に停まること無く、それ等の事は後より取行はるべき旨を命じたればなりと傳へたり。

蘭人其居館を移す所以

翌日キツビョーエ及ハチオサイモンはマニエケベを通じて、蘭人に彼等は今の旅館を出でて宿の主人の子息の家に移るべし。そはシクンゴ殿及三郎左衛門殿はエルセラクを此旅館に泊せしむることを命じたるが故なりと傳へたり。而してエルセラクを先づ獨り審問して、韃靼航海の件につきシャープ及ビレヴェルドの言とエルセラクの言と符合するやを知らんと欲するは、エムベロル及閣員の意志なりと言へり。蘭人は此くして轉宿せしが、新宿舍が牢獄の如くなるには一驚を吃せり。既にして家の主人及家族が歡迎の言を陳べ、酒など出したるによりて、聊か心を慰めたり。此くて二人の通譯此處に來りて其役目の趣を述べ、エルセラク使節に私信を渡すべしと申出でぬ。シャープ及ビレヴェルドは之につきて疑を抱き去就を決しかねしが、終に冒險を試みんとて、書翰をエルセラクに贈り、彼等が韃靼航海のことにつきて惱める旨を告げんとして、將に書き終らんとせし時、俄然命令ありて、蘭人は直に例の法廷に出頭せざるべからざることになりたり。然るに閣員の出席無くして開廷するに至らざりしかば、訊問に遇はずして歸宿せり。

* * * * * * *

蘭人再び日本判官の前に引出さる

蘭人は新しき宿舍に歸りしが、休息の暇とてはあらず。翌日はトサイモン、マニエケベの二人來りて、江戸市外の接見所に案内せられたり。内門の前にて囚人は靜に立停まり、シャープ、ビレヴェルドの二人のみ入ることを命ぜられしが、彼等は非常に快き庭園の中を行き、その莊麗に驚きたり。その一端に入口ありて立派なる廣堂に入る。此處には最も美術的の廊ありて、閣員は尊嚴の服裝にて座せる樣、歐洲の如何なる王公も到底之に比較すべくもあらず。蘭人之に近くや直に跪座を命ぜられたり。

シクンゴ殿の新審問　ビレヴェルドの答辯

シクンゴ殿は以前の如く先づ口を開き、汝、船長、商人、共に此場に於て眞實を語るべし。エルセラクは今や刻刻其到着を待たれつつあるが、其語る所と汝等の申立と一致せざるに於ては汝等は最も慘酷なる拷問を免るるを得ざるべしと。

シャープ答ふるやう、我等の知れる限り、眞實ならざることを言ひしこと未だ曾てあらず。閣下の訊問あらば何にても卽答すべしと。

シクンゴ殿は次の問を發せり。汝等は宿舍に於て本月八日九日の兩日奉行の示したる貨物を知らざるか。其貨物の交換の行はれし船を日本の北部に於て見たること無きか、風は日本の北海岸よりジャカトラに赴く爲に順風なる時に、其船は東に行きしを、何と考ふるか。最後に數日前サツァンモー（Satsammoc 薩摩か）の海岸に沿ひて航海せし船は何處に屬せしものか、推測し得ずやと。

ビレヴェルド答ふ、我等に示されたる品につきては同樣の品がブレスケンスの船中にも在りしことを知れり。然れどもブレスケンスに屬せる海員と日本人との間に之を交換せしことを知らざるを以て、カストレコム號より出でたるならんかと思惟す。その船は不知の陸地の前に於て夜間起りたる暴風の爲に去る五月難破したるものと、我等の判斷せるものなり。右の船が東航せしは、風に任せて日本の東南端に航し、よりて航海を短縮するに容易ならしめんが故なり。風は九月央には常に北緯度に於て都合よく吹くを以て、かく判斷するなり。但し二隻の船に關しては確實なることを言ふを得ず。然れども恐らくカストレコム及ブレスケンスがバタヴィアに歸りしには非ずやと推せらる。そは其船將等の囚禁せられたるによりて之を知るなりと。

一層の奇問　ビレヴェルドの答辯

シクンゴ殿は更に訊問の項を加へて曰く、汝等はオランエ公が葡王を援くる爲に出しし水陸の兵數を語り得ざるか。何故彼等は俸給の缺乏の爲に叛きて内亂を惹起するに至りしか。之に關する出來事につき知る所なきか。蘭人は葡國の貨物を賣らざるか。賣貨の包裝に附せる十字及幾多の線は何の意味なるか。蘭船にはアヴェマリア又は木の十字架は無きかと。

ビレヴェルド答へて曰く、葡國に出しし蘭兵の數及其他に於ける彼等の行動は、バタヴィアを發するまでは未だ同地に知れ居らざりき。又葡國と蘭國とは相互の貨物を賣買する程に平和にあらず。貨物の包裝に附せる十字及線は其貨物を産ずる都市の標記に外ならず。アヴェマリア及木十字架は羅馬教に屬せり。故に蘭船にては之を運ばずと。

ビレヴェルドの言終るや、シクンゴ殿は再び問へり。汝等の神はカスチリヤ人及葡萄牙人の神と同樣なりや。其名は何と云ふか。何人か之を見たりや。彼は何處にて物を言ひしか。汝等の神は眞正の神なりと信ずるは何によれりやと。

* * * * * * *

ビレヴェルドの基督教に關する解答

ビレヴェルド答ふ、カスチリヤ、葡兩國人は三位一體を認むること蘭人と異ならず。然れども彼等は之を老人、青年及鳩の形に於て現す。蘭人は之を非とす。蘭人の方に於ては神を無窮の靈的のものと見る。何人も繪畫又は想像を以て之に似たるものを作ること能はず。神は希臘語又は希伯來語に於て種々の名あれども、蘭人は之を父なる神、子、及聖靈と呼ぶ。而して彼は覺觸しがたき靈なるが故に、何人も之を見るを得ず。隨ひて人は亦自他の靈魂を見るを得ざる所以なり。然れども見るべからざる神は、彼の萬物の創造、保存、支配の事業に於て見るを得べし。又神の子はベツレヘムに生れし時、男兒の性を婦人の體に假りて自己を作り、パレスチナを旅行して奇蹟を行ひ、彼を信ずる者を永久の罰より救はんが爲に十字架上に寃死せり。凡て斯くの如き事實は二册の書に記さる。一は希伯來語を以て豫言者之を書き、一は希臘語を以て使徒之を書けり。豫言者も使徒も共に神が眞理の精神を與へたる大聖人なり。此書は原文より希臘、希伯來の兩語に精通せる人によりて蘭語に譯せられたりと。

シクンゴ殿の質問　シャープの答　ジャヴァの記載

シクンゴ殿は更に祭日につきてカスチリヤ、葡兩國と蘭國との異同を尋ね、其名稱は如何。蘭人は斷食を行ふや。西班牙人の如く僧侶に就きて學問をなすや。此等の僧侶は何者なるか。彼等は國家の歳入中より年俸を受くるか。彼等は國事に容喙するか。オランエ公は法律上何人かの制裁下に在るか、又は唯一の人として和蘭を統御するかにつきて問ひ、蘭人之に答へしが、最後にジャヴァは大島なるか。誰が之を所有するか。住民は如何なる人なるか。其色如何。種族の名稱如何と問へり。

* * * * * * *

船長は之に答へて曰く、ジャヴァは大小のジャヴァに分る。大なる方はスンダ海峽を以てスマトラと隔たり、長さ百五十リーグなるが、幅は之に比して頗る小なれども、或場處に於ては稍廣し。住民の語る所によれば一川、島の中央を流れ、木を石に變ずと。蘭人の敵たるマタラム(Mataram)は此島の東方の大部分を領有す。時々東印度會社と同盟せるバンタム(Bantam)王はスンダ海峽に沿へる廣き地域に君臨せり。此兩島の間にバタヴィアありて、ここに印度貿易の統領及知事は合衆ネーデルランデンに住居せる該會社の爲に法院を維持す。ジャヴァの住民は野蠻にして信用すべからず。體格强大頑健にして、頰は廣く厚く、眼瞼大に眼小なり。鬚少く、髮は黑く短く、皮膚の色黃なりと。

日本の囚人

此答の後シャープ及ビレヴェルドは退出を命ぜられたり。其成功を聞かんと待ち居たる他の囚人の處に歸れば、彼等と共に日本の囚人三十四人あるを見る。手枷せられて坐せるもあり、上衣の下にて腕を縛せられたるもあり。何事をか相語れるが、其受くる虐待を訴ふるものに似たり。間もなく彼等は蘭人と入換りに引見室に連れ行かれたり。シャープは旅舍に歸らんことを乞ひしかど許されず。マニエケベの語る所によれば、件の日本人等は兩親が基督教信者なりしを以て、長き間收監せられ、呵責せられしなりと。その頰は落ち、眼は窪み、顏は歪み、全體生きたる人といふよりも屍骸の如く見えたるも道理なりき。

エルセラク到着の報

彼等の此處に居る間に、ハチォサイモンの僕、エルセラク使節の一行明日午前江戸に到着すべき旨を傳へたり。此報告は蘭人旅舍の子息によりてシクンゴ殿に達せられ、是にて閣員も退出せり。

翌日は十二月一日なり。シャープは私に通譯キツビョーエを迎へて二通の書翰を渡せり。一通は他の中に封じ込まれ、閣員が數度の審理の狀況を記し、エルセラクの注意を乞ひ、且自身の覺悟に資したるものなり。

蘭使エルセラク江戸に着す

正午頃エルセラクは江戸に到着せり。蘭人を今一度審問せられたる上ならでは、彼等並に蘭語通譯トサイモン、マニエケベも之と通話するを得ず。翌日蘭人はシクンゴ殿の宅に來ることを命ぜられ、定の處に一時間ばかり待てり。此處に四十歳より五十歳の間と見ゆる一人の色白くして瘠せたる人あり。盛粧して四角の褐色の鬚あり。蘭國の牧師と見えたり。手には手枷をかけられたるが、今取外されて、シクンゴ殿の配下と非常に忙しげなり。配下の吏は筆墨紙を取りて早書をなし、時には熱心に談話し、妙に身體を動かし居たり。マニエケベは語りて曰く、彼は都に住みし六百人の基督教徒を彈劾せるが、其人等の審理せらるるまでは手枷をかけられ居るなりと。

シャープ及ビレヴェルドの訊問急なり

かかる中にシクンゴ殿の祕書は筆墨紙を持ちてシャープ及ビレヴェルドの傍に座し、次の如く語り出せり。汝等船長及商人はバタヴィアを發航せしより南部港に來りて捕へらるるまでの航海に關する事を悉く書付くることを嚴命す。今までに何にても申立を忘れたることあらば、此際之を申立つべし。その凡ての事が書かれたる上にて、エルセラク及カストレコム號の指揮官(當地に來ることを命令しあり)の申立つる所と比較すべし。若し事實に相違の點あらば、汝等生命の危險あるのみならず。東印度會社も出島に於て非常の損害を蒙るべしと。

シャープ答ふるやう、若し申立の條々眞實にあらざる時は、如何なる苦痛に逢ふことをも滿足に思はん。我等は常に訊問に對して十分誠實に答へ來れるが故に(將來も亦同じかるべし)、聊の危險あるを思はずと。

日本祕書長の審問　ビレヴェルド及シャープの答辯

是に於て祕書長は審問を初めたり。何時カストレコム及ブレスケンスはバタヴィアを出帆せしか。他の船にして共に出帆せしものありや。テルナタに投錨せしは何時なるか。カストレコム及ブレスケンスは一緒に到着せしか。一緒に拔錨せしか。何處にて何時カストレコムと相失ひしか。カストレコムは其後見えざりしか。カストレコムを見失ひしは何國なりしと判斷するか。日本とテルナタの間にて如何なる陸地にも出遇はざりしか。カストレコムを見失ひたる後何れへ航海せしか。ブレスケンスは日本海岸に寄港せしか。何時南部港に水を得る爲入港せしか。何時同地を去りしか。南部港に第二回に入りしは何時なるかと。

ビレヴェルド答へて曰く、本年二月三日カストレコム及ブレスケンスはバタヴィアを出帆して、テルナタに向ひし

が、其目的は韃靼を索むるが爲なりき。出帆せし時は他に友船なく、唯カストレコムのみにして、我等は之と共に四十五日間航海したる後、マレイエン城(Castle Maleyen)の下に投錨せり。四月四日更に航海を續け、五月十九日までは絶えず共に進行せしが、同日の夜暴風の爲に三十四度の邊に在る不知の海岸に流され此處にてカストレコムを見失へり。如何なる海岸なりしかは今之を陳ぶるを得ず。夜半之に近づきたる上に、船を擱座せざらしめんこと、なし得る限りの力を盡ししが故なり。此努力は成功して、翌朝には此陸地を離るること七リーグなりき。之が爲に十分に海岸を見るを得ざりき。我等はテルナタと件の海岸との間には他に陸地を見ざりき。我等はカストレコムを見失ひし後、日本の東北地點の方に走りしが、是れテルナタにて作りたる協約書に從ひて同船を發見せんが爲なり。我等は五月二十九日日本の海岸に來り、十二日の後南部港に入りしが、翌日我等の目的として來りし清水を積み入るるや、直に同港を出で、風に任せて日本の東南地點に航せんが爲に、外洋に正東に出でしが、凡二百リーグも航走したらんと思ふ頃劇しき南風吹き、北方よりも同樣に强き暴風來り、我等は大に惱まされ、時には日本を見たれども、我等の豫期せるよりも北に全一度だけ流され居たり。終に四十七日間彼方此方に漂蕩せる後、再び南部に入港するを必要とするに至れり。然れども地方官より入港の上各種の飲料其他必需品を買入るべき許可を與へられし迄は入港せざりき。此約束ありしにより上陸せし所を捕へられ、囚人として江戸に送られしなりと。

秘書は尙進みて曰く、カストレコム號の船長、商人、水先案内の容貌、體格、年齢、姓名如何。彼等は是まで日本に來りたることなきか。エルセラクは彼等を知れりや。ブレスケンス號は韃靼に於て貿易する爲如何なる船貨を有せしか。此航海に關し何處に何時エルセラクと語りしか。彼はブレスケンスの積荷に關して知る所ありやと。

シャープ答へて曰く、カストレコムの船長は名をマルチン・デ・ウリース(Martin de Uries)といふ。身長は中位にして、褐色の髮及鬚あり。年齢四十一歳なり、水先案内ペーテル・ウィリアムソン・クネッチェンス(Peter Williamson Knetcheyens)は低き肥えたる人にして、凡二十六歳なり。商人アブラハム・ピッタヴィン(Abraham Pittavyn)は丈高くて瘠せ、髮は黃にして鬚無く、年齢二十三歳なり。デ・ウリースは數年前日本に來りたることあり。又クネッチェンスも來れり。當時一人は按針手にして、他は運轉手なりき。然れどもピッタヴィンは未だ日本を見たることなし。疑もなくエルセラクはデ・ウリースを知れり。タヨフォン(Tayovon臺灣か)よりバタヴィアに一緒に航海せしことあり。バタヴィアにては彼は又ピッタヴィンにも逢ひたることあらんか。然れどもクネッチェンスに關しては上に陳べし如く嘗て日本に來りたることありといふ外には言ふべきこと無し。ブレスケンスの船貨に關しては、我等の有せしものは一々之を擧ぐるを得。大抵小く包める歐洲又は印度の貨物なり。東印度會社は此を以て韃靼人が如何なる品を欲するかを試みんとせしなり。然れども主なるは布片及胡椒なり。又我等はエルセラクとバタヴィアを發する前日に語りたり。然れども彼が我が船貨を精確に知れるや否やは之を言ふを得ず。但し彼は印度の當局と語りたるを信ずと。

カストレコム號の韃靼人

最後に秘書は問へり、カストレコムの船中に居り、新貿易の發展に關して盡さんとせし韃靼人の年齢、體格、姓名、職名は如何と。

答へて曰く、韃靼人は名をダヴィッド・カソン(David Cason)といひ、二十一歳、褐色にして肥えたり。職分は「アンダーファクトル」(副商人)なりと。

蘭人に誓書の要求

右終るや秘書は起ちて、エルセラクが誤り無くブレスケンス及カストレコムのテルナタに向ひて出發せし精確なる時

日を證明すべきことを確示する爲に文書に署名することを肯んずべきかと問へり。シャープ及ビレヴェルドは欣然として之を承諾したり。斯くて祕書は提議せられたる文書を認め居る時、長崎奉行代理三郎左衛門殿蘭人の座し居りし室を過ぎて、笑顔を以て彼等を見たれば、蘭人も頭を地に下げたり。

其間に夕方となり、蘭人は旅宿に歸る許可を得て、三日間滯留せり。但しエルセラクの消息につきては、彼が商人バウル・コルネリソン・ヴェール(Paul Cornelison Veer)と共に日本の閣員の面前に出で、夜間嬉しげに歸館せりとの報を聞きしのみ。

エルセラク及拘囚の蘭人シクンゴ殿の前に出づ

十二月五日十人の蘭國囚人は再びシクンゴ殿の宅に送られたり。船長及商人は中に入りたれども、他は皆戸外に待てり。其處を間もなくエルセラクは從者と共に通過し、シャープ及ビレヴェルドの何處に在るかを問ひたれば、彼等は隣室に待てりと答へたり。エルセラクは其方に行きしかど、彼等を見ず、引見室まで進みたり。其處にシクンゴ殿及三郎左衛門殿は多數の貴族と共に出で來り、會釋ありし後、シャープ及ビレヴェルドを入らしめ、シクンゴ殿はエルセラクに向ひて、是等の人が彼等自ら稱するが如き人なるを知るや。又彼等はブレスケンス號と共に韃靼に送られたる者にして、葡萄牙の僧を日本に送致し、若しくは其他の惡しき意圖を此國に對して抱きたること無きかと問へり。エルセラク答ふるやう、シクンゴ殿閣下、予は此船長と商人とを熟知せり。此はヘンリー・コルネリソン・シャープにして、彼はウィリアム・ビレヴェルドなり。彼等は二月三日バタヴィアを發せしが、そは蘭人の甚しき怨敵たる僧侶を伴ふが爲に非ずして、韃靼のボリサンゲ河に新に貿易地を索めんが爲なり。日本帝國に對して何等の惡意を有する者に非ず。其眞實を證する者は獨り予のみならず、年々長崎に來れる東印度會社の船舶は皆進みて保證せんと。かく言ひ了るや、エルセラクは明日エムベロルの前に於て、或は少くとも主席閣員の前に於て、文書に署名して約束を履行すべしとのことを告げられ。彼は欣然として之を承諾せり。

エルセラク蘭人に釋放を告ぐ

次でシクンゴ殿及三郎左衛門殿はエルセラク使節を玄關に伴ひしが、エルセラクは此處に座せる蘭人に對ひ、諸君は放免せられたりと云へり。此語が彼等の心中に如何なる變動を起ししかは殆ど言語に表し難し。彼等は刻々死を待つものの如くに煩悶し、希望と失望との間に迷ひ、到底野蠻的なる日本人よりしては無慈悲なる死を豫期するの外なく、通譯者はあれども、其惡意より又は蘭語の知識無きより、虚僞の通譯をなし勝なるべく、又何よりも怖しきは、日本の官憲の苛酷にして、些細の虚言をも死を以て罰することを知りて、悒惱を窮め居りしなり。彼等は歡喜の涙を流したり。餘りに急遽なる吉報は却て疑を生ぜしなり。されども彼等は日本風に頭を地に接けて、彼等の禁囚中に受けたる親切に對して、シクンゴ殿及三郎左衛門殿に厚く感謝したり。

然るに蘭國の囚人が此く歡喜し居る間に、エルセラクはシクンゴ殿に召還されたり。暫くして歸り來りしが、街上に於ては囚人等は使節の前に行かしむべく、使節の從者の中に交りて行かしむべからずと命令せられし由なり。

エルセラクはシャープ、ビレヴェルド兩人を晩餐に招き、航海中の出來事及南部に囚はれし以來の談話を聞きたり。後兩人は新しき旅舍に歸れり。翌日エルセラクは再び兩人を招き、冬季に方りて最も必要を感ぜし衣服、寢具等を與へたり。

蘭人再び痛心す

かかる中に通譯ショースケ(Sioske)來りて、船長及商人の旅舍に歸ることを傳へ、エルセラクが宮中に出づるまでは旅

舍に引籠り居るべき旨を命じたり。此命令はシクンゴ殿及三郎左衛門殿より出でたるものにして、蘭人は直に之に服從せり。夜に入りて彼等はエルセラクの宮中に出でしを聞きたり。然れども二時間を經れば彼等はエルセラクを見るべしとありしショースケの言は事實とならず、又エルセラクよりも宮中の成功を通知し來らず。蘭人は更に新しき障碍の生ぜしには非ずやと憂ひたるに、翌日も何等の消息を傳へられず、益〻危惧するのみなりき。

江戸の大地震

此く幽鬱の念に襲はれ居りし時、俄に大地震ひ動き、家の屋根は地に墮ち、壁は互に倒れかかり、振動の强き地にては一層大なる損害を生じたり。

* * * * * *

蘭人エムペロルの居城に至る

十二月八日囚人たる蘭人は、通譯ハチオサイモンより、エルセラクは當日日本のエムペロル竝に閣員の前に出づべく、其上にて彼等は放免せらるべしとの通告を受けたり。旅舍の主人の子息は彼等を引率せしが、何處へ行くとも亦何の爲にと云ふことをも語らず、街より街を歩みて終にエムペロルの城に達せり。城は四濠を以て圍まる。之を越え門を通ること十回にして、床に疊を敷きたる弓形門まで來るや、エムペロルに謁見の呼込めるまで停止せよと命ぜられたり。

やがて二人の通譯トサイモン及マニエケベ來りたり。又宮内官の中のホシセンネモン殿(Pochycennemondonne 星千右衛門殿?)といふ紳士來りて、大なる木造の女關を示して、此處よりエムペロルオウィ樣 (Owysamma 御上樣) の方へ案内せらるべきことを語れり。

江戸の地震

蘭人條件つきにて放免せらる

頓てホシセンネモン殿蘭人を導きて廣き中庭を過ぎ、次關より入りて、鍍金せる廻廊に至れり。此處にて彼等は日本の風習に從ひ、跪座して顔を地に接くることを命ぜられたり。やがて日本の閣員及エルセラクを前記の廊に見たり。シクンゴ殿はエムペロルの代理としてエルセラクに云ふやう、十人の和蘭人は或私の目的あるかの如くに數日間日本海岸を航海し、南部灣に於ては發砲して善良なる住民を驚かしたることは罪科に當れど、彼等は元邪氣あるに非ざる由を表し、且卿の言も彼等の言と符合するの故を以て、エムペロルは彼等を放免して卿に引渡す。然れども如何なる時に於ても、若し彼等が日本帝國に對して何事かを企つるなど彼等に不利益の報告ある時は、卿は之に對して責任を負ふの條件あることを申置くと云ひたり。エルセラクは之を承諾せり。シクンゴ殿は又蘭人に對ひ、彼等が日本國に不利益なる企をなすかどを以て疑を受くる場合には、和蘭より日本に來りて我が官憲の前に出頭すべきことを約束せよと言ひしに、彼等も之を承諾せり。最後にシクンゴ殿曰く、さてエムペロルオウィ樣は汝等を放免せらる。今は自由にあるべしと。彼等は此一言を耳にして再生したるが如くに感ぜり。一には長く且危險なる禁錮より放免せられしに驚き、一には眼前に見たる言ひ難き莊麗と豪富とに驚きしなり。如何なる時代も、如何なる國土も王者の尊嚴を記したるものに、日本エムペロルの華麗に比すべき記載を有すること無し。

* * * * * * *

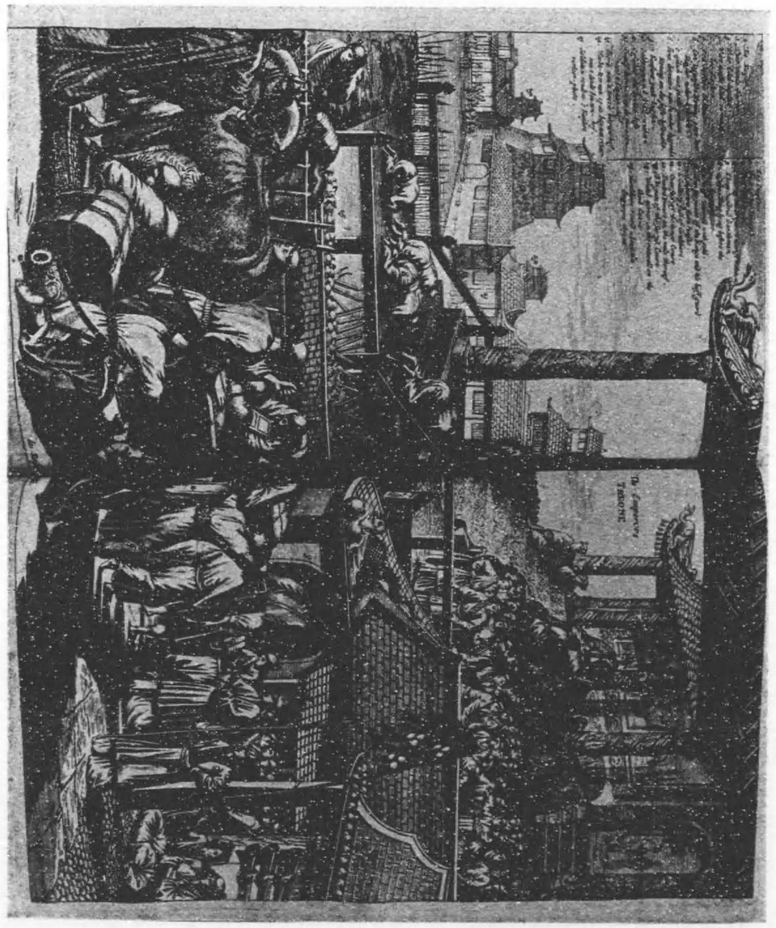
日本エムペロルの豪富

聖書に記されたるソロモン王の豪富と華麗とは當時に於ては其匹を見ざりしならんも、彼もし今に存在したらんには、日本エムペロルに及ばざることと遠からん。エムペロルが如何に尊大なる態度を以て、外國の使節及年々日本の東西兩

部より交互にエムペロルの前に來る彼の代理王を引見するかは、今之を記述し難し。

中庭の内方の壁に沿ひて廻廊の如くに建てられたる警衛所あり。其前にエムペロル旗樹ち、其下に槍を持つもの一人ありて哨兵を勤む。廊には兵士座し居れるが、ピハンゴ(Pifango)と稱する我が將棊に似たる戲をなして多くの時間を費し、又は長き煙管を以て强烈なる煙草を喫せり。壁には木の鈎ありて銃及槍を架く。屋根の最も低き部分は黄金の球を以て飾れり。第十の内門の前には宮廷の監視者ありて。日本の諸王及外國使節より車馬に積みて贈れる獻品を受け、其部下は貨物の包裝を開けり。

門にはエムペロルの祕書二人ありて、エムペロルに示さるべき品を記錄す。記錄し終れば門に隣接せる倉庫の中に運ばる。倉は防火の設備ありて、屋根の四隅には鍍金せる臥龍あり、其前足は金球の上にあり。此處は概して人の群集する處にて、或ものは獻品を持込み、或は搬出し、或は又石倉中にて之を整理す。女關を通して欄干見ゆ。此欄干によりてエムペロルの座席と開きたる中庭との境界を劃せり。座席の傍には一方に銃士、一方に槍手警護す。座席の前には廣大なる空地ありて、其周圍に高き望樓あり。此望樓は第三の内庭の外壁に建てらる。望樓に接して門ありて、其兩側には方柱の上に長く建てられたる警護所あり。尙内部に進めば非常に高き樓見ゆ。此樓は第二の内庭の厚壁の上に立てるが、其技巧頗る見るべし。各樓の前には四圍を閉ぢたる警護所あり。其屋根の低き端は黄金の球を以て飾らる。此處にては、貴族の長、警戒に任ず。四邊は第二の内庭の諸門を通過して歩すべし。エムペロルは饗宴室の庇の下に座せり。それより戸を通して一路ありて座席に達す。座席の兩側の支柱及上部は堆金の奇なる模樣を以て飾れり。戸の直前、エムペロルの後には、近親の貴族四人座せり。座席の右側に同數の閣員座し、左側にも四人の貴族あり、凡て盛裝せるが、エムペロルの高座の底部を眺むることを得る程低く着座せり。閣員、貴族、及近親の後には他



將軍の座位

の貴族三百人立ちて、高座を半圓形の如くに圍めり。

エムペロルの座處の屋根は金板を以て蔽ひ、二隅には黄金の臥龍あり。天井には黄金細工の各種の模樣あり、場所によりては寶石を以て飾れり。此屋根は四本の太き圓柱の上に安んず。第一は天體の圖を以て、第二は地球上に栖息すと知らるる獸類の諸態を以て、第三は魚類其他水中の動物を以て、第四は金の龍蛇を以て粧飾せらる。

諸侯のエムペロルに仕ふる態

二本の外方の柱の間に、半年は日本の西部に住する諸王來り、他の半年は東部の諸王來り、各立派なる獻品を携へて、上方高座に達する階段の第二段の上に俯伏す。階段は三段にして、上り了れば方形の場處あり、其奥に二本の最大の柱立てり。其直前には高座に上る階段あり。此階段の數は七級にして、凡て美しき絨緞を敷けり。地に面を接けて俯伏する王侯の傍には、その貴族二人同じ姿勢をなして第一段に在り。其後には王侯の護衛士爲し得る限りの謙遜なる態度を以て俯伏す。

日本の諸王は如何に勢力ありとも、内廷には三人以上の從者を伴ふを得ず。

エムペロルは黄金の刺繍せる上衣を着け、脚は體の下に交叉す。下衣を蔽へる此上衣は頤の稍下の所にて合せられ、其他は前に於て開けるが爲に、其裾は袴の兩側に垂れたり。其の開きたる所の間には幅廣き帶見ゆ。帶は黄金を以て硬くし、眞珠及金剛石を鏤む。頭上には小き金冠を被る。三の尖點ありて高く突出せり。

* * * * * *

放免の祝詞

囚はれし爾人は皇帝の名に於てシクンゴ殿に引渡されし後、先に控へ居りし室に退くべき命を受け、八右衛門殿(Poo-

chennemondonne) 其他宮中に出仕せし身分ある人々より放免の祝詞に預りたり。最後にエルセラクの隨員も出で來りて祝賀を陳べ、エルセラク及ヴェールの名に於て蘭人の旅館に行くことを彼等に望みたり。エルセラクは尙閣員に告別すべしとて後に殘り居りしが、そは江戸の監禁中の悲痛を一洗し去らんが爲なりき。

エルセラクの江戸長崎間旅行

十二月二十四日エルセラクは放免せられたる蘭人と共に江戸を出發し、當日七リーグ馬上にて行き、川崎に宿せり。それより神奈川、程ヶ谷を經、戸塚にて晝食し、藤澤、タムラ、馬入及平塚を經て、夕方大磯に到れり。十二リーグの旅行とす。それよりトウケリ(Toukery)山の困難なる路あり。辛うじて六リーグにして小田原に宿せり。此山の麓に在る立派なる市なり。翌日も亦六リーグ進めり。山腹に箱根の快邑を有せるホケネー(Faukeney)にて晝食し、夕方遲くヤマカク(Jammakak)、スカバリー(Scabary)を經て、三島に來りたり。三島より沼津、それより原、吉原を經て、富士川を渡り、蒲原に至りて食事をなし、由井及奥津を見て、江尻に宿せり。此日の道程十三リーグなり。それより有名なる市駿河(Surunga 府中の意)、鞠子の町、岡部、藤枝、島田の諸邑を見、大井河を渡り、金谷に宿せり。

翌日エルセラク使節はコミ(Comi)山の麓を過ぎたるが、此山の頂は高き杉の樹を以て蔽はれたり。日坂、掛川の村々を經て袋井にて食事し、見附及中泉にて種々の珍物を見、天龍川に達するまでには長時間を費ししが、天龍とタンナマ(Tannama)との間には種々の森林を見たり。其夜はタンナマに宿せり。翌日は日出までに舞坂、新井、白須賀、二河を經たり。荒居にて食事を取りし後、美しき市吉田を見、アスタナミカ(Astananica)を左手に殘して、御油を經、赤坂に宿せり。

一六四四年一月一日尙前進したるが、彼の最初に來りし村は藤川にして、それより岡崎市に來り、池鯉鮒及鳴海の村を通り、宮に着せり。此市は南海の入江に在りて、人口饒く、大廈多し。之に反對の側には桑名あり。此地に休憩し、後富田、四日市、追分、庄野、石藥師、龜山市を經て、十一リーグを旅行したる後、關に泊せり。それより十三リーグ進みて、途上に坂村を見、ヨカタ川(Jocatangauwa 横田川?)を渡りて、シンツァマ(Sintzamma)に越し、鈴鹿山の麓を過ぎ、水口にて中食し、ヤカツ川(Jacatungawa)に於て再び渡を越え、石部村を過ぎ、夜に入りて草津に泊せり。此處は快き森の中に在り。此地を過ぎてオサキ(Osacci)川に騎り行き、琵琶湖(Meaco)の大湖に達せり。其湖岸入江の中央に大なる市膳所あり。二哩進めば、岬角に大津あり、前記の湖に瀉す。大津に於て新鮮なる大口魚を食せしが、味は英國及蘭國に在るものと相類せり。此くて夕方伏見に入れり。此處はエムペロル太閤樣が政廳を開きし莊麗の宮殿あるを以て有名なり。伏見に於て舟に乘り、都を去りてソンダ(Sonda)の傍を航し、右にアハス(Achas)、左に牧方を見、終に大阪に上陸せり。伏見を距る十六リーグなり。故にエルセラクは十二日間に百四十リーグを旅行せしなり。此を江戸と大阪との距離とす。救はれたる蘭人も南部より江戸に至る百三十二リーグを行くに十二日を費したり。

エルセラクは大阪に六日間滯在せり。

此市を距ること遠からず數個の墓地あり。日本人は墓地に多くの金を費すこと歐洲人の如し。

* * * * * *

死兒の偶像　シカニの記載

諸子は日本に於て甚だ立派なる墳墓あるを見るのみならず、又死者を支配する諸神に捧げられたる大殿堂を見るなるべし。

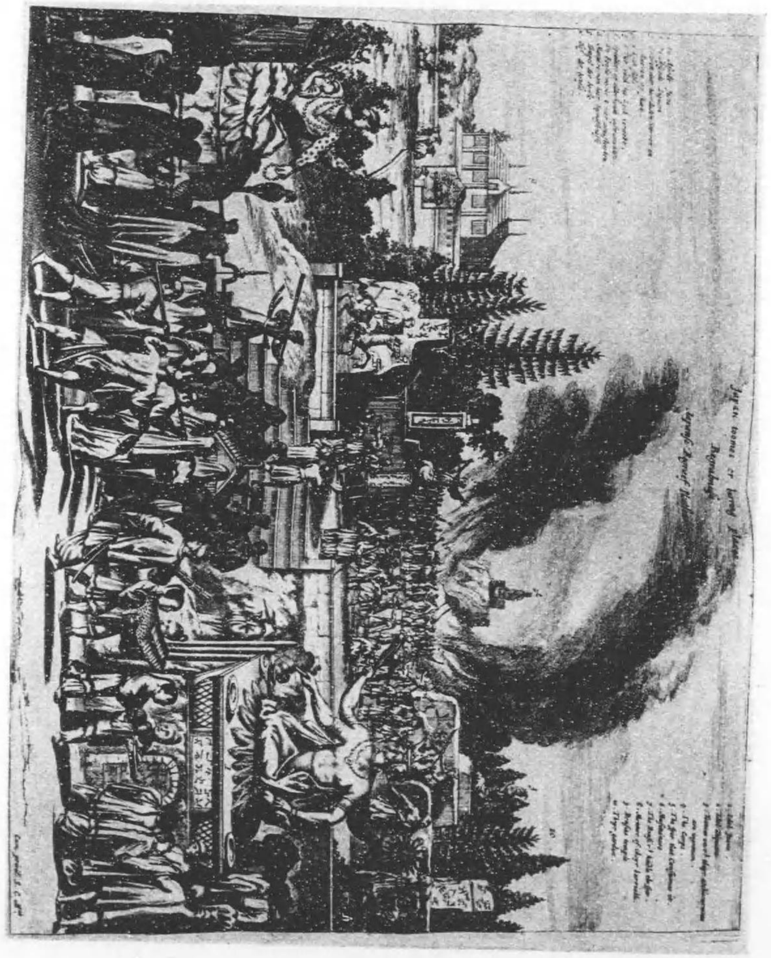
大阪より遠からざる地に莊麗の殿堂あり。此處にてはエネ(Jene)及シカニ(Siquani)といへる偶像は凡ての服喪者に禮

拜せらる。シカニは圓き臺上に座し、其臺は扇形の蒲團を以て被へり。之に近く銀製の鸚鵡ごまり木に在り。像の顏面は青年を現し、頭髮は眞珠を繫ぎたる緒を以て後部に束ねられ、一房は縮れて直立せり。四本の腕は燦爛たる星を附せる袖を以て蔽ひ、右腕には蛇捲付き、其蛇の頭を彼は手に持ちて高く擡ぐ。此腕の肘より他の腕分出して、一小兒を抱き、胸に推しつけ居れり。左手には劍を持つ。將に戰はんと待ち構ふる態度なり。左腕の半程より第二の腕見え、其手は垂れて念珠を持てり。小兒は劍の方を凝視し、手を組合せ、脚を體下に交叉して、シカニ (Siquanies) の廣き袴の上に座せり。

偶像エネ

偶像エネは佛僧の第十派の尊信するものにして、其嚴然として高き禮壇の上に座せる樣態頗る奇なり。そを舒すれば、四隅に禮壇と稍離れて四角の柱立ち、弓形をなして其最上の出張りに至りて接合す。此出張りには星其他の珍らしきものを刻し、其空處には日本文字を滿せり。禮壇の各偶に平たき皿あり、像の後の右側に深き盤あり、其中には香常に炷せらる。皿は參詣者の捧ぐる金錢を受く。中央にエネは三角の蒲團の上に座す。鬚ある顏面四あり、其頭は凡て後部に於て接續す。黃金の冠を戴き、冠には突起七箇あり。突起の頂點には金剛石の充てる圓き球あり。胸には眞珠を繫ける二條の緒懸り、其端には金剛石の花あり。左腕を高く擧げ、握れる手は杖を攫み、其杖は大陽に貫けり。此腕より第二の腕出でて下方に垂る。此手には編まれたる花冠を持つ。最上方の右手には一の日本植物あり。下方に向ける手は金の杖を香の薫ゆる容器の上の煙中に突入す。

此偶像は死後に善惡の報を與ふと云ふ。老人及び既婚者の靈魂は彼に渡さる。故に父母、夫妻、其他の近親は此殿堂に多く來りて、エネの禮壇に死者の靈魂の爲の供物をなす。



日本の埋葬

トンサ島四國住民の服裝

又殿堂は常に閉鎖せり。何ごなれば此像は殿堂ごエネ奉仕の僧の住宅ごの間の露天下に在ればなり。殿堂の前には方形の☆關あり、其屋背の上には各端に大に尖りたる塔ありて高く聳ゆ。一方には殿堂の森あり。快き蔭を與ふる樹木廣き地域を占む。……

エルセラクの大阪長崎間航行

使節エルセラクは大阪に滯在六日の後、一六四四年一月十日船に乘りて、夕方大阪を距る三リーグなるサンギャ(Sangya三軒屋?)村の前に投錨し、逆風の爲に二日間停泊し、薄暮兵庫の港に入り、それより順風を得て鹽屋(Swoja)、タケシマ(Tackessima)、明石、姫路を經て、日沒室に着せり。然れども終夜航海して、五十リーグを二十四時間に走り、翌朝備後鞆(Bignatum)を發見して同地に投錨せり。それよりメワリ、タントノミ、ヨコシミ、カリナガリ及カムロを右舷に見、シリアイス、カロト、スワ、ヨウェの諸小島及トンサ(四國の意)の大島を左舷に見たり。

*　*　*　*　*　*

一月十六日には夜半頃カメノサキ村の前に投錨し、それよりモッコ(Mocko)の小島に航せしが、逆風に逢ひて三日間停泊し、それより出帆して、夕方下關(Simonisacci)の港に入れり。翌日はアイミシマ(Aymissima に投錨せしが、それよりは順風にして夕方平戸に來り、ゼッタ(Zetta)海峽を過ぎ、二十四日長崎に着せしが、出島にて東印度會社從業員の健康にして安全なるを發見せり。

此くて長崎に着せるエルセラクは放免せられたる蘭人十名に關する報告をバタヴィアの太守コルネリウス・ヴァンデル・リーン(Cornelius Vander Liin)に致せり。太守は此事件を重大なりとして、和蘭合同國に在る東印度會社に報告せり。……

東印度會社の謝恩使

東印度會社は此報告文を審査したる後、終に囚はれたる蘭人に對する恩典及長崎在住の蘭人及其貿易に對する厚意につき、日本エムペロルに特使を派遣して謝せんことを決定せり。使節の一層歡待を受けんが爲に、エムペロルへの獻品としては、四十ポンドの彈丸を發射する眞鍮製の大砲二門と共に、棚杖、洗桿、抽彈子を添へ、其他には銀框の小鏡を以て圍める黑檀框の巨鏡一面、各色の精好なる織物九片、金の琵琶の鞘に入れる大望遠鏡一箇等を贈れり。

此命令を受けたるバタヴィア太守は、直にフランシス・カイロン、チャールス・ライネルソン、ガレット・デムマーの諸上司と相談の上、一六四九年六月二十七日次の如き命令を定めたり。即ちペーテル・ブロックホッフ (Peter Blockhoffe) を使節とし、ケッチ船ロビン號を以て日本に派遣することとなれり。其命令書の文に曰く、

遣使の命令書

貴下は日本に直航せよ、臺灣に寄港する勿れ。時既に晩ければ貿易風を失はざらんが爲なり。此航海中、船員に對して羅馬教の書籍、繪畫、其他聊なりとも同宗教と關係あるものを檢査せよ。殊にブレスケンス號がマニラより葡國の僧を伴ひ來らざりしやを嚴重に調査せられたれば、一層の注意を要す。日本海岸に近づきたる時は接待員を船中に得るならん。貴下は之を丁寧に待遇せざるべからず。日本の地方長官より與ふる命令、又出島に在る東印度會社の通譯或は使用人の忠告に從ふべし。自己の發意に依りて行動すべからず。

江戸に赴く時は部下に青色のセルジ服を與へ、旅行中之を着用せしむべし。但し日本の諸侯の許に至る時、又は大都市を通過する時は、この限りにあらず。其時には部下をして石竹色の服を着せしめよ。エムペロルに謁する時、又は閣員に參候する時は、從者をして白と赤との最美服たる揃ひを着せしめよ。

身分ある人の招待ある時の外は、珍しきものを見んとの好奇心に動かされざるやうに注意せよ。長崎に初めて着したる時は、貴下派遣の理由を同地の地方官に告知し而してヂルク・スノック (Dirk Snock)、アントニー・ブロークホルストの意見を聽き、日本通譯の忠告に從ふべし。貴下の使節の主なる原因の辭令を練習して之を暗誦すべし。身分ある人の前に出づる時、彼等は私に之を書留め置きて、他日之を溫和に質問し、前後の言が相一致するや否やを見んとすることあればなり。

又日本の諸侯に對しては、貴下が外人なることの辭柄により、日本の習慣を知らずとして、之につき東印度會社及バタヴィア太守に對する日本人の好意的援助を乞ひ、一に彼等の友誼に信賴せよ。彼等にエムペロルへの獻品の目錄を示して、之を獻ずべき方法を見出すことを乞ふべし。長崎奉行にも若干を贈るべし。

貴下若し長崎又はエムペロルの宮廷又は他の場處に於て、誰の名に於て貴下が此使節に立ちたるか。東印度會社は如何なる權威及權力を有せるか。如何なる事業をなせるか。自ら支配權を握れるか。獻品はネーデルランドよりか、將バタヴィアよりなるか。唯エムペロルのみに獻ぜられしか、又は閣員にも贈られしかとの問に接する時は、簡短に之に答へよ。例へば次の如し。東印度會社は合同ネーデルランドの諸都市の最も著名なる人より成り、會社に貯へらるる大なる藏品を以て世界各地に盛なる貿易を行へり。會社は一の永久なる政府を維持するにあらずして、時に變化す。

玆に添加せよ、貴下は右の會社より送られたる者にして、其使命を傳へ、ネーデルランドに於て作られたる獻品をエムペロルに獻じ、又出島の太守の判定に從ひて日本の諸卿の好みに叶ふと思しき裂地を獻ぜんが爲に來れるものなりと云ふことを。貴下が語る時、沈默にては日本の諸卿の滿足を買ひ難き場合に限りて語數を少く語れ。其他の場合には於ては、沈默は日本の諸卿の前に於けるほど有力なる處無し。東印度會社に常に贈物をなす諸卿に對しては、貴下は

其凡ての歐洲服を脱すこも十分なる獻品をせよ。

合同ネーデルランド、西班牙、葡萄牙の間に平和條約を結びたるこゝは、日本エムペロルの遺憾こする所なり。エムペロルは西、葡兩國人を以て敵こなし居ればなり。貴下は宜しく彼等に語るべし。近來日本にも廣布せる談によれば、凡ての基督教國は長き戰爭に疲れて、今や平和を得んこ欲するに至りたれば、佛、西は獨逸皇帝こ同盟し、此同盟中には丁抹、波蘭、及伊太利を包容し、唯佛、葡のみが西國こ戰ひしが、二仲裁者選ばれて此爭を調停するこゝとなり、不日其決定を見るならん。悲しむべき經驗によりて長き戰爭の慘害を知悉したればなり。同時に一方土耳其は凡ての基督教國の深仇なるが、多くの城塞、都市、領地を得たり。基督教徒が互に平和を結ぶは、唯其聯合的武力を今方に基督教國の境に迫れる土耳其に向けんこするに在りこ。

其他の命令には次の如き項もあり。貴下言語を發する前に十分に其言語を考慮すべし。而して國事に關しては、商人なるが故に細說する能はずこ辯解すべし。日本人は敏捷なれば、貴下が和蘭政府の爲に來りしにあらざるこゝはよく之を知れり。或は之を語りて賞讃を得んこしたる者ありしかど、之が爲に東印度會社の事務を失敗に歸せしめしこゝあり。日本人は共和政體を蔑視し、獨裁王國以外の政府を尊敬せず。

貴下が貴紳より宴に招かるる時は、飲料こ共に言語を節約すべし。沈默によりて先方の滿足を與へ得ざる時は、少く語るべし。唯盛宴或は恩寵に對して謝禮を述べ、之を重ねて六回七回に至るべし。宴を開く勿れ、日本人この對話は危險なり。若し或貴紳が和蘭の食物を欲して之を食せんこ望まば、之を拒む勿れ。之を歡待するに適當なる凡ての物を準備して、費用を惜む勿れ。其時は食卓の下端に座して、同席の光榮を有するこゝに對して賓客に感謝すべし。

然れども市民及商人に對しては、貴下が帶ぶる職務に適當なる權威を守るべし。絶えず貴下に附隨する通譯人の意見に從へ。如何にして身分ある人こ相交るべきかにつきては、彼之を貴下に語るべし。如何こなれば通譯人は政治家にして、貴下は之に信賴すべく、彼等自身の安寧も東印度會社の狀態の佳良なるによるこゝ多きが故なり。

又貴下が江戸より長崎に歸り、獻品が凡ての人に受入れられたる時は、盛大なる宴を開きて同地の日本の主なる官吏を招待せらるべし。貴下は歸る時に、江戸、都、又は大阪に於て酒、鮭、ハバアダイン (haberdine)、米漬の鯉、及價七十テールに上るこも鶴を買入れ、此等を鹽藏になしおき、日本風に料理すべし。之につきては通譯者は大に注意すべし。

貴下が長崎に上陸するや、貴下及各隨員の爲に半長靴三足、飾附鹿皮の薄き靴六足を註文すべし。宮中に出入するに用ふる爲なり。日本人は床に高價の疊を用ふるを以て、靴を以て之を踐むべからず。長靴及拍車は日本にては用ひられず。

貴下自身は武器を帶ぶべからず。されど隨員は各銀欄の短劍を帶ぶべし。而して此短劍は、貴下がエムペロルこ私の談話を許さるる間に、隨員廣間にて待つ時、其美を失はざるやう泥及雨の爲に汚さざるこゝに深く注意すべし。

貴下自身は大阪に於て糸を以て作れる傘を準備せよ。隨員は二人に一箇づつ之を携ふべし。尙各員は雨を防ぐ爲に油紙の外套を携ふべし。晴天の際には之を木箱に納む。貴下は又大阪に於て貨物の要するだけ蠟塗の革製旅行鞄を買ふべし。毛布、座布團は晝は包みて馬に負はしめ、夜間は旅舍に於て床上に敷きて寢具こすべし。

年々エムペロルの處に旅行する人々の記錄に依れば、旅舍にて貴下の食用こする肉の代價こして拂ふべき額は了解し得べし。若し十盾(ギルダー)を請求せば二十盾を與へよ。又五十盾を請求せば百盾を與へよ。

又ベーテル・ブロックホッフは、出島に在る凡ての日本の奉行等の上位に立つべし。次には商人デルク・スノック(Dirk

Shock)、アントニー・ブロークホルスト、アンドレアス・フリシウスは舊來の習慣に從ひて其地位を保つべし。然れども ブロックホッフは、日本より要求ありしも貿易に關係すべからず。之が辯解としては、唯エムベロルへの使命を果す目的にて來りたりといふを以て足るべし。普通の獻品は二倍にして頒つべし。昨年は偶然の事件より頒たざりしが故なり。

貴下が長崎を發して江戸に赴く前には、同地の奉行にシクシゴ殿への推薦狀を得んことを希望すべし。貴下が其狀を彼に渡す時には、亦彼に對し長崎の官吏に爲せしと同樣の請求をなし、而して彼が如何にして如何なる方法にて又何人に獻品を爲すべきかを貴下に教示せんことを彼に恭請すべし。彼の名は東印度會社に對する彼の厚意につきて和蘭に喧傳せることを彼に語るべし。獻品の際にエムベロルの前には唯ブロックホッフ及フリシウス二人のみ出づべく、隨員は廣間にて待つべし。是れ貴下が通譯より聞く所なるべし。

エムベロルの命令として臼砲を註文せられたることゝ屢々なり。從來此を等閑に附し來りしが、今や一人(其術に熟達せる)をエムベロルに奉仕せしめんが爲に伴ひ來りたることを彼に告げよ。又エムベロルへの獻品以外には、精巧なる輕き色合、黑色及赤色の裂地を多量に携へ、其他上等のサージ、普通のサージ、緞子と共に潤澤に貴紳に贈るべし。而して辯解して云ふやうは、東印度會社は何物がエムベロル及閣員の意に最も適するかを知らざるが故に、此以上饒多なる獻品を爲さずと。

貴下はエムベロルに謁見する以前に、何の爲の使節なるかの審問を受くべし。其時之に答ふるやうは、目的は他に在らず、十人の蘭人が放免せられたる恩を謝せんが爲に、且つは日本に於ける東印度會社の受くる恩惠を謝せんが爲なりと。

アンドレウス・フリシウスは貴下の秘書として、記錄に慣すべき日々の觀察を記すべし。ジョン・ハッキンス (John Hatkins) は拜謁先導者たるべく、而して銀盃を準備すべし。

隨員中に何人も飲酒若しくは風紀紊亂の事無きやうに注意すべし。若し然る者あらば之を嚴罰せよ。爪を剪り、髮を梳り、襯衣を清潔にし、便宜ある處にては沐浴すべし。磁石、藥草、眼鏡、望遠鏡、テント酒、葡萄酒、乾酪、蘭製バタ、蘇木、伊國の磁器、銃身、擴大鏡等は請ふ人に與へよ。赤き小珠を貴族の兒又は臣從又は旅宿の主人に記念品として、機を見て與へよ。

平戸侯は東印度會社に二萬五千盾の負債あるが、之に關しては長崎の官憲の不興を招かざらば、通譯と共に十分に協議を遂ぐべし。若し侯にして負債を辨償せば、是れ感謝すべきことなり。同侯は火災に逢ひ、貧しくなりたればなり。然れども若し通譯が反對の意思を抱かば、ブロックホッフは其勸告に從ひ、同侯に對し今後負債を請求せざるべきことを命令すべし。

貴下の最良の服、銀細工、其他衆目を惹くものは、街上、食卓、又は宿舍の室內に於て之を見せしむべからず。日本の貴族の請ある時に於てのみ示すべし。エムベロルへの使命を終ふるまで、ロビン號が長崎港に停泊し得ることを極力請願し、使命を遂げたる上は、直に之に乘じて臺灣其他の地に寄港せずしてバタヴィアに歸り、それより十二月に和蘭に歸還すべき艦隊と共に歸るべし。東印度會社が貴下より日本エムベロルとの事件に關する報告を受け得んが爲なり。

又記憶せよ。帽子を被らずしては身分ある人の前に出づべからざることを。然れども普通の人に對しては之を嚴守するを要せず。最後にブロックホッフは病を抱きて乘船せるが、若し該病人途中にて死去することあらば、死體に香油を塗りて保存し、日本人をして之を見せしめ、彼等をして蘭人の注意の在る所を知らしむべきやう、アンドレアス・

フリシウスに於てしかゝ取計ふべし。棺の製作に關しては船長其目的に供する木材を準備せり。（以上命令書の文）

ブロックホッフの後を承くべき爲に派遣せられたるフリシウスは凡て上記の命令を嚴守する筈なりき。其中ブロックホッフはバタヴィアゝ日本ゝの間にて死せしを以て、フリシウス及ブロークホルスト二人が使節を勤めたるは、前に第一編に於て吾人が說話したるが如し。

此二人が江戸に赴きし後には、サハリアス・ワゲナール（Zacharias Wagenaer）の使節は最も光彩ありて注意すべきものなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ワゲナールに與へられたる命令

彼は一六五六年七月十一日を以て長崎に向ひしが、其受けたる命令書は次の如し。

常に日本人の驕慢を忍び、以て彼等の恩惠に浴せよ。エムペロルの宮廷に於ける東印度會社の代辨者の主席なるシクンゴ殿は、鏡、水晶の眼鏡、望遠眼等を得たき希望あり。此等の物件が彼の手に渡ることに注意せよ。長崎奉行の許可無くしては江戸に行くべからず。貴下は十二月十五日及二十日に旅行する準備をなして可なり。シクンゴ殿は、新年卽ち日本にては正月（Songuats）と稱する二月十三日に當る日の前に、エムペロルの宮殿に於て貴下を引見せらるべきことを語りたればなり。大阪に於ては奉行マキド・サンド樣（Makido Sandosamma 牧野佐渡守？）に獻品をせよ。彼の父はエムペロルの寵臣なり。サンド樣より貴下は旅行券を得べし。彼は禮儀ある紳士にして、常に此地を通過する凡ての蘭國の使節と語る。此習慣は其前任者周防樣（Souwosamma）とは全く反對にして、周防樣は決して使節に面會せしことなし。又江戸の新閣員に獻品することを忘るる勿れ。通譯ハチオサイモンは他の通譯と共に使節と同行すべし。彼はシクンゴ殿に如何になすを以て最善とするかを問ふならん。長崎の老奉行に敬意を表することを忘るる勿れ。彼は今は年老いて宮中の事を執らざれども、彼が東印度會社の爲にせる從前の恩惠に感謝することを怠るべからず。彼には前に彼が希望せしテント酒を獻ぜよ。通譯セシモン（Schescymon）を經てシクンゴ殿に、近頃修繕して今出島に在るスラチシュ・アルカチフ（Suratish alcatiff）を如何にするが最良なるべきか、エムペロルに獻ずるを適當とするかを問へ。エムペロルより請求せられたる消火機は翌年送るべし。尙報告によれば和蘭の種子及植物はシクンゴ殿の庭園內に生長して甚だ賞美せらるゝと云ふ。遲羅の林檎の若木には大に注意し、其根に折々水を與へて、其安全にシクンゴ殿の手に渡るやうにせよ。又醫長ハンス・フンケ（Hans Hunke）をして使節一行と共に江戸に行かしめよ。シクンゴ殿の請求に從ひ、和蘭の藥劑を日本人の疾病に用ふる方法を知らしめんが爲なり。シクンゴ殿の宅には殘餘の鳥銃八挺及拳銃一挺あり。何かの理由によりて昨年廢物と認定せられたるが、シクンゴ殿をして其二挺を自己の物として保存せしめ、其他につきては適當の處分をなすべし。エムペロル、閣員、其他身分高き人への獻品は、和蘭人旅館の主人及通譯が適當と考ふる方法に從ひて江戸にて分配し、其目錄をシクンゴ殿に渡すべし。彼は之を通覽して變更を施すべし。小田原（Odoura）侯にして天文學者たる稻葉美濃樣（Jaabaminosamma）より白天鵞絨三片及優等の望遠鏡二個の希望あり。閣員ボッキー（Botskey）は綠色ツラム織（Thrum）の毛布、閣員松平伊勢守（Matsondeiro Issinocamy）は懷中鏡五面、讀書鏡一個、眼鏡三個、首席閣員の子息ユシエン樣（Jusiensamma）は英國染緞子一片、白天鵞絨一片、黑きクロース・サージ三片、エムペロルの叔父水戸中納言樣（Mito Siovangosamma）は紅珊瑚五連、眼鏡三個の希望あり。凡て此等には其希望の品を獻ぜよ。エムペロルには他にプラッシュ織（Plush）の美しきもの數片、パドウェース（Padways）、銅製地球儀二個、稀有の鏡、及活けるカスエリス鳥（Casuaeris）一羽の獻品を貴下に附けて送れり。以上命令書の文

カスエリス鳥の記載

此鳥はバンダ (Banda) に產じ、鶴よりも大にして褐色の羽毛を有し、翼、舌、又尾なし。胴には非常に堅き卵形の楯を以て武裝す。頸は七面鳥の如し。鷄冠は赤く又青く、固く硬く、人の指ほどの厚さありて面上に立てり。趾は黃色にして鴕鳥に似たり。其奇なるは貪食甚しく、目前に在るものは何物をも嫌はず、往々燃ゆる石炭をも嚥下するに、やがて冷却して吐出せらるることあり。

ワゲナール長崎に着す　日本人日の吉凶を言ふ

ワゲナールは長崎に着してボウヘリオンに代れり。彼は快走艇イヴニング・スター號に乘じ、一六五六年十月二日バタヴィアに向ひて出帆せり。其後長崎の新奉行ヨヒヘ樣(Jofficsamma黑川與兵衛?)は出島の東印度會社の倉庫にワゲナール太守を訪ひ、彼は倉庫の後なる和蘭風の庭園を見て太く喜びたり。ワゲナールはエムベロルに敬意を表すべき準備に取かかれり。奉行は任意に東上すべき許可を與へたればなり。故に十二月二十七日を以て出發の日と定めぬ。然れども通譯は習慣として、蘭人の請求を官憲の長、奉行サケモン殿 (Saquemondonne) に告げしに、奉行は日本人は二十七日を惡日とせりと云ひて之を延期せしめたれば、ワゲナールは漸く翌年一六五七年一月九日に至りて長崎を出發せり。十二日を經て大阪に達し、三日間を以て陸行の必要品を準備せしに、其時前エムベロルの忌日近づきたれば、日本にては此日嚴重に謹慎を表することとて、家に引籠りてあるべき命を受けたり。其後ワゲナールは既に獻品運搬の爲に從者八十五人、馬四十四頭を雇ひ居たるを以て、やがて出發することを許されたり。

日本人は嚴肅と悲哀とを以てエムベロルの忌日を送ることなるが、彼等の結婚式も亦嚴肅と華麗とを以て言ふべからざる歡喜の中に行はる。日本に於ては亞細亞の他の諸國に於けるが如く、數人の婦人と結婚するの習慣あり。是れ支那より輸入せしなり。

* * * * * *

日本人の多妻

日本人は好むままに多くの婦人を取れども、眞正且つ法律上の妻たる者は一人なり。此正妻は夫と共に食卓に就き、他は家婢の如し。小兒も妾出は父の死後財產を得ること殆ど無し。正妻の生める子が凡てを相續するが故なり。是れ亦支那より傳はれる習慣なり。……

日本人結婚の奇風

支那人及日本人は新夫妻の年齡、財產、門地の差異少からんことを欲す。婚約せる男女は早朝牛又は馬の牽ける立派なる車にて宅より市外に出で、高き丘に行く。各種の聲樂、器樂に伴はれ、又之に從ふ人の多數なる、兵士の力を藉りて道を開かしめざるべからざることあり。新郎の車の後には贈遺品を積みたる車行く。蓋し此を以て新婦を買ふなり。此習慣も支那より來れるものなり。……

さて新婦は前記の丘の一方に達して車を下り、其頂に達する一方の階段を上り行く。一方にては新郎上る。隨行者は丘下にて待ち、唯兩親と音樂隊だけ分れたる階段を上る。此階段の中央には幅廣き隔壁を設け、其兩側は頂邊にて黃金の球を以て飾られ、上るものは此球に取附く。新郎階段を上りきる時は新婦の右手を執る。其次に樂隊上る。左側よりは新婦上る。新婦及新郎雙方の兩親之に從ふ。山頂にては彼等の兩親は新婦の背後に立ち、音樂隊は新郎より稍隔りたる處に立つ。父母は一組づつ從僕の捧ぐる天蓋の下に立つ。一方に在る音樂隊は地上に座して諸樂器を奏す。形も音も歐洲のものとは異れり。他の樂人は、二本の柱の上に安んぜる傾斜の急なる屋の下に、鎖を以て吊れる大なる

銅盤を打つ。大なる杵を以て柏子に合せて打つなり。婚約者の兩父母と奏樂者との間に最も美麗なる天幕立つ。其の頂の蔽は油紙を用ひ、下は日本の絹を用ひて作り、八角の框の上に垂る。其頂は急角度をなして上りて八個の球あり、球は漸次上方に向ひて小さなる。此屋根は八本の柱の上に安んず。其中央には壯麗なる禮壇あり、壇上に婚姻の偶像立つ。腕を擴げて手に銅線を持てり。その銅線は半圓の如く頤の下に來る。此偶像は狗頭を以て表さる。之によりて日本人は結婚生活に屬する忠實と操守とを現す。又銅線は結緣に强きを示すと云ふ。

結婚式

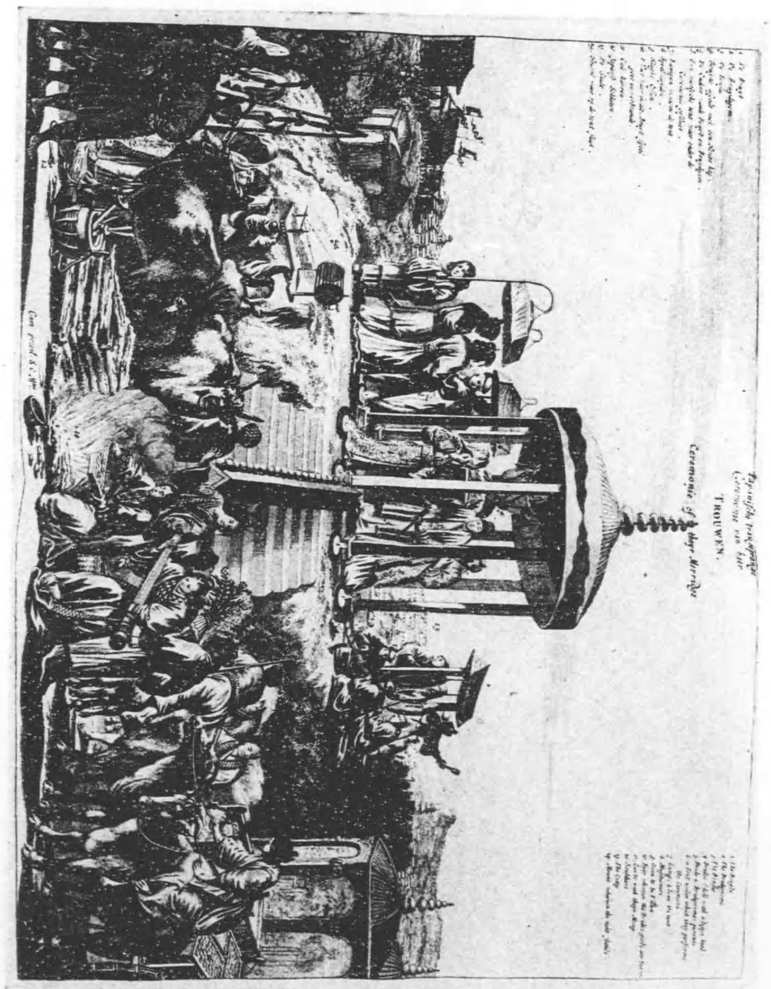
狗頭の偶像の前に佛僧立つ。其右には新婦、左には新郎あり。兩人とも點火したる松明を手に把る。新婦は天幕の周りに立てる八個の燈火の一によりて之を點火す。此時僧は低聲にて何事かを陳ぶ。其後新郎は新婦の火によりて松明に點火す。此時歡喜の呼聲起りて祝賀す。僧は二人に祝福の辭を贈る。

* * * * * * *

此結婚式を擧ぐる時、山の周りの賓客の中にも之に劣らぬ動搖あり。或ものは新婦の嫁資とする金錢を積める車に近く座し、或ものは火を燃して新婦の玩弄品を之に投じ或ものは紡車を高く捧げ、或ものは麻束(たば)を捧ぐ。……前記の儀式終れば新婦は車にて新郎の家に送らる。其間絶えず聲樂及器樂を以て耳を喜ばす。青年等は新郎の家に於て屋上より旗を垂れ、床上其他に花を散じ、屋の内外には花環を掛く。結婚の祝は八日間繼續し、其費用莫大なり。日本には嬰兒の猶襁褓に在る間に許婚の約を結ぶ風習ありて、後に至て確實に之を履行す。又結婚年齢も早し。

* * * * * * *

狗頭の結婚神の外に、日本人は亦支那人の如く女神ブッサ(Pussa)を拜す。此女神は人類の增殖を司るのみならず、動植



日本人の結婚

物をも援護すと稱せらる。

佛僧の語る所によれば、十代ばかり以前に天女あり、名をアンゲラ(Angela)、チャンゲラ(Changela)、フェクラ(Fecula)と云へり。天より下りて泉に浴し居たるが、會〻一株の樹を見しに、其葉は柊の葉より尖りて長く、黑き果實長き莖に實れり。フェクラ此果實を食せしに、味甚だ美なり。是れより懷妊し、二人の天女は昇天したれども、フェクラ一人は地上に殘され、九箇月にして一男子を擧げ、乳離れの後漁夫に其養育を托し置きて昇天せり。漁夫は小兒を携へて家に還りしが、其子成長の後遠近の地を支配したり。此出來事ありてよりフェクラはブッサの名を得て、日本人の崇拜を蒙るに至れりとぞ。

* * * * * * * *

ワゲナール江戸に着す

ワゲナールの事に戻る。同人は二月十六日江戸に着し、シクンゴ殿及長崎奉行ヨヒエ樣に之を報知し、エムペロルへの獻品の使命を速に果さんことを請へり。兩人より返事ありて、正月五日(卽ち蘭人等の二月二十七日)に謁見の儀を取扱ふべしと通知せり。後シクンゴ殿は目錄及現品を取寄せ、之を火災の虞無き倉庫に收めたり。

エムペロルに謁見す

指定の日にワゲナールはエムペロルの居城に案内せられ、待つこと二時間にして謁見室に導かれ、次でエムペロルに謁見せり。エムペロルは高座にありて、四邊まばゆき氣色なり。ワゲナール持參せる品々を獻上せしに、エムペロルは大に喜び、殊に拳銃、劍、及珍奇なる花を描きたる箱に着目あり。但し高價なるアルカチフ絹は屢〻荷を解きて穴を生じたる爲に顧みられざりき。

翌日は諸大官にそれぞれ獻品を頒てり。

獻品の代價及旅行費

獻品の代價は一萬四千參百盾に上れり。旅行費は尚之れよりも多額にして、人、馬、通譯、宿料等に殆ど壹萬六千盾を拂へり。殘餘の貨物をば三千ターールに賣りしが、日本の貴族は價格より遙に以下を拂へり。シクンゴ殿は最も滿足の意を表し、斯くの如き精品を見たること無しと云へり。（一ターールは英國の一クラウンに當る。）彼は從來江戸より程遠からざる自身の莊園に蘭使を招待して饗食するを常としたれど、今回は寒氣劇甚の爲にワゲナールを彼の邸宅に招待せり。シクンゴ殿はワゲナールの次位に窓に近く大なる炭火の前に座し、外科醫ハンス・フンケ(Hans Hunke)に對ひて自分の爲に齎せる歐洲藥品の調劑法を尋ねたり。

江戸の大火

この時、一六五七年三月二日江戸に大火災あり。俄然全市は大混雜を生じ、皆「火事よ、火事よ」と叫べり。蘭使一行はシクンゴ殿の邸宅より市の北方を望みしに、怖しき炎焰天に沖せり。火は烈しき北風に煽られて直に市内に吹入り、火の子は江戸の上に飛散せり。之を見るや、シクンゴ殿は此くの如き變災に際し其擴大するを防ぐ爲に必要なる命令を下す職務の人なれば、今ははや蘭使を接待するを得ずと謝して、三人の秘書をして代りて待遇せしめしが、ワゲナールは旅宿の樣子を見たしとて、退出を乞へり。此くて馬に騎りて旅館に歸りしが、火災は尚一リーグを隔つと雖も、潮水の如き勢を以て迫り來り、野をも堤防をも分たざる有樣なり。彼は路すがら警戒を加へつつ旅舍に歸れり。

火焰ワゲナールの旅館に及ぶ　蘭使一行避難す

終に旅館に到着せしが、商人助手コルネリウス・ムロック(Cornelius Mulock)及他の日本人の僕は、卓上に在る書類又は

江戸の大災

殘り居れる獻品、食器、衣服、書簡等を結束してありしが、此は火災を避くる爲に石造の倉庫内に入れんとてなり。日本人は此倉庫をゴッドン(Goddon)と稱せり。風向の變りしことを聞きしとき、旅館はも早危險無しと皆手を休め、日本人は荷物の運搬を控へたり。然れども四時五時の間となるや、此旅館の在る街には人民群集、老幼を載せたる荷車も來りて騷しくなれり。ワゲナール屋上に登りて見るに、目の及ぶ限り火は愈〻熾に延燒し、北風によりて此處にも漸く迫り來れり。是に於て宿の主人ギンネモン(Ginnemon)に、東印度會社の貨物をゴッドンに納るるがよきか、或はヨヒエ樣の宅に移すべきか、熟れが可なるかを問ひしに、ギンネモンはゴッドンにて十分ならんと判斷せり。而して此處には貨物は既に大部分運ばれ居たり。然るにボンヨイス(Bonjoises)は、會社の金錢の入れる箱は之をヨヒエ樣の宅に運ぶを以て可とす。ゴッドンに在るものは其儘にせんと云へり。倉は既に土を以て封ぜられ、之に接近せる建物は破壞し了りたればなり。ワゲナールは又之に反して全部を倉より運出さんと欲せり。此く論議する中に、焰はヴェルヴェル町(Verver Street)に移れり、蘭人の旅館より射界内に在る地なり。今や身の安全を保つ爲に去るべき時なれば、ギンネモンは母及妻子を先づ出し遣りて、使節ワゲナール、ギンネモン、其他使節の隨員は皆旅館を出でたり。此家は前回の火災以來未だ完成せざるものなり。やがて戸外に出づれば、街路は車、簞笥、行李、家具類の混雜せる中に人人密集して、何方に行くも困難なり。倒れたる人の上に重りて倒るる者、貨物の間に狹まるる者、叫喚の聲を擧げて行く者、踐まれて死する者、呼吸も絶えなんとせる者、地上を腹這ひて蠢く者など、慘狀一々言ふべからず。其間に火は近づきぬ。煙は吾人を窒息せしむるばかりなり。煙の爲に市内は暗黑にして、唯日光時々立騰る濃煙の中を通して見え、夜は六時間も早く來りしが如し。若し火光無かりせば、何人も何處に落ち延びるべきかを知らざるならん。又危險に陷れる人々が、較〻安全なる人々に疾く落延びよと叫ぶ聲は耳を聾するばかりなり。

一行の危難

ワゲナール及隨員は各方面に於て危難の身に迫れるを見たり。彼等の前には街上は彌が上に積みたる貨物と人とを以て塡塞せり。火焔は一方には彼等を行過ぐるあり、他方には彼等の行く先に進めるあり。後方には火は近く彼等を追へり。彼等は濃煙の中に立てり。北風に吹かれて雪片の如き無數の火花は煙の中に充てり。家の前面は前に倒れて街上に落ち、燃ゆる墳墓の中に人と貨財とを埋むる時もあり。人の密集せるが爲に遁るべき途無ければなり。時には家屋は内側又は横ざまに倒れて、一時は焔を押へ、之をして延燒せしめざるにやと見れば、障壁は爆破せられて、結局床又は壁の燒落を急がすることもあり。もとより板葺の屋は火移り易し。されども他の家より延燒し來り、又床下より或は家の側面より燃え出すもあり。木材及家の全層が倒るるもあれば、火の燃えつつある大なる木材の餘燼が街上に落ちかかるもあり。此處には屋背の穴倉まで落ち來るがあれば、彼處には高樓壞れて地を搖がすが如きもあり。然れども此く種々の物の倒るる音も、焔に焦がさるる人や燒死を恐れて逃迷ふ老幼等の叫喚の爲に壓倒せられて、よくも聞えぬ程なり。

蘭使が其隨員と共に如何なる危險に瀕せしかは推察するに足らん。彼等は此狀態を見るや、貨物木材の上を越え、互に相助けて脫出を試みたり。人、簞笥、何にてもあれ、路に逢ふものは皆其上を跳り越えて、漸次此切迫の中より遠ざかり行けり。棚にもあれ、垣にもあれ、壁にもあれ、皆之を破りて行けり。此作業に於てはボンヨイスと通譯とは大に援助を與へ、若し彼等無かりせば、蘭人の無事に脫出し得たるもの無かりしならん。

ワゲナール投宿する處を得ず　江戸市外に遁る

終に彼等は非常なる危險を冒して開けたる處に出で、寒夜を凌ぐ爲に家を索めしが、彼等はヨヒエ樣の邸宅に行くを最も便宜と考へたり。然れどもワゲナールは人の群集の爲に其處に赴くを得ずして、あたり近き平戸侯の館に行けり。然るに同館にては東印度會社に非常の借財あるにも拘らず、體よく其投宿を拒絶せり。更に四箇處ばかり尋ねたれども、皆同樣に拒絶せられぬ。是に於て彼は夜の大半を通して江戸の内外をさまよひ、終に市の西方河に近き處に着して、田舍の小舍を叩きしに、入るべしと云ふ許諾を得たり。然れども爐火も燈火もなく、忽ちにして甚しき寒冷を覺ゆるに至れり。やがて火災を脫したる人々此家に來り、ワゲナールが出でし後半時間にして、蘭人の旅宿も燒落ちたる由を告げたり。

江戸の燒跡を見る　江戸城焚く

拂曉ワゲナールは再び市中に入りしに、市の南部は全く灰燼と化したるを見たり。火は前日よりも一層の猛威を揮ひて暴れ居れり。正午頃火焔は終にエムペロルの城にも及び、大なる諸門は蝶番より燒落ち、望樓も半は濠中に倒れたり。此處にて火は消えしかど、殘れる部分は火に燃料を與へたる姿なりき。夕方になりてエムペロルの宮殿は再び燃え上り、火焔高塔より噴き出づる樣は最も凄慘にして、天を威嚇するかと見えたり。此くて火勢猛烈に延びて、エムペロル及閣員は辛うじて城の北側の娯樂室に避難する時間を見出したる程なりき。

二日間に大都は悉く灰と化し、家屋の燒失十萬戸以上に及べり。

ワゲナール熔解せる銀塊を搜す

三月四日ワゲナールはボンヨイス長官に對して、燒けたるゴッドンの下の銀塊を搜す爲に、兵士の貸與を請求して許されたれば、ワゲナール及一人の蘭人は旅館の燒跡に赴きぬ。市に近づけば東西の郊外の外には何物も殘らず。民衆は呆然として各所に煙の上れる大平原を見渡せり。此大平原は前日までは家屋の密集せし處なりき。今や地上には建物

の大小に隨ひて全燒又は半燒の木材竝に夥しき灰の存するを見るのみ。遠近何處に到りても悲慘の光景ならざるは無し。さしも百萬以上の人民の家屋立列び、輪奐の美を極めたる殿閣、莊嚴を盡したる寺觀、崇大なる城廓の在りし地にして、蘭都アムステルダムにも劣らざりしもの、今や赤裸々たる壁の外には眼を遮る物無く、四十八時間以前に日本の主都江戸の立ちし處が此曠野なりとは驚かるることなり。

使節は十歩を進むか進まざる間に、數多の畸形なる屍骸を見たり。或は家の木材の下に敷かれて押潰され、或は煙の爲に窒息し、或は四肢を燒失し居れり。或場處にては數個の死屍の相重りたるもあるは、鷹集、窒息、焦燗、焚燒の爲なり。ワゲナールは蘭人の投宿せし旅館に至るまでの路次に於て三千以上の死屍を見たりと語れり。

死者十萬を超ゆ

江戸の最外端の一處に、强き壁と大なる門とを以て圍みたる一廓あり。此處に多數の人安全を期して赴きしに、壁内に在りたる者門を閉ぢて入れざりき。然るに間もなく火炎は壁沿ひの家に及び、此小き場處に於て八百人以上の燒死あり。其他此處に送られし囚人も同じ運命を見しなり。日本人は此火災の死者を十萬以上と算せり。

ワゲナールは二十人のボンヨイス、ヴェルシュレン (Verschuren)、及三年間に二回火災に遭ひたるギンネモンと共に、廢殘せるゴットンの處に來り、此處にて銀皿なりとも掘出さんと欲したりしが、灰を動せば煙と熱とを發して、更に作業を進むること能はず。此くて不成功に歸せしかど、猶番人を附して歸り行けり。

ワゲナールの貨財若干救はる　生命の危險

ワゲナールの此ゴッドンにて失ひしは六千六百四十三盾なり。是れ箱に入れ置きたる現金なるが、此外に彼の食卓用の銀皿あり、又獻品の殘りあり。然れども貴重品は大部分救はれたり。ボンヨイスの勸告により、倉庫にのみ依賴すること無く、現金をば鞄に入れてヨヒエ樣方に送りたるが爲なり。運搬の任に當りし蘭人は大分の危險を冒して之を遂げ、其後終夜主人の行方を索むるに辛苦を嘗めしが、是れワゲナール及其貴重なる行李の爲なりき。

蘭使の隨員には一人の負傷者も無かりしかど、庄兵衛と云へる日本人の料理人にて通譯をもせし男、壞れたる壁に挾まれて窒息して死せり。之を發見したる後鄭重に葬れり。

*　*　*　*

ヨヒエ樣の命によりワゲナール一行は便宜の家に移されぬ。遭難後の第一夜に寒氣を凌ぎし家よりも良かりしかど、身の廻りの必要品を失ひたれば、新に高價を以て此等を購はざるを得ざるの不便あり。加之生命も危險ならざるに非ず。そは飢渴に逼れる群集は數千人の隊を作りて餓狼の如く、寒天に暴露せらるる妻子と共に彷徨せればなり。

嚢にギンネモンに與へ置きたるサージ其他のもの火を遁れて無事なりしが、ゴッドンの燒跡より掘出せる銀銅鉛を得たしと熱心に請求せり。ボンヨイス、通譯、ヨヒエ樣も仲に立ちて請ふ所ありたれば、聊か不本意ながら之を與ふることとせり。

ワゲナールが長崎を出發するに先ちて、通譯八左衛門 (Fatsiseymon) はシクンゴ殿に對し、長崎よりバタヴィアに航行する船の長く停まるべき許可を請ひたり。是れ出發を急がるれば損害大なるを以て、少くとも船艙に封印を施されざらんことを願ひしなり。シクンゴ殿の通譯グンエモン (Gunemon) も亦主人に同樣のことを請ひたりしが、彼は母を救はんとして共に火災に死し、八左衛門も今回の火災に遠慮して更に此請願を反覆することを爲し得ざりき。

日本貴族ワゲナールに買品の價を拂はずして去る

然れども此かる中にも凡てのものは失はれたり。其故はワゲナールの獻品の殘りを買受けし身分ある人々は四方に散

じて、何人も金を拂はず、唯安藤右京樣(Ando Ockiosamma)と水戸樣の拂ひしのみ。彼自身の生命も餓民の中に在りて危險なるに、債權者の踪跡を搜すの手段もあらざればなり。是に於てシクンゴ殿に江戸退去の許を乞へり。エムベロルよりは許されしが、閣員の中には今暫く猶豫し、少くとも七日間は滯在するが宜からんと勸告する人あり。そは燒出されたるもの市外に充滿し居りて、見當り次第行人に食を乞ふが如き勢なれば、途中の危險無きを保し難く、且つエムベロルよりは五十人に對する米其他の食料を下賜あるべしとてなり。翌日ワゲナールはエムベロルの命により米六苞を請取れり。ボンヨイスは之を天の賜物とし、蘭使に斯種の恩命ありしこと未だ曾て有らずと謂ひ、蘭人が他の國民に比べて宮廷の覺え格別にめでたきことを喜べり。

ワゲナール江戸を出づ

然れどもワゲナールは去るか留まるか、今や何れとも自決すべきことなれり。彼は之につきて惑ひ居りしが、終に長崎に赴くことに決定せり。そはヨヒエ樣が退去を勸めしが故なり。彼は曰く、道路も報告せられし程には危險に非ず、且つ之を恐るるの要もなし。ボンヨイス、エムベロルの命にて卿等を護衛することなるが故に、別段の危險はあるべからずと。尙曰く、獻品の返禮品、賣品の代價は自分代りて請取り、長崎に於て卿に手渡しすべしと。

ワゲナールは此約束及勸告ありしを以て、三月九日出發せしが、江戸を出づるに大なる困難あり。そは橋梁は皆燒落ち、往々欄干など水上に其影を殘したるばかりにて、橋を渡るべきやうもあらず。故に彼等はエムベロルの城內を通過せり。何處も廢墟なるが、第一の濠の大理石橋は稍く渡り得べし。城內を騎ること一時間弱、漸く他の側に出づべし。それより江戸の東側に出で、終に本道に出でたり。

長崎に歸着す

旅行は閣員の豫言せし程には非ずして、同月二十七日無事都に着せり。大判事牧野佐渡樣より絹の日本服五着及銀十枚を與へられたり。翌日大阪に出でて乘船し、四月七日長崎に着せり。

然るに其後久しからずして下記の三理由より少からざる不便を感じたり。

蘭人、支那人の事につきて日本人と不和なり　日本人蘭人に對して暴行す

第一、長崎在住の日本人は此時大に蘭人を嫌ひたり。臺灣の太守フレデリック・コイエット(Frederick Coyet)はダニエル・シックス(Daniel Six)を船長として、レッド・フォックス(Red Fox)といふ船を淡水、基隆に送り、石炭及水牛の皮を賣らんとせり。此船は基隆よりタヨファンに歸る途中、西風及强力の潮流に流され、基隆にもタヨファンにも達する能はず、有馬灣にて漂ひたる末、終に食料盡きんとせしかば、船長は止むなく長崎に入れり。此臨時の入船は長崎奉行キエモン樣(Quiemonsamma甲斐庄喜右衞門)の不快を買へり。彼はシックスを審問し、其取調書を江戸に送りしが、それより後は審問もなく、シックスは許可を得て石炭及水牛の皮を賣れり。

第二の事件は、支那戎克(ジャンク)が柬埔塞より日本に來る途中、タヨファンに於てバタヴィアを發せる蘭船ドムブルグ(Domburg)に船中の蠟を奪はれたれば、戎克の船員は之を長崎に訴へたり。暴力に訴へて奪取したるは海賊の所爲なりとて、蘭人は名譽を失ひたり。蘭人は極力辯解したれども無效なりき。ドムブルグ號の船長及商人は審問せられて、コイエットの命にて獄に投ぜられたり。

第三の事件は最も緊要なるものなり。ピンク船ブリウケレン號(Breukelen)、アウル(Aur)、カンドル(Candor)兩島の間に於て、一戎克より支那人十一名の捕虜及緋羅紗三片、劍八本、錫十六桶、黃銅製の小砲、其他を奪ひて、之をウ

ルク(Urk)號に渡したり。ウルクは强き潮流の爲に薩摩に近く流され、近海を航行しつつある處を、國守は一小和船にファイセナ(Faisena)と云へる士を載せて遣し、該船を長崎に護送せり。長崎奉行は支那人を引取り、尙船中に在る船長以下二十七人を船より陸上に引致して、ワゲナールの手に渡したり。一般民衆は暴動を起し、蘭人の戸牖に投石して叫びて曰く、此處の蘭人は盜みたる貨物を誇り顏に持來れり。レッド・フォックスも同じ事を爲さんとせしが、思ふままにならず、口實を設けて石炭を賣りに來れりと云ひ、尙又彼等は此海賊は殘酷なる死に相當するものなりと云へり。是に於て奉行は彼等を鎖め、通譯を遣して訊問の箇條を書付けて二十七名の蘭人を審問し、其答辯を詳記して江戸に送附せり。

次に彼等の奪ひたる支那貨物は陸に取寄せられしが、此を見たる長崎市民は叫びて曰く、蘭人の海賊よ、斯くの如き罪惡に對しては如何なる死も足らずと。支那人はウルクがブリウケレン號より奪ひたる貨物に對しては滿足するだけを請取れりとの證書をワゲナールに渡ししが、彼等は又三四日の後に來りて尙多くの貨物を要すと告げたり。之に對して先の請取證を示ししかども效なく、之が爲に長崎奉行はウルク號に就きて支那人の要求せる貨物を再應取調ぶべき命令を下したり。

支那人其貨物をウルク號より同取す

十月十八日搜索は實行せられたり。支那通譯キウーベ(Kioube 久兵衞か)及和蘭通譯はウルク號に出張して、商人メステッケル(Mestecker)の面前に於て凡ての包裝物を解き、容器を披きて檢査せり。精密に搜査を遂げたる末、終に彼等は海員の箱笥の中より綿の小き包二十六個、茶二包、銅鉢、支那上衣四着、竝に袴二着、襪多數、帶、絹の座蒲團、頭髮用の毛網、赤き絹服を發見せり。搜索者は戰勝の獲物として上記の品を持ちて歸れり。海岸には數千の日本人及支那人之を待受け居たる中を、高く捧げて奉行の許に行きしが、奉行は長く之を調べたる後、終に此等の品を支那人に返付せり。

ワゲナールの辯疏聽かれず　日本人、支那人をして蘭人に對抗せしむ

ワゲナールは此行爲につきて辯疏し、バタヴィアの東印度領事は海賊を罰すること嚴しければ、同職は無罪なりと言ひしかど、其效無かりき。長崎の官吏は、それが唯一回なりせば件の辯解に耳を傾くべかりしならんも、戎克掠奪の哀訴を耳にすること殆ど虛日無き昨今に於ては、他樣に考へざるべからず。蘭船はバタヴィアに於て掠奪の命令を受けたるか、或は少くとも印度領事は之を知りて知らざるが如くせるかとも思惟せられざるに非ず。

ワゲナールは其後此報告をバタヴィアに傳へしが、領事は此を以て日本人の怒り易き性質に起因すとせり。其戎克の持主が餘り意に介せぬ所を見ても、又此戎克が日本に行くものにあらずして支那に行かんとせしものなるを見ても、然か判斷せられざるに非ず。而して支那人は日本人が斯くの如き仲介をなすを奇貨とし、和蘭人に對する僞の告訴を提出して得々たりしなり。

ワゲナール日本人の苛酷を愁訴す

ワゲナール又建策するやうは、彼は書簡を以て日本の官憲に對し、支那人は來るごとに蘭人に對する愁訴をなし、日本人に其虛僞の申報を聽かしむるが如きは、蘭人の堪へ得ざることなれば、支那人と親交を絕ち、商館を長崎以外に移轉せんとする趣旨を通知せん。然らざれば今後の面倒を防止する爲に、凡ての船に嚴命を下して、凡ての戎克は國姓爺(Coxenga)にもせよ韃靼人にもせよ、之に干涉せずして靜に通過せしむるを便とすと言へり。

此時に方り、外交に經驗ある者は判じて思へらく、若し日本人が和蘭人の眞筒に長崎を引擧ぐるを見ば、彼等は寧ろ溫和に傾くならん。何ならば彼等は年々の獻品及大貿易を失ふべければなり。加之支那との貿易も、其商品は臺灣及バタヴィアより送らるる海賊の難に遭ふべきを以て、之を失ふ虞あらん。又日本は蘭人が英、葡、西人と相結んで、該帝國に大害を與ふることを憂慮すべしと。

此支、蘭間の爭其高潮に達せし時、長崎第二の奉行ヨヒエ様は九月二十二日江戸より歸りしが、閣員の三人よりの返禮として、エムペロルの上衣三十着、銀六十枚のみを携へたり。是れ和蘭の獻品の返禮としては微々たるものなりき。又江戸の貴族等の負債につきては一錢をも得ず、シクンゴ殿よりは何等の音信もあらざりき。

キエモン様とワゲナールとの問答

其後ボジモン(Bozymon)と稱する日本人バタヴィアより書を寄せて曰く、バンダムに在る者蘭人と開戰せしが、何等の救援も來らざるを以て、飢餓に迫れるもの多數あり。又廣東の東印度會社の狀況は憐むべしと。此書翰はキエモン様(Kiemonsamma)に送られ、キエモン様は卽ちワゲナールを喚迎へて之に關する實情を聽取り、バンタムとバタヴィアとの戰爭は何に因りて起りしか、兩地の距離は如何と問へり。ワゲナール答へて曰く、飢餓、バタヴィアとの戰爭、廣東の事情に關しては何等の情報をも得ず。唯一時の風說に過ぎざるべし。バンタムはバタヴィアと九リーグを隔つと。

キエモン様は尙問ひて曰く、長崎に來る船はフリゲート多し。從來はフライボートの多かりしに、斯くの如くなりし原因如何。エムペロルの命令は蘭船長崎に着するや速に舵機を取れこのことなり。是れ船室に穴を穿たざれば爲し難きを以て大船には行ひ難し。此不便あるを以て從來は其儘になし置きしが、今後はエムペロルの命令を實行すべしと。

ワゲナールはフライボートの多數は長崎を去りたるを以て、手近に在るものを如何なる船にても用ふるの外なしと答へたり。

* * * * * *

エムペロル地球儀を請求す　ウルク號の判決

其頃シクンゴ殿よりエムペロルの爲に地球儀を請求し來れり。曩の一基は他の獻品と共に火災に燒けたるが故なり。又消火機關は何人にも示さず、直に江戸に送ることを嚴命し來れり。然れども長崎の官憲はシクンゴ殿の言を顧みず、身分ある人には每日之を示して、水遊びをなしたり。

前記の命令と共にウルク號の判決も來れり。此判決はヨヒエ様の廣間に於てワゲナール及ボウヘリオン(Bouchelyon)に讀み聞かされたり。其文言に曰く、フリガッタ船ウルク號は他船と共にバタヴィアに向ひて去るべし。十一人の支那捕虜は戎克一隻にて支那に歸らしむべし。ブリューケレン號の奪取りたる貨物及戎克は本主に返付すべし。今後蘭人にして日本に來る戎克を掠奪することあらば、彼等は帝國より永久に放逐せらるべし。又ワゲナールはバタヴィアに歸り、ボウヘリオン其後任とならんとするにより、ワゲナール歸還の上は日本エムペロルの宣告をバタヴィア當局に讀み聽かせ、又臺灣の總督にも知らしむべしと。

藤堂様の請求

ワゲナールの出發より少し以前に、トードータイホ様(Todotaychosama藤堂大學?)といへる大諸侯、前回の船にてバタヴィアより來れる鴕鳥を得んとして巨額の金を提供し來りたれども、長崎の官憲はエムペロルに獻ずるを以て可なりとして、之を賣ることを禁止せり。ボウヘリオンは之に對して不平なりき。飼養及江戸への運搬に巨費を要すれば

なり。又トードーは通譯を介して七面鳥七羽、鳴禽數羽、白鹿二頭、猿二頭、小き飛ぶ鱶雌雄を得たしと申込み、蘭人よりは各地にて十分に搜すべしと答へたり。

通譯スケサイモン(Scheseymon 助左衛門)は、又薩摩侯が重量百三十磅の琥珀を有することを告げたり。價四千ターレルの物なりと。又同國に於て製せし樟腦業は利益少く、職工は之を捨てて銀山に赴きたりといふ。

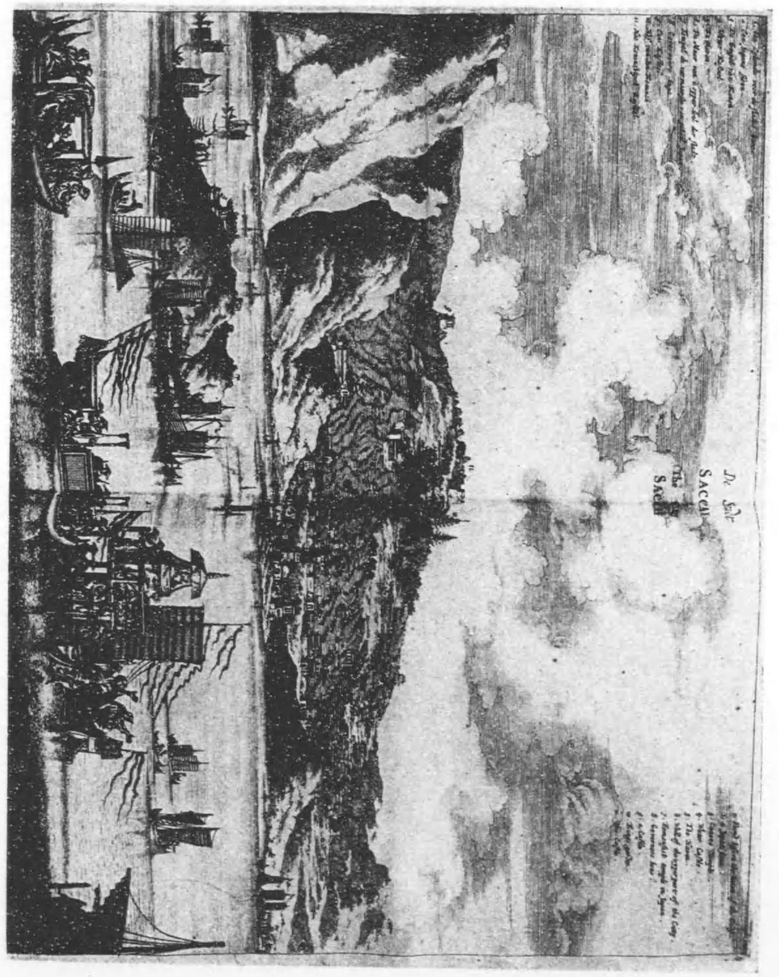
* * * * * *

ワゲナール第二次の遣使　苦しき航海

ワゲナールは一たびバタヴィアに赴きしが、間もなく歸りて、日本エムベロルに第二回の使節を勤むることとなれり。是より先一六五六年のダンコン(Dancon 閣員會議を日本にてかく稱す。談合?)に於ては、使節が前年博多の海岸にて被りし危險を避くる爲に、自今以後は海路を取ることを廢し、豐後(九州を指す)を横斷して陸路小倉(Coceroj)に至り、海峽を渡して下關に上陸するを以て可とすとの議論ありしが、反對者ありて中止となりたれば、從來の如く長崎より二月二日出帆せり。船小にして人は立つ能はず、殆ど牢獄の如く、寒氣も强く、逆風の爲に屢〻投錨を餘儀無くせられ、食物は缺乏せんとし、四十四日を費して三月十七日大阪に着せり。彼は堺の近くを航せり。此市は紀伊の王國に在り。大阪を距る五リーグ、日本に於ける最も莊嚴なる市の一なり。日本はダイロ讓位の後内亂の爲に惱まされ、市邑の廢墟となりしもの多かりしが、如何なる勝利者も此市には手を着け得ざりき。

日本人自ら溺死す

港の前にはピエネス(Pyenes)島あり、周圍に平坦なる海岸ありて人多く群れり。觀音禮拜の爲に來るものなり。第七宗派の僧群集の前を歩み。大なる銅鉢を鳴らして觀音禮拜者を岸に繫げるシオエン(Sioen)に導く。シオエンとは一種異



堺市

堺郊外の大殿堂

様の小舟なり。檣三本と同數の帆あり。檣竝に帆桁よりは長き風見旗及絹の旗流る。船體には蠟を塗り、金色の文様を描く。信者は銅鉢の音に連れて飛躍し、終に船に入り、岸を離るるや、頸と胴と脚とに大なる石を懸けて、觀音の爲に堺港の前にて自ら海中に投ず。投身する前二日彼等は此殿堂の門内に座して偶像と語る。

此投身自殺は必ずしも熱心より起るにあらず、貧困或は病氣の爲に人生に疲れたる者もあるなり。

ピエチス島

ピエネス島には觀音を勤請せる大殿堂あり。山の中腹に石を以て造れるが、大阪なる觀音堂に劣らぬものなり。島の周圍には前記のシォエン數隻其他の小舟、岸に繫がれ、前に云へるが如き目的に供せらる。

*　*　*　*　*　*

堺市の内外の家屋はすべて石造なり。近傍より石材を供給すること豐富なるを以てなり。市の秩序は良く整ひ、盜賊、黨爭等の住民を騷がすもの無し。騷擾起る時は、街門を閉鎖し、犯者を捕へて之を嚴罰に處す。然れども人は爭論を刀にかけて決し、及壁上より投ずる石によりて決するの自由を有す。

堺の大殿堂

堺にて最も著名なるは、日本中他に比類なき大殿堂にして、アラカン (Aracan)、ペグ (Pegu)、東甫寨、臺灣、交趾支那、ボルネオ、フィリッピン、朝鮮、支那、暹羅等の異國の神々、及蝦夷の蠻民より借り來れる一の恐ろしき偶像に捧げられたるものなり。殊に暹羅より來れる溶解せる寶石の女王の偶像は著しきものなり。

*　*　*　*　*　*

ワゲナールは三月十七日大阪に着せり。暴風ありし爲に收獲を減じ、物資少く又高價にして、駄馬其他に例年よりも多額の費用を要せしが、五日の間に必要の品を準備したり。

彼は大阪より牧方を經て淀に行路を取りたり。淀は山城の國に在る小市にして、大阪を貫流する河の上に在り。大阪を距ること八リーグなり。日本に於て愉快なること此市の如きは他に見ざる所なり。精巧なる建築、莊麗なる樓閣、大なる教會堂、甚だ清楚なる家屋あり。窗は光輝ある鎧戸を以て閉し、室は大小種々に區畫せり。壁は金色の紙の上に各種の繪畫を描き、上下各側ともに黑く蠟塗せる框を以て緣を取れり。定設隔壁の戸にも亦壁の如き裝飾を施し、室の上端には大抵畫を懸け、その前には花瓶を置く。是れ通例日本を通じて行はるるものなり。

淀に近くエムペロルの城ありて、深濠より起れる石壁を以て圍まる。その中には莊麗なる宮殿あり、其塔は遠くより望見し得べし。其周圍は一方に森ありて、鹿及野猪多し。他方には愉快なる平野ありて、米及各種の植物を產ず。白鳥、鷺鳥、鵞、雉、鳩、鷗鵠、山鴉、鶉、其他の鳥類を產ずること、此地の如く豐なる處無し。河口は海より上り來る鯛、鮭等各種の魚類に富み、淀にて捕へらるる魚は大阪に於て捕へらるるものより佳なり。此地に於て捕へらるる鯉(原文に鮭(サルモン)とあり)は、內臟を取出したる後も數時間活き居ること珍とすべし。美味なれども、頭部に毒ありて、之を食すること多量なれば熱病に罹る。

江戸に着す

三月二十一日の夕方都に到着し、大判事牧野佐渡樣に面接して、其人より江戸に至る旅行券を得、十三日を經て江戸に到着せり。旅行に意外の時日を費し、例年謁見すべき時期は經過し居たるを以て、謁見を許さるるまでには非常の時日を要したり。シクンゴ殿は老年の爲前年職を退き、エムペロルは北條安房守樣(Hootye Auwanno Cammisam)を之に代へたり。さるにも拘らず、ワゲナールは獻品目錄をシクンゴ殿に送りて、分配方の命を受けんとせり。然るに通譯はシクンゴ殿に赴かず、長崎奉行ヨヒエ樣に至れり。彼は其目錄を數回讀み、其分配方を承認せしが、唯エムペロルの獻品中に黑羅紗二片を添加したしと云ひ、ワゲナールもヨヒエ樣の言なれば之に從へり。又彼はシクンゴ殿は職を退きたりと雖も、從來蘭人に助力を與へたるに、遽に之を除外するは不人情なりと云ひしを以て、ワゲナールは通譯をして其目錄をシクンゴ殿に致さしめしに、彼は今後此事件に關して彼等の爲に力を致すを得ざるが、自分を認めたることは感謝に堪へずと云ひて、其目錄を檢閲すること無く返附し來れり。後任たる安房守も最初の事にて蘭人に關係するを欲せず、蘭人は嚴格にして愛想なきヨヒエ樣の機嫌を窺ひて行動するの外なかりき。

ワゲナールは獻品の保管に心を惱ましたり。彼の宿舍は火災後の新築にして、藁葺の小舍なり。此頃江戸の家屋は凡て此種のものにて、市といふよりも大なる村落たる觀ありき。蘭人宿舍の背後の倉庫も尙壞れたるままなり。然れども ヨヒエ樣はワゲナールに彼のゴッドン(倉庫)を供給し、エムペロルに獻上の際には、獻品の分配に宮殿內の一室を用ふるを許せり。ワゲナールは此移動につきて一考せしが、彼の提供を拒みも出來ず、貨物を荷作りして送屆けたり。

エムペロルに謁見す

其中に閣員及日本の諸侯は二月二十八日エムペロルの前に出づべき命令出でたり。此日は我が四月九日、十日に當れり。ヨヒエ樣は二日以前にワゲナールに之を通知し、彼及隨員が盛裝して指定の日午前九時に宮中に出づべきことを命じたり。當日となるや、ワゲナールは夙に起き、ヨヒエ樣の館より獻品を取寄せ、宮中に出でて之を公衆の眼前に置けり。然れども最も彼を苦しめしはベンゴール牛なり。數千の日本人は之を見んとて待受け、終日路を塞ぐばかりに群集せり。之を防ぐ爲に蘭人の旅舍前なる牛には赤フランネルを以て被ひたり。絹の總、薔薇花、鍍金鈴、各種

の紐を附けたるものなり。黎明前通譯は之を宮中に牽きたり。此處にてワゲナールは指定の時刻に彼等と會せり。彼は二時間エンペロルの小宮殿中に在りき。此宮殿は大宮殿よりも西方に立ち、二年前火災にて大宮殿の燒失後エムペロルは此處に住めるなり。

謁見の樣

其中ヨヒエ樣は例の扣室に來りてワゲナールの手を取り、立派なる廻廊を經て、エムペロルの座處に導けり。エムペロルは直立し、面を地につけて俯伏せるワゲナールよりも、獻品殊にベンゴール牛に着目し居れり。暫時にしてワゲナールは彼の出で來りたる廣間に退出することを命ぜられ、此處に隨員と共に休憩し居たるが、一人の貴人來り、二名の蘭人中庭に來りて、閣員（其中にはエムペロルもあり）に示すに、ベンゴール牛に裝具して車に附け、それを牽かしむる方法を以てせよと閣員の名を以て命じたり。即ち命の如くせしに、太くエムペロルの旨に協ひて、日々牛牽く樣を見たしとの事なり。又金銀にて織りたる見事のアルカチフもエムペロルの嘉納する所となりたりとなり。エムペロルは獻品とベンゴール牛とを見るに二時間を費し、それよりワゲナールは出發を許されぬ。之を傳へたるヨヒエ樣に對し、ワゲナールは其速なる執成を謝せり。翌日彼は他の獻品を、閣員及江戸の大官、又身分ある人にして年々東印度會社より獻品をなす向々へ贈りたり。之を其家に送屆くれば、僕出でて之を受取り、主人は曾て顏を見ること無し。ヨヒエ樣は本年新に閣員として井上河内樣（Inoube Cauwatsisamma）、板倉阿波守樣（Itacera Auwanna Cammisamma）の二人任命せられたれば、之を忘れざるやうにとの注意あり。此等にも獻品をなせり。

此年の旅行は多くの故障の爲に費用巨額に上れり。海路は逆風の爲に、陸路も亦天候惡しく、例年より長時日を要したるに、火災後各種の食料品乏しくて非常に高價なる江戸に三十日滯在し、又新閣員へ豫想以上の獻品をなさざるを得ざりしを以てなり。獻品の殘餘につきては、ヨヒエ樣は之を長崎に持歸ることを勸告せり。若し之を江戸にて賣らば、貴族の間に不平嫉妬を起さしむるに至るべしとなり。彼又曰く、蘭人は目錄を長崎にて作り、不用の品を江戸に持參せざるを可とすと。然れども、ワゲナールは往年特に蘭人が獻品以外の賣品を持來るべき命令を受けしことあり、其理由は新に任ぜられたる諸卿に獻ずる爲に、又金錢にて手に入れんことを欲する諸侯もあればとてなり。此趣をヨヒエ樣に告げしに、彼は滿足して膏却を許し、ワゲナールは五百五十磅を得たり。但し將來は長崎にてヨヒエ樣の勸告の下に獻品目錄を作ることとせり。從來はシクンゴ殿に之を一任したれども、今後は其指導を仰ぐを得ざればなり

然れども、シクンゴ殿は尙蘭人に對し大なる好意を有せしが如し。彼は彼の希望せし瀝青、優等の帆木綿、草花の種子等の贈品を受けて甚しく喜びたり。尙藥品を成るべく急に送らんことを請求せしかば、ワゲナールも急ぎ取計ふべしと告げたり。シクンゴ殿は和蘭の東印度貿易に利益たるべき事は努めて奬勵するを怠らざるべしと云へり。彼は宮中に氣受よく、又日本の大事件を裁斷する閣員エニモ樣（Eninosamma）とは最も親しきが故に、大なる可能力を有せしなり。

日本貴族の不義理

日本の貴族が火災後延滯せる負債は、既に二年を經たれども、蘭人は之に關して消息を得ず。日本人の祕書ニモン（Nimon）と云ふ者をして屢〻要求せしめたれども、效力無かりき。債務者は身分高き人なれば、之を督促するも危險なり。又其家臣も主人が上機嫌の折を見ざれば此種の件を言出し得ずといふこともありしなり。中にも采女殿（Oenemidonne）といふは、如何なる品をも購ひたること無しと云へり。されば通譯も督促に行く爲には雇はるる者無く、負債を督促するが如きは能くせざる所なりと云へり。然れども、ワゲナールは書面を贈りたるが、之に對して拂ふべしと約束したれ

ども、其約束に從ひて人を差向くれば、彼の家臣は主人は田舍に行きたりと告げて、終に拂はざりき。

蘭使閣員の前に出づ　北條安房守の問　ワゲナールの答

從來エムベロルより蘭人に對する返禮は旅館に送り屆けられたるが、今回は宮中に出頭して之を請取り、同時に出發許可を受くべき由の命令あり。此くてワゲナールは四月二十九日宮中に出でたり。而して控室に待つこと一時間、シクンゴ殿の後任者北條安房守樣に案内せられて、非常に立派なる室に入り、四人の閣員の前二十歩の處に出でたり。其背後には身分高き人數人座せり。安房守は通譯を以てエムベロルと閣員の名に於て問を發して曰く、マニラに於ける西班牙人又は臥亞に於ける葡萄牙人が日本に對して惡計を企てん時、若し蘭人が之につきて折よく覺知せば、汝等は抵抗の準備をなす爲に之を長崎奉行に知らすべしや否や。若し知らしめんには、汝等蘭人はエムベロルの御意に協ふべし。エムベロルが日本に於て少しの妨も無く自由貿易を汝等に許せるは、斯くの如き好意の報を得んと欲するなりと。安房守は尙之に附加して曰く、蘭人は日本と貿易する支那戎克に侵入して其財物を奪ひ、海上を危險にすることあるべからず。過般の戎克襲擊事件は未だエムベロルの知る所とならずと雖も、若し蘭人にして海賊の行を止めずんば、噬臍の悔あらん。平和の隣人たる支那人が貿易上の妨害を受くることは、エムベロルの放置し能はざる所なりと。

ワゲナール曰く、蘭人は深く日本帝國に感謝す。故に日本に利益あることは何事にても之を爲さんと欲す。西、葡人が日本を覬覦せんとするやうなることを聊にても知らば、必ず之を長崎に報知すべし。支那船の掠奪は無謀なる海員の行ひしことにして、バタヴィア政聽の毫も關知せざる所、罪人は之を嚴罰に處して他の訓誡となすべしと。

エムベロルの贈品

此答は閣員をして喜ばしむることと甚しく、エムベロルの最美なる上衣三十着を三枚の長板の上に乘せて持來らしめ、安房守の曰く、蘭國使節よ、卿の獻品はエムベロル之を嘉納あらせられたり。之に報いる爲にエムベロルより此品を下賜あり。又卿に出發の許可を與へられたりと。終りてワゲナールはヨヒエ樣に導かれて護衛の室に出でたり。彼はワゲナールに對し速に出發の許可を得し喜を述べ、エムベロルの恩寵を賀し、旅行中の需要品に關しては最善の取計を爲さんと云へり。

蘭人の贈品返還せられし所以

又尾張、紀の國、エムベロルの叔父水戸の諸王、又閣員美濃樣は血色珊瑚珠の一連及ローベ(Looper)鐵六片を請求せり。ローベの形は紙に書きてワゲナールに與へられたり。美濃樣は望遠鏡を請求せり。依りて直に之を送りしに、暗しと て返還せられたり。然るに是れ其家臣等が用法を知らざるに由りしなり。是と同じくレムベルト・ドドヰウス(Rembert Dodeneus)の植物書を贈りしが、書中の花卉植物の圖が寫生的にて精巧なるにも拘らず、美濃樣は之を返したり。印畫が餘りに小く、且よくも描かれあらずして、大册にして美麗に描かれたるものを請求せり。又地球儀も餘り賞美せられざりき、是はアムステルダムに於て日本エムベロルの爲に爲し得る限りの技術を盡して作らしめしものなるが、彼等は其價値を知らざりしなり。但し或人は其球面に現れ居る歐洲の主なる王國を見出して指點せしもあり。然るに遊星を現したるものに關しては奇なる考を抱き、多數の人は斯くの如き人及動物が人目に觸れずして雲に附着せるものとし、他の者は實際かかる物が天に住すとせり。

ワゲナールの長崎に至る旅行

ワゲナールは三十日間江戸に滯在し、五月四日其處を出發せしが、十四日にして大阪に着し、二十日同地より乘船、八日を經て下關に投錨せり。

通譯及ボンヨイスは水先案内に對ひ、豐後と日本本土の海岸との間の海峽を過ぎて朝鮮海に向ふを禁止し、貿易風の季節經過せるを以て、長く海上に居らざるべからず、風は斷えず逆なるを以て前進し得ずと云へり。蘭人も閣員の意見に從ひ、陸路長崎に至り、不確實よりも確實を取らんとせり。海上よりも陸上の安全なること確なればなり。

然れども新しき行路を取ることは新なる障碍竝に費用を來さんことを恐れ、ワゲナールは之を好まざりしが、通譯及ボンヨイスはそれにも拘らず、專斷にも下關より豐後なる小倉に渡りて上陸するに決せしかば、ワゲナールも今は有無を言ふを得ず之に從ひたり。

此の旅行は危險なりき。岩の間を流るる川を徒渉せざるべからず、嶮しき河岸と其の測られざる水深とは愈々之を困難ならしめたり。又此等の危險の外に不便なることもありき。此豐後又西國と稱せらるる島は、小倉より長崎までの間にては貯藏品の少き處にて、食料品は最劣等のものといへども得べからざりき。

ワゲナールは五日間旅行せり。山鹿の岬 (Jammanganonisacci) 及葦屋 (Assia) を右手に殘して。博多及肥前の諸王國を經、こ止みも無き雨にて泥濘甚しき道を進みたり。

肥前市及ダイマツ城

彼等は肥前市に於て休養せしが、各種の食料を得たる中にも、殊に鮭に似たる鮮魚は美味なりき。ダイマツ城 (Daymats) を洗へるダイ川にて捕へたるものなり。

此城は外觀頗る美なり。城主は河の中央に於て大なる圓柱の上に建てられたる饗宴の家を有す。此柱の間を急湍流る。此家には快く且廣き室數個あり。最も低く突出せる屋背は多くの金の球を以て飾れり。その下には風雨を避けて多くの遊船かかれり。

ダイマツ城市には稅關吏の宅あり。河を上下する船の關稅及附近地方の納稅を受く。之が爲に人々は常に此處に集來せり。旅人が轎輿に乘りて水門に來らざる時間は一時間も無し。或は馬に騎りて行くもあり、或は荷物を背負ふもあり、或は牛車に積めるもあり。

* * * * * * *

城市より一路あり、山を上りて城に達す。城は厚く高き壁に圍まる。其上に莊大なる建物の屋背見ゆ。四門あり。六箇の高樓は華美他を壓す。其中五層を有するもの五、六層を有するもの一なり。其莊麗觀者の目を眩す。

城と市との中間に美しき堂宇あり、僧侶日々勤行を營めり。

肥前市は大部分は城の背後の谷に隱る。高き殿堂樓閣あり。戶數二萬以上。

ワゲナールは大村の州を經て、アウオ (Auwo)、タブラ (Tabra)、アイノロ (Aynoro)、オイシヌコビ (Oysinucobi)、オモダケ (Omodakey)、ナンツャャ (Nantsjamma)、ゼッタ (Zetta)、ホクンダ (Focunda) を右に見て、六月二日長崎に着せり。小倉に上陸してより第五日なり。時に臺灣よりの報知を得たり。曰く韃靼人と國姓爺とは講和せんとす。故に國姓爺は南京海岸に在りて其締結を待てりと。……

日本人の商品を賣る樣

ワゲナールは貨物を滿載せるブラックブル號 (Black Bull) を待ちて、十一月一日まで停り居りしが、同船は來らざるを以て、東京絹、歐洲の裂地類、暹羅毛皮等を販賣して、ブラックブルの船貨は翌年發賣することせり。此船の來航の遲延せしは、日本にて當時金貨の變動ありて、充分の利益を得る能はざるを以てなり。

* * * * * * *

同月は一年一回の日本市立つ。日本人は帆木綿を張りて小屋掛を作り、銅、銀、支那草根、樟腦及樟腦木、精巧なる陶器の皿、絹、外部に金銀の刺繍して綿を入れたる日本上衣、米、煙草、蠟塗の箱等を陳列す。此くして彼等は貨物を賣る間も酒を飲みて騒げり。此酒は最良の小麥より作り、奇臭ありて、西班牙、葡萄酒の如く强烈なるものなり。官吏ありて賣品を保證す。銀及銅は秤にかけ、エムペロルの極印を附して箱に入れて渡さる。大抵東印度會社は其商品の代として、一回の賣買に銀六百箱、銅二千箱を收む。然れども時に增減あり。銀一箱は千クラウンに上る。

マルチン・レメイの事件

同時にワゲナールはバタヴィアに赴かんとしてシンギング・バード號(Singing Bird)を準備せり。然るに次の事件の爲に支障を生じたり。そは臺灣の土人マルチン・レメイ(Martin Remei)と稱するもの、タヨファンより醫としてニウボルト號(Nieuport)と共に長崎に來り、陸上に生活するの許可を得、出島の倉庫の後に三人の商人と共に住せしが、十一月十三日の朝所在を失ひたり。然るに後に至りて床中より遺書を發見したるが、其記す所によれば、彼は三日間同棲せし日本の娼婦の逐電せしによりて、生活の愉快を失ひたれば、自決するといふ意味なり。ワゲナールは生死に拘らず彼を搜索せしめたれども、發見するを得ず。終に日本官憲に告げたるを以て、官憲はボンヨイス、通譯又は部下の官吏に命を下して、各戸及潛伏處を探査せしめたり。彼等は蘭船、戎克、日本船を搜索し、長崎全市は大混雜を來せり。ワゲナールは出島の周圍の海中に網を投ぜしめたれども、レメイは發見せられず、折から奉行等は、支那より來りたる葡僧が猶未だ發見せられざる基督教徒と共にレメイを隱蔽せるなりと報告したれば、太く心を惱したり。然れどもレメイは十一月十五日の夕方出島にて捕縛せられて送りこされしかば、此風說は直に消滅したり。逃亡の當時監視に任じ居りしものどもの喜限り無し。そは職務怠慢の故を以て生命を失ふことを免れたればなり。

此レメイは夜間退潮に際して、壁を越えて長崎港の東側に出で、支那の墓莚の帆の内に隱れ居たりしが、飢餓に堪へず出で來りし處を直に捕へられしなり。此くて奉行の許に送られ、奉行は之をワゲナールに送りしかば、ワゲナールは之を拘束し置き、後臺灣に送附し、處罰を受けしめたり。

此時奉行は上機嫌なりしかど、若し然らざりしならば、取扱方甚だ嚴酷にて、蘭船の長崎に着するや、日本人海員の氏名、年齡、及所役を少年の末に至るまで書附に認めたるものを取り、若し出帆の際一人にても足らざる時は、其人の天命にて死したることを證明するか、或は長崎官憲が出島に居殘ることを許可したるにあらざれば、船も船員も之が爲に難澁を感ずべかりしなり。

蘭國外科醫の事件

二年後にも同樣の事件起れり。ヴォルレンホーヴェン號(Vollenhoven)附屬の外科醫の好奇心より發生せしことなるが、此人夜間海に投じて或戎兌船に泳ぎつき、之によりて支那に航せんとせり、其時水先案内は之を指揮者インヂーク(Indiik)に報告し、後者は之を日本官憲に報告したれば、官憲は直に兵士其他を派遣して搜索せしめたり。若し彼の醫師にして發見せられざりしならんには、蘭船を陸に引揚げ、貨物と人とを併せて火をかくべしと威嚇せり。第三日に至りて脫走者は支那の戎克船中より牽出され、手足を縛せられてエムペロルの獄に投ぜられしが、非常の苦心と巨額の金とを以て此處を脫走したり。但し彼は永久に日本より追放せられ、若し再び顏を出さば死刑を免るることを得ざる筈にてありき。

醉酩船員の事件

爰に又グラーヴェランド號(Graveland)の船員酒に醉ひて、船艙の藁繩の封印を切りしことあり。翌朝通譯、船に來り

し時、エムペロルの紋章が一船艙より剝取られてありしを發見したれば、直に船首なる美氈の上に座せるボンヨイスに之を報告せり。ボンヨイスは直に船艙に封印を施して奉行に報告せしに、奉行は兵士二十人を派出して故意に紋章を破毀したる罪人の引渡しを要求し、もし渡さざるに於ては、船員を盡く獄に投ぜんと云へり。是に於て罪人は自首したれば、官憲は之を陸上に送り、刀を揮ひて左の肩より斬付けて、其刀を右腕の下に現れしめたり。

* * * * * * *

ワゲナールがバタヴィアに出發の準備に着手せる時、優等の白陶器二萬一千七百六十個を請取れり。一箇月以前に他の一人が出島にて賣らんとて多數の陶器を携へ來りしかど、花の圖樣あまりに繁かりし爲に、大抵は賣主の手を離れざりき。

日本人製陶に力む

此數年日本人は以前に增して陶器製造に意を注ぐことなりしかば、蘭人のみならず支那人も陶器を賣ること多かりき。

此上品を出すは肥前侯の領内にて、此地の土質が他よりも精良にして白かりしなり。日本人は年々此技に經驗を重ね製品の改良を示せり。ワゲナールは青地に小き花を描くことの意匠を案出せり。然るに久しからずして該模樣の品が凡ての店に充ちたるには驚けり。

* * * * * * *

日本人蘭船を港外に出す

ワゲナールはヒルヴェルソム號(Hilversom)に駕してバタヴィアに歸らんとて、大砲を載せ舵機を取付くるや、貨物は尙甲板に散在したるに拘らず、直に出港せざるべからざりき。是れ卽ち從來の規則によりて、武器を載せたる上は、如何なる事情あるも直に出港すべき定なればなり。船は途中にて少なからざる危險に遭ひしが、一六五九年十二月バタヴィアに到着せり。

同船にて歸りしインヂークは再び日本に派遣せられ、ボウヘリオンの後任となれり。彼は一六六〇年十一月二十六日を以て出帆せり。日本に於ける東印度會社の貨財の責任及指揮は、インヂーク之を帶ぶるに至りたれば、祕書三右衞門殿(Sannemondonne)及モーテフノストリ殿(Mootefnostrydonne)(習慣に從ひ)長崎奉行の名を以て祝賀の辭を述べ、火燭の用心を彼に希望し、又出島に居るべき蘭人の名簿を取れり。其人數十九人なり。其中にはインヂークの子女もあり。又東印度會社に使用せる黑人は此外なり。

* * * * * * *

長崎奉行インヂークを訪問す

此後長崎奉行カイヌシオ(Kaynussio 甲斐庄喜右衞門)死し、妻木彥右衞門(Tsoemangy Ficojemon)後任となれり。インヂークは直に通譯と乙名(おとな)(Ottena出島の日本役人)をして新任を賀せしめ、又自ら獻品をなす爲に訪問したしと申入れたれば許可せられ、卽ち獻品を携へて之を訪問し、厚意に預りたしと請へり。彥右衞門は慇懃に獻品を受け、和蘭貿易の發展の爲に力を盡すべきを約束せり。彼は後多數の從員と共に出島にインヂークを訪問し、倉庫の前なる蘭風の庭園、殊に歐洲の珍品及エムペロルへの獻品などを見て大に喜べり。インヂークは砂糖漬の波斯果物、ブランヂー、テント酒などを以て饗せんとせしが、彼は其一をも味はずして去りたり。

其後久しからずして彦右衛門の迷惑せし事あり。一市民の娘、夜間長崎に於て自經せしことあり。其原因を嚴探せしに、或支那船の船長此女子を戀慕し、多大の約束をなし、且つ一日本人の援助によりて終に思を遂げしが、彼女は後に至りて自ら省み、若し子を產むに至らば、罪も現るべく大なる恥辱を見るべしとて、終に自殺を決したること明になれり。罪人等は捕はれて獄に投ぜられ、生命も危かりしが、救解者ありて穩和の宣告を受け、支那人は日本より追放せられ、彼を幇助せし日本人は五島に謫せられ、其財產は官に沒收せらるしが、大部分は娘の父母に與へられたり。

* * * * * * *

長崎の地震　羅馬教徒迫害せらる　基督教拒否の法

十月二十九日長崎に於て地震あり。翌年一月三日の夜にも亦劇震ありて、大なる危難を感ぜしめたり。家の接目は口を開き、柱及壁は倒れ、全市叫喚に充ちしが、朝に至りて止みたり。然るに同日は羅馬教徒二十五人の刑罰の爲に又一騷ぎをなせり。彼等は堪へ難き苦痛の後にも改宗せざるを以て、今や市外に引出され、足を上に頭を下に吊られて、徐々に死に就かしめられたり。其中二人は一日一夜此狀態に在りし後、今は苦痛を忍びがたしとて、長崎市の官憲の前に出でんことを願ひしに許されたれば、彼等は官憲に對して日本の宗教に歸依することを申出で、此約束によりて繩を解かれし後、十字架に唾を吐きかけ、基督及マリアの畫像を蹈みたり。殘餘の人々は之を視て悲しき思をなし、此くまでにして釋免せらるることを希はず、啼泣して曰く、我等は程無く此濁世より出でて天國に往くべく、此處には日本の暴人の手を離れて永久の樂を享くべきなりと。

羅馬教徒七十四人の斬殺

上記の羅馬教徒が七日七夜逆に吊られ居る間に、更に七十四人の基督教徒發見せられ、斬首せられたり。彼等は疲勞の身の許す限り高く叫びて曰く、基督教に忠實にあれ、久しからずして我等は天にて相逢ふべしと。七十四人の中には婦人小兒ありしのみならず、哺乳兒もありて、皆一樣に首を刎ねられ、其首は鐵釘の上に置かれ、身體は深窖の中に投ぜられたり。インヂークは之を目擊せしが、其操守の變ぜざるを讃嘆せり。殊に日本の殉教者が基督教に就きて知る所無くして是に至れるには、一層の吃驚を禁じ得ざりき。通譯者は彼に告げて曰く、彼等が基督教徒なりと稱するは、食料殊に米の缺乏の爲に扶養し得ざる妻子と共に死して、現在の苦患を脫し得んと欲してなりと。

二月四、五、六の三日は嚴寒にして、凍結せる水面は三人の人の重量を支ふるに足れり。又都にては同月十四、十五の兩日失火あり、七十町を灰とせしのみならず、ダイロの莊麗なる宮殿も燒失したりとの報に接せり。

オンナイス宮殿

三月二日インヂークは小倉に赴けり。此處にて大村侯はトキツ(Tokits)よりスモンギ(Smongy)への渡船を供給せり。此二市に於ては市民は路を掃き淸め、皆外に出でて和蘭使節を歡迎せり。スモンギの一方に有名にして莊麗なる宮殿オンナイス(Onnays)を見る。入口は相隣せる二岩の中間に階段を切り開けるものにして、石級十六段あり。第十六段に於て階段は二に分れ門の兩側に上り、後又合して一となる。門は岩に支へられたる方形の上に建てられ、其前には柵あり、其下は幾多の十字形を以て固めらる。方形の上には二重の柵あり。門には二の弓形の入口あり、中央には二本の密着せる圓柱あり。弓形の下を通りて宮殿に入ることとなれるが、其弓形の上手に外庭ありて、其中に莊麗なる廣堂あり、鍍金の屋背を以て飾らる。其端に二個の鍍金の球あり。第一門の入口を通して內部の門を見る。十級の廣き階段あり。此門には三個の入口あり。屋背の四隅には鍍金の臥龍あり。此內門は長き廻廊の中央に開く。廻廊は左右兩

側に於て二個の三層樓を有し、寶物を藏す。其一方には花卉に富める快適なる庭園あり。寶庫の背後には更に二個の樓閣ありて、城主の妻妾住めり。

此地方に於ては弘法大師(Conbodaxi)と云ふ僧に捧げたるコヨ(Coyo)市の名甚だ高し。興後王の墳墓の地なり。彼等は他所に葬らるることありても、其齒のみは此地に葬るべき定なり。

インヂークの江戸に至る旅行

インヂークは小倉より下關に渡りたるに、曩に貨物を積みて朝鮮海を經て航行せしめたる船着し居たれば、三月七日之に乘り、七日にして大阪に着せり。蘭人旅館イクビヤ・セロエモン(Icubia Serojemon)及通譯をして二人の地方官に到着を通知せしめ。之に謁見して翌日獻品をなせしに、彼等は快く之を納れたり。其後インヂークは馬の準備をなして、牧方、淀、伏見を經て都に到着せり。此處にて舊知コッヘ・サブロエモン(Koffe Sabrojemon)の紹介によりて、大判事牧野佐渡樣に面會して獻品をなし、其紹介書を得て、時を移さず都を出發し、其日草津に泊り、翌日は坂に一泊、桑名より宮に出でて休憩せり。

岡崎にては蘭使の宿すべき家は閉鎖せられて、護衛を附せられてありたり。此は其主人が隣人等と爭を起して殺されんとする恐あるが爲なりと。去りてアコサキ村(Accosacci)に一泊、新居、舞阪の間を渡船にて越し、大驟雨の爲に濱名に一泊す。翌日は金谷に泊らんとせしかど、定宿は亦閉鎖せるを以て、闇夜且つ降雨なるにも拘らず前進し、大井川を渡りて島田に休養せり。丸子にても亦從來の旅宿は主人駿河に往きて、留守の人も不在の爲に、通り越したり。聞けば主人の不在は、其子息が村人の一人と私鬪せし罪にて入獄せしを、救解する爲なりと云ふ。江尻、三島、小田原、戸塚に宿泊し、一六六一年三月二十八日江戸に到着せり。全市民は災後の建築に力を傾けてありたりとは見えたれども、空漠の街衢猶少からず、橋梁は未だ修繕を經ざりしを以て、蘭使等は大迂回をなして定例の旅館に着くを得たり。

江戸着後の蘭使

江戸に到着するや、彼は通譯八左衛門及旅宿の主人銀右衛門を遣して、ヨヒエ樣及北條安房守樣に到着の旨を報告せしめたり。八左衛門及銀右衛門歸りて曰く、兩卿は無事安着を賀し、且明日閣員に報告すべく、何時謁見の命あるか屬り難きにより、急に獻品を整へ置くべしと。

シクンゴ殿はインヂークの入京前二日に死せしが、其祕書主人の名を以て前年註文せし品の授與を請へり。然るに八左衛門は再びヨヒエ樣を訪ひ、インヂークの名を以て私の會見を請へり。ヨヒエ樣は彼に語りて曰く、閣員より聞く所によれば、エムベロルは長からぬ以前に、和蘭使節は來らずや、年も暮に近づけるにと下問ありしに、閣員は間もなく到着すべしと答へたりといふ。エムベロルの此下問は、和蘭人の事がエムベロルの胸憶に在る譯にて、非常なる光榮なりと思ふと。然るにインヂークの求の儘に、エムベロル其他への獻品目錄をヨヒエ樣に示して、如何に此等を增減すべきかの意見を尋ぬるや、彼は是までの親切なる語調を俄に一變せり。彼は之を讀み、其價格を計算せしが、憤怒の聲を擧げて、何故蘭人は年々獻品を減ずるか、此割合にて進まば近き中には皆無とならん、粗布の外には何物も無きに非ずやと。

インヂーク、ヨヒエ樣に欵待せらる

八左衛門歸りて之をインヂークに語りしが、インヂークに取りては、若し通譯を信賴すべき者とせば、此報告は不思議に思はれたりしならん。然れども彼が大なる詐僞漢たることは知られ居たるを以て、之を如何に處分せんかを知らず。殊に獻品は種々の珍品の外に前年に比して決して減じ居らざるに於てをや。然れどもインヂークは終に勸告に從ひて、